

東京農業大学地域環境科学部

造園科学科指針 2025





中 東京高等造園学校 創設者・初代校長 上原敬二先生
左 東京高等造園学校 第二代校長 龍居松之助先生
右 東京高等造園学校 初代理事 井下清先生

◆はじめに◆

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

皆さんは、SDGs 等、世界の人々が最も注目している地球又は生活レベルの「問題」を学術の対象とする「地域環境科学部」の、しかも、ランドスケープとしての環境計画・設計、環境資源としてのランドスケープ資源・植物、環境を具現化する景観建設・技術の各分野へ果敢に挑んでいる「造園科学科」で、これから4年間の大学生活を送ります。今、まさに造園家への道の第一歩を踏み出しました。東京農業大学の造園科学科で「地についた環境科学から、造園科学まで」を自ら積極的かつ貪欲に学び、地球環境問題の解決に「造園学」の知識と技術で貢献できる人材に皆さんがなることを期待します。

本冊子は、地域環境科学部造園科学科の歴史と沿革、教育の目標と方法、教員スタッフ、研究室、将来の進路など、造園科学科の内容を総合的に解説し、皆さんの勉学に役立つように編さんしたものです。まずは、全体を通読することによって、早くこの学科の全体像を理解し慣れていただくと同時に、これから4年間にわたって、大いに活用されることを願っています。

造園科学科は、その前身である東京高等造園学校が1924（大正13）年に創立されてから、2024（令和6）年で100年を迎えました。これまで、それぞれの時代の社会的ニーズを受け入れながら、また多くの卒業生の協力を得ながら、教育プログラムの改善に努め、造園分野の教育機関としては世界でもトップクラスにまで発展してきました。環境の世紀といわれる今日、環境回復の切り札とされる生物を中心とした多様性ある社会の構築が期待されています。造園科学科は、それを具現化するランドスケープの創成に立ち向かっています。

造園科学科の教育プログラムは、「造園科学コース」として「日本技術者教育認定機構」（通称 JABEE）の認定を受けています。本学科の教育プログラムは、カリキュラムの進行にあわせて教育内容の見直しを検討するとともに、常に新しい時代の社会的ニーズに応えるべく、また国際的にも通用する世界水準の教育システムを目指して、学部・学科の教員スタッフ、学生、卒業生が総力を挙げて、自己点検と改善をおこないながら日々努力しています。

私たちは、造園学に対する教員スタッフの熱い思いを託して、この冊子を学生の皆さんに贈ります。

◆造園科学科指針 目次◆

はじめに

1. 造園学の学び方 12 章	1
2. 造園学教育の黎明	5
2-1 造園学 (5)	
2-2 世界と日本の造園学教育の黎明 (5)	
2-3 東京農業大学造園科学科の設立と歩み (7)	
3. 教育理念と人材育成の目標	21
3-1 地域環境科学部における造園科学科の位置付け (21)	
3-2 造園科学科のアドミッション・ポリシー (21)	
3-3 造園科学科の教育・研究上の目的と教育目標 (21)	
3-4 上原敬二の造園学への「まなざし」と「教育理念」(21)	
4. 研究・教育体制と施設	23
4-1 研究室における教育と研究 (23)	
4-2 教育の分野と研究室の構成 (23)	
4-3 教員のプロフィールと専門分野 (25)	
4-4 客員教授・非常勤講師 (2025 年度) (28)	
4-5 造園科学科の研究室と演習室 (29)	
5. 研究室ガイド	31
5-1 環境計画・設計分野の研究室 (31)	
5-2 ランドスケープ資源・植物分野の研究室 (39)	
5-3 景観建設・技術分野の研究室 (47)	
6. 教育カリキュラム	51
6-1 造園科学科の学習・教育目標 (51)	
6-2 学年進行と科目の配当 (54)	
6-3 選択科目の履修について (54)	
6-4 専門分野と専門家育成シナリオ (54)	
7. 資格取得	57
7-1 造園施工管理技士、土木施工管理技士について (57)	
7-2 測量士補の資格取得 (57)	
7-3 樹木医補の資格取得 (58)	

7-4	自然再生士補の資格取得 (58)	
7-5	技術士及び技術士補について (58)	
7-6	登録ランドスケープアーキテクトおよび RLA 補 (59)	
8.	造園科学科の技術者教育と JABEE	63
8-1	JABEE の目的と造園科学科の教育カリキュラム (63)	
8-2	JABEE 認定と技術者の資格 (63)	
8-3	「技術士」の資格取得までの仕組み (63)	
9.	造園科学科の国際化	65
9-1	国際的活動 (65)	
9-2	海外協定校 (65)	
10.	大学院造園学専攻	69
10-1	造園学専攻の経緯 (69)	
10-2	造園学専攻のカリキュラム (69)	
10-3	MLA アワード受賞者と受賞論文題目 (70)	
11.	特別教育プログラム	71
11-1	公務員志望者のためのプログラム (71)	
11-2	造園系業界研究会 (71)	
11-3	造園伝統技術の継承と開発のための国際的教育活動 (71)	
12.	造園の職能と卒業生の活躍	73
12-1	造園の職能と職域 (73)	
12-2	卒業生の活躍 (73)	
12-3	東京農業大学緑友会 (76)	
13.	レポートの書き方・課題の作り方	79
13-1	表紙の書き方とレポートのまとめ方 (79)	
13-2	本文の書き方 (79)	
13-3	図・表・写真のタイトルの書き方 (79)	
13-4	引用文の扱い方 (80)	
13-5	引用・参考文献の書き方 (80)	
14.	卒業論文・卒業制作ガイド	81
14-1	卒業論文・卒業制作の意義 (81)	
14-2	卒業論文優秀賞 (81)	
14-3	卒業論文の作成 (81)	
15.	ポートフォリオの作り方	89
15-1	作品（材料）を整理する (89)	

- 15-2 作品の完成度を高める (89)
- 15-3 作品の編集・レイアウトを考える (89)
- 15-4 全体の構成・流れを考える (89)
- 15-5 ポートフォリオは一生つくり続けるもの (89)

16. 学生時代に読んでおくべき本 100 選	93
17. 学生時代に見るべき空間と風景 100 選	99

1. 造園学の学び方 12 章

1. 造園学の学び方 12 章

造園を志し入学した造園学生として、その資質の向上を図るため、4年間の学生生活で修得しなければならないことは数多くあります。その学び方については十人十色で、各人の個性に合わせた学習の方法を身につけることが望ましいことは言うまでもありません。

ここでは造園学のもつ特性を考慮し、造園学生として最低必要な素養を身につけるための学び方の心構えを述べることにします。

1. 「農」に学ぶ姿勢をもつこと。

自然に対する英知をもち、弛まず土を肥し、作物の収穫に撫育の精神をもつてのぞむ「農の心」は造園家の基本姿勢、すなわち自然を慈しみ、人間のために合理的に活用することと直結します。ドイツの著名な植生学者のチュクセンは日本の水田を見て、正に庭園であると指摘したといわれます。水田ばかりでなく、日本の農村は田や畑、薪炭の採取のための雑木林、木材取得のためのスギ・ヒノキ林などが混然一体となって美しい風景を形成していました。この風景は農民、林業家のたゆまぬ農耕・育林作業によって維持されていたのです。外国人は日本の水田の土を、1000年間にわたって稲を連作しても地力の落ちない、奇跡の土と評価しているといわれます。このように自然と人間活動との調和のとれた農・林業に、私たちは謙虚に学ばなければなりません。また学問の先輩である農学には具体的な知識、技術について学ぶ点が多いのです。例えば私たちは植物を素材として自在に駆使するために、植物の栽培管理の方法論、技術を熟知していなければなりません、この点について農学に学ぶ点が多いのです。元来、造園学は泥くさい一面をもっていますが、最近はともするとこのことを忘れがちです。

世界的にも稀有な、農学系大学の一学科である特性を生かし、「農に学ぶ姿勢」を常にもつことを強調しておきます。

2. 豊かな教養、人間性を身につけること。

造園学は人間の生活環境全般を対象として取り扱います。言い換えれば人間臭い側面を有する学問です。したがって造園家の素養の第一としては、幅広い教養に裏打ちされた豊かな人間性を身につけることが先決です。そのためにはあらゆる意味での修養を積み、自己を錬磨することが大切です。さらには、造園家としての自分自身を地域レベルから地球レベル、並びに地域社会から国際社会に至る幅広い世界で位置づけ、世界の発展に貢献できる目標設定能力と行動力とを備えることが重要です。

3. 自ら学ぶ姿勢を常につつこと。

学問を教わる基本姿勢としては、「求めよ、さらば与えられん」の名言に全て集約されます。講義・演習・実習等の科目を受身的に甘受するのではなく、積極的な姿勢で向かうことが第一で、学問上の疑問等については大いに先生方に問い、また先輩・同輩とも議論をたたかわすことも重要です。なお学修の場合は単に大学の教室、研究室のだけでなく、身の回りのあらゆる空間が造園の研鑽の場となり得ます。これらの空間にも足しげく通うような、自ら学ぶ姿勢を入学時からもつことが何よりも大事です。また講演会、シンポジウム、展覧会等の各種の催し物にも、積極的に参加するような心掛けを持っていただきたいものです。

4. 地道にたゆまぬ努力を忘れぬこと。

造園学を修めるためには、大学生活の4年間は長いようで短いものです。また学問は深遠であり、一朝一夕で修めることのできるものではありません。線一本満足に引けなかった者が、手描きやCADで見事な図面を仕上げる能力を身につけ、一木一草の名を知らぬ者が数百種以上の植物の名前や性質を理解して卒業することは、どれもこれも一朝一夕でなせるものではなく、4年間のたゆまぬ努力の成果です。試行錯誤を繰り返し、地道な努力を続けることが、将来、造園家としての発展を左右することになります。

5. 自分の適性を見出し、得意な分野をもつこと。

人間誰しも得手、不得手があります。すべてに卓越した才能を発揮する者はまずいません。植物のことはよく分からないが図面なら誰にも負けない。またその逆を自負する学生もいるでしょう。もちろん、かたよりがあつてよいというものでもありませんが、無理矢理不得手な部分を補完する努力を払うよりも、得意の分野・長所を伸ばして自分の武器とすることも大切なことといえます。将来の進路を決定する場合にも、遅くとも3年次が終わる頃までには、造園家としての自らの進む道がある程度決定できることが望ましいでしょう。そのためには講義・演習等を通じ、自分の適性を早く見出すことが求められます。

6. 社会の動向に鋭敏であること。

学生時代の4年間は、社会に出て働く前の準備期間ということもできます。したがって現代の造園界の動きを常に鋭敏に感受し、現勢を把握しておくことが大切です。そのためには日常的にインターネットや新聞・雑誌等を通じて最新の社会動向を知り、図書館に配架されている造園・ランドスケープ関係雑誌のあらゆる記事に関心を持つようにしなければなりません。これらの知識や情報をふまえ、社会に対する造園家としての使命感と責任（環境倫理・技術者倫理）をもって取り組む能力を培うことが必要です。

7. 自然を熟知し、素材に対する確実な知識を身につけること。

アメリカの著名な造園家ローレンス・ハルプリンの作品には、水の流れを題材としたものが多くあります。彼はそれらの作品の設計に際して、自然における水の流れを学ぶために山中に足しげく通い、滝の流れ、河の流れをつぶさに観察して歩いたといわれています。この自然に学ぶ態度が、造園学の第一歩といえます。自然ないし自然要素の活用が造園家の基本的な方法となるわけで、まず何よりも自然を知ることが肝要です。多くの自然と接するために自らの足で歩き、目で確かめ、肌で感じることを心がけて生活してください。自然は造園学生にとって誰よりも勝る教育者となるでしょう。

さらに、植物は造園家にとって欠くことのできない素材です。一口に植物といっても日本だけでも高等植物で4000種以上が存在するといわれ、これに園芸品種を加えれば、膨大な数の植物が存在することとなります。もちろん、それらのすべてとはいわないまでも主要なものについては、その生理・生態をも十分に理解していなければ適正な利用はできません。この他にも、安山岩や花崗岩など、色味も肌合いも異なる多様な岩石も主要な造園材料であり、これらの性状についても十分な知識が要求されます。造園の素材については、カリキュラムの中でも多くの講義・演習・実習科目において学修できるシステムをとっているものの、各個人が各科目で得た知識をもとに、野外で実際に鑑定・独習することを習慣づけるように教員たちは望んでいます。

8. 多くの作品に接し、観賞眼を養うこと。

造園家は計画・設計・施工・管理・運営のいずれの面においても、クリエイターとしての要素が強い側面をもちます。何よりも常日頃から数多くの作品（造園空間）に接し、作品の問題点を見極める観賞眼を養うことが大切です。このことが自らの創造力を錬磨する方法ともなります。

9. 表現力を養うこと。

造園計画の最終段階における表現手段として図面があります。同様の内容の図面であっても図面表現の巧拙によって見栄えが異なり、内容までを左右しかねません。アイデアを的確に表現できるような製図力、イメージスケッチ等の表現力を養うことが大切です。当学科のカリキュラムの卒業までには50枚以上の図面課題が課せられているものの、与えられた課題をただ単にこなすだけでは駄目で、1枚1枚の図面の完成に全知全能を傾け、満足なるものが出来上がるまで反復独習する姿勢が必要です。さらに普段の生活からポケットサイズの野帳・スケッチブックを持ち歩き、良い場所に出会えば日ごろからスケッチをとる習慣も表現力を養うことに大い

に役立ちます。

さらに近年では、海外で仕事をする機会も増えつつあります。図面による表現力とともに、造園家としての必要な外国語を修得し、コミュニケーション能力を育成することも重要なことです。

10. 多くの図書を読み、見識を広めるとともに文章力を養成すること。

近年では、ありとあらゆる情報はインターネットを通じて入手できる時代となりましたが、造園家としての知識を貯え、見識を広めるためにも読書する習慣を持つことも必要です。「実社会に出てしまえば、仕事に追われ、読書どころではない」「学生時代、もう少し本を読んでおけばよかった」とは、先輩造園人の共通の実感で、この轍（てつ）を踏まないためにも、学生時代は大いに読書に励むべきでしょう。大学生活の第一歩は、まず自ら進んで専門書をひもとくことから始まるといえます。

文章力の練達を図ることも造園家の素養として重要なことです。たとえば行政やコンサルタント会社に在籍する造園家は報告書等、文章を論理的に書く機会が大変多いのが実情です。この点から多くの授業科目において、テーマを設定して課題を提出させることを心がけていますが、このような課題の他に意識して普段から文章を書く習慣を身につけることが大切です。多くの本を読み、自ら進んで筆をもつことが文章力養成の基本といえるでしょう。

11. 独創性、造園観を養うこと。

「〇〇の考えによれば云々の」とは他者の考えを引用しようとするものですが、これは悪くいえば他人の受け売り方式の思考でもあり、地についた独創性に富む発想が自らできるように努力することを望みます。これは単に「思考」に対してだけではなく「デザイン」に対しても同様です。造園空間を作品と考えれば、人真似であってはよい作品を生みだすことができず、この点からの独創性の養成も大切なのです。さらに誰しもがとすると陥り易いことですが、向欧米一辺倒にならぬように心掛けるべきでしょう。欧米ではこうだから日本でもこうした方がよいという短絡思考がとられる場合が今でも実に多いのです。しかし欧米と日本とでは文化・気候・風土が異なるゆえに、その背景の違いをしっかりと認識し、ケースバイケースで取捨選択する確かな判断力を身につけることが大切です。

独創性を養うということは、換言すれば独自の造園観をもつことです。これについていえば、学科の先生方のそれは各々の専門もあって各人各様です。実社会で活躍している造園家の先輩たちも様々な経歴を踏まえ、各人が独自の造園観をもっています。したがって、これらの人達と個人的に接すると、かなり個性のある造園に対する見方、考え方で話される

ことでしょう。ここで注意しなければならないことは、人の言を素直に受けとめることも大切ですが、受けとめる態度としては常に主体性をもった受けとめ方をすることです。自らの造園観を確立するためには、なるべく多くの人々に接し、それぞれの良さを多面的に吸収しながら、自らの中で独自のものを醸成していくのが望ましいといえます。

造園の領域が拡大するにつれ、隣接諸学の分野との接点も多くなってきています。造園の現業部門でも造園単独で仕事をするのは稀で、建築・土木などの他の分野との連携による仕事が多くなってきています。他学の関連分野を理解する一方、競合する部分では自らの立場を鮮明にし、相手を納得させられるような主張ができなければなりません。そのためにも4年間で独自の造園観を確立すべく努力することが卒業後の明暗を分ける大きな要点となるのです。

12. 幅広い視野と多面的な見方、考え方を養うこと。

学問の文化は、ひとつの事象を探求するために分析を重ね、極めて精妙な分析結果から帰納してある事象を理解するような思考方式、言うならば「下から上をみるような方式」を常套手段としてしまい、物事を鳥瞰するような「上から下をみる視点」を失ってきたことが、現代社会の最大欠点ともいわ

れます。環境をトータルに考える造園家はまさに「上から」の視点と「下から」の視点の両視点をもちあわせていなければなりません。一例をあげるならば、公園を計画する場合に、公園内の完結性を求めるだけではなく、一体、都市のどこに公園を配置したら都市全体の景観からも利用者の利便性からもよいのか、という検討が常に用意されなければならないのです。

このことから理解できるように、造園技術者の素養の最も大切なこととして、幅広い視野に立ち、柔軟性をもった多面的な見方、考え方を自身で訓練することがあげられます。そのためには前項まで断片的に述べてきましたが、4年間大いに「見る」「聞く」「読む」「覚える」「書く」「考える」「創る」「作る」ことに積極的に取り組む必要があります。

以上、造園学を学ぶための基本視点について概述しました。大海に浮かぶ小舟は自らが舵をとらない限り、波間に漂うだけで進路を定めることはできません。造園家としての第一歩を踏み出した諸君らの進路も、舵のとり方次第でいかなる方向にも進みうるのです。このことを大いに自覚し、4年間、自身を研鑽してください。

2. 造園学教育の黎明

2-1 造園学

現造園科学科の前身、東京高等造園学校を開校した上原敬二先生（以下敬称略）は、造園教育の必要性を強く問い、「造園教育は自然教育であると同時に科学教育である。・・・かくして造園教育は全く藝術教育に外ならぬ。」と述べています（上原敬二 1925 造園学雑誌 1 巻 1 号 3-8、造園の真諦と造園教育）。そして、「造園学（Landscape Architecture）とは、人間生活の上に使用、享楽の為め種々の程度に於て美観と同時に利用の目的を達するよう土地を意匠設計する理論を講究する学術である」と述べています（上原敬二 1924 造園学汎論、p2）。

近代造園学の先駆者のひとりといわれている田村剛（1890-1979）は、「植物・動物・岩石・泉水等自然材料と亭榭・彫刻・橋梁・道路等の建設物とを材料として、一定の位置と面積との上に、理想化せられた風景又は建築的構造を創作する術である。」と述べています（田村剛 1918 造園概論、3）。

同じく東京帝国大学林学科を卒業し、東京高等造園学校でも教鞭をとった永見健一（1892-1952）は、「造園」とは、一定の土地の上に於て、其地貌と其上にあるもの、及他から将来した各種材料を組合せて、之より創造された、若くは之を修飾加工して造成した一團一群のまとまつた構成であつて、其第一次的目的として人の慰楽・休養・保険・観賞の場たる事を期し、第二次的目的に保安・智育等の助長を計る事を原則とするが、政策的には之により経済収益を挙げる事を目的とするを妨げない。かくして“造園学”とはかかる“造園”に関する学と術の組織的・体系的論考である」と、述べています（永見健一 1942 “造園”と“造園計画”序説、造園雑誌 9（2）7-13）。

上原敬二と同じく東京帝国大学大学院にて本多静六に師事（造園用語辞典第3版）、東京高等造園学校でも教鞭をとった千葉大学園学部造園学科教授の小寺駿吉（1901-1975）は、「造園とは人類の狭義の生活空間、すなわち個人的住居の一半たる庭園の設計から出発し、市民生活における環境問題、特に公園緑地の整備、さらに進んで国土の自然に対して試みる造形的美意識の表現なども包括する景観技術の体系であると定義づけることができよう」と、述べています（小寺駿吉論文集 1976. 公園史と風景論 “造園様式”、243-248. 千葉大学園芸学部造園学科風景計画論研究室）

多くの子弟の教育に携わった造園教育者であり、近代造園学研究者の江山正美は、「近代造園学は、本来生物学的であり、他方機械的である人間に対して、主として自然ないし自然要素との共存を基調としながら、合理的でしかも快適な広義の生活環境を保護・造成し、精神的で肉体的な人間、動的で静的な人間、即ち人間の多様性に応えるための環境計画学である」と述べています（江山正美 1977 スケープテクニク



図 2-1 上原敬二先生 肖像

明日の造園学、鹿島出版会）。

時代が変わっても、これら先人の定義の本筋は変わることなく、現代では、「造園は、人工と自然の調和共存を図りながら、人間の多様な要求と満足を満たすために、主に緑を活用して、土地・自然・風景、すなわち都市地域から田園地域、自然地域にわたる各種環境空間すなわち造園空間を保全し、創造し、秩序づける計画実現のための総合技術体系」と捉えています（造園用語辞典第3版 2011）。

2-2 世界と日本の造園学教育の黎明

1) 海外の造園学教育の歴史

造園学教育をどの基準をもって開始とするのか、議論の余地がありますが、少ない記録によるとアメリカにおいて 1900 年に設立されたハーバード大学（上原敬二 1924 造園学汎論 林泉社）、1904 年に設立されたコーネル大学、1913 年に設立されたカリフォルニア大学バークレー校（横山光雄 1962 欧米の造園教育事情について、造園雑誌 26（4）、2-12）がよく知られています。ただし、ミシガン大学（1909 年）、ミシガン州立大学（1923 年創立）、イリノイ大学（University of Illinois、1907 年学科カリキュラム開始）等、既に 1924 年の時点で 24 校の造園学校があげられています（上原敬二 1924 造園学汎論 林泉社）。また 1910 年にはアメリカで Pennsylvania School of Horticulture for Women が専門学校教育機関として設立されていました（上原敬二 1924、造園学汎論 林泉社；上原敬二 1925 造園学雑誌 1 巻 1 号 3-8、造園の真諦と造園教育）。

Harvard 大学や Cornell 大学のような私立大学と、State University N.Y.、Wisconsin university、California University、Berkely のような州立大学では、かなり大学の運営システムが異なるということです（田畑貞寿 1978 U.S.A. における造園教育の概況、造園雑誌 42（4）、13-16）。興味深いのが、それぞれどの学部につくられたのかということ、「もともとの Base は、農業としての農学を基礎に展開

されてきた。しかし、造園学が Art から Design、そして人間と環境の問題へと指向して行くなかで、……さらに Environmental Design ないしは、Regional planning や Urban planning へと展開されてきた。」(田畑貞寿 1978 U.S.A. における造園教育の概況、造園雑誌 42 (4)、13-16) に尽きます。1962 年の時点で、これらの多くの大学で大学院博士、修士課程があり(横山光雄 1962 欧米の造園教育事情について、造園雑誌 26 (4)、2-12)、今に至っています。

以上のような報告をみれば、大学での造園学教育の発祥の地は、アメリカとして捉えられるようです。但し、ドイツでは 1823 年ベルリン州専門大学校法によるベルリン専門大学校、ハノーファー工科大学(勝野武彦 1978 西ドイツハノーファー工科大学地域保全学科における造園教育、造園雑誌 42 (4)、23-30、31-41)がありました。

フランスではバカロレアによる学力検定試験に合格して進学する大学制度がありますが、専門学校(エコール)において都市計画や地方計画を学んでから大学へ挑むようです。造園教育を専門にする学校はヴェルサイユの国立園芸高等専門学校(農業省、1976 年設立)が有名です(金田資郎 1978 造園雑誌 42 (4) 55-57)。

英国における造園教育は、Sheffield 大学(1973 年設置)の他に、College や Polytechnic があります(石井弘 1978

英国における造園の研究・教育事情、造園雑誌 42 (4) 42-48)が、その歴史は意外にも比較的浅いようです。

このような状況のもと、本学の創設者の上原敬二の師である本多静六はドイツに学び、上原敬二は、当時としては渡航者が少なかったアメリカで 1920 年 7 月から 1921 年 11 月まで学んでいたことは深い意味があったことがわかります。

2) 国内の造園学教育の歴史

国内の造園学教育の黎明については、田村剛(1926)及び上原敬二(1983 この目でみた造園発達史 p.76)の資料に明解に述べられています。田村剛(1926 我が造園学の位置とその将来について、造園学雑誌 2(1) 114-120))では、次のように述べられています。

「造園術の組織的研究は明治末から大正に入ってから発達したものでありまして、鏡農学博士(今日の盛岡高等農林学校長)が帰朝後千葉高等園芸学校に於て園芸の傍庭園論を始められたのは、本邦造園学の講述者として最初であったと思われる。又本郷ドクトル*(林学実科出身)がドイツに留学して斯学を専攻されたのも、本邦に於ける造園専門家のレコードでなくてはなりません。

大正 5、6 年頃より農科大学林学教室に於きまして、本多博士と本郷ドクトルと私(田村剛)とで農科大学の学生、生徒並に外部よりの聴講者に対して、造園学に関する講述を始めたのは、今日の造園学の前身でありまして、造園学という名称もその当時選ばれたものであります。(途中省略)

尤も駒場に先って北海道大学では、夙に新島林学博士の森林美学の講義がありましたが、それは造園又は林学の一部分に過ぎぬのであります。」

上原敬二(1983 この目でみた造園発達史 p.76)もまた次のように述べています(漢数字は算用数字に変換)。

「この時代の学校における造園の講義として正式に最初に行われたのは現千葉大学園芸学部的前身、千葉県立園芸専門学校。ここは明治 42 年(1909)の開校、この前年 7 月に京都府立農林学校から着任したのが初代校長鏡保之助氏(明治 45 年 6 月朝鮮総督府に転出)。開校と同時に自ら教壇に立って築庭法を講義した。これがそもそも日本の学校で造園の講義の最初のものであった。」

「同大学(千葉大学)は園芸専門の学校として日本唯一のもの、それに造園学を加えたことも日本最初である。大正 3 年以後、千葉県立高等園芸学校、昭和 4 年以後官立に昇格、千葉高等園芸学校、昭和 19 年(1944)千葉農業専門学校と改称、ここで緑地土木科を設け、同 24 年千葉大学園芸学部造園学科となり、学科長に小寺駿吉教授(造園史、風景計画)が就任、専任教授に飯島亮教授、本田伸教授(ともに植栽学)、森敏之助教授(図学)、ほか 5 人、講師に横山光雄(都市計画)、江山正美(風景計画)、草下正夫(林学)、沼田真(生態学)の諸氏がいた。」(下線部については、田村(1926)と上原(1983)とで異なる。*上原(1983)による本郷高德氏。二重下線部は追加、一部旧字体を新字体に変換した。)

上原(1983)は、「昭和時代に入ってから各地の造園に関する大学、専門学校、中等程度の農学校などにおいては独立に或は園芸学科若しくは農林科目の一つとして造園学を講ずるところが増加して来た。」と述べ、この時、京都大学、北海道大学、三重大学、宇都宮大学、九州大学、東京大学園芸第二講座、大阪府立大学、宮崎大学、南九州大学園芸学部、九州学院大学工学部土木学科、短期大学として西日本短期大学をあげています。また 1908 年(明治 41)には東京府立園芸学校、1909(明治 42)には中央工学校が開校しています。

戦後、高度経済成長に伴う公害、空気汚染、水質汚染等に伴う環境問題が大きくなってくると、国公立、私立に関係なく造園学に関連する科目、講座、研究室、学科、学部、大学、大学院が設立されました(1978 国内における造園教育の実態、造園雑誌 42 (4)、58-69)。

例えば、東京農業大学内においてもバイオセラピー学科(2020 年に閉学科)、生物資源開発学科、デザイン農学科、地域創成科学科が設立され、学外では淡路景観学校が開校しました。

ここで、学術の深化が始まり、「造園学」が分化していった現象を精確にみなければなりません。例えば、造園学に含まれる観光は、新たに社会科学系の大学や学部に関連の学科(例えば観光ビジネス学科等)が多く設立されました。皮肉

にも環境問題が他の工業技術の発達によって解決されてくると（例えば、排気ガスを抑える車両技術等）、植物による大気浄化の効果は忘れ去られてしまい、その結果人は生物界の一員であることを忘れて「みどり」のありがたみも感じなくなってきました。それどころか社会は、ますます閉塞化し、街路樹による倒木事故や落ち葉問題など「みどり」はやっかいものの扱いとなり、訴訟問題にまでなることが増えてきました。

その結果、空間デザインや地域環境工学、環境デザイン、環境システム、緑地環境科学、ランドスケープ、とりわけ近年はコンピューターグラフィックによるデザインアートや建築・土木デザイン等、「造園学」に似る用語、あるいは似て非なる用語や学校、学部名や学科名も生まれました。このことは造園学に関わる学術が広まったこととして喜ばしいことでもあったのですが、それぞれ意味が分化し、深化していき、本来もつべき「造園学」から乖離しているようにも見受けられます。

それぞれの分野が分化していったことに対して、造園学は「総合学」であることを謳ってきたのですが、AI（Artificial intelligence）や生命科学等、実利を求める社会状況は、「総合学」の意義と実態が伴いにくく、さらに他分野における技術力は日進月歩であることを理解しなければなりません。

高度経済成長期を経て、さらにバブル景気崩壊後の成熟社会に入り、国内人口の減少がはじまる一方、相反するように生き残りをかけた新制の大学、学部の設立が起こり、さらに教育の高度化（大学院教育）、地域格差による首都圏の大学の定員制限、高齢化社会、健康志向、経済格差、頻繁におこる自然災害等の影響もあり、大学によっては閉校、学科の閉鎖、縮小も余儀なくされてきました。本学造園科学科でも、造園界からの需要は依然として減っていないものの、学生及び教員の定員数を減らさざるを得ない事態に陥りました。社会的な需要はまだ大きく、それに応えられるように、今一度、研究・教育の原点を見直す必要があります。その一環として現代社会に対応できる造園教育・研究体制を立て直し、さらに発展させるために研究室の改組もおこなってきました。

2-3 東京農業大学造園科学科の設立と歩み

上原敬二 国内で初めての造園学教育機関として、現東京農業大学地域環境科学部造園科学科の前身の東京高等造園学校を開校したのは上原敬二（1889 - 1981）でした。多摩墓地の墓所に建つ年譜は、簡にして要を得たものとのこと（上原敬二 1983 この目でみた造園発達史、但し算用数字は漢数字から変換）、本稿でもそのまま転記します。

『1889年2月5日東京深川区に誕生。第一高等学校予科を経て東京帝国大学入学、森林美学、造園学、樹木学、建築学などを専攻、1920年神社林の研究により林学博士、同年造

園学研究のため欧米諸国へ留学す。1924年震災後の首都復興のための技術者養成を目指して東京高等造園学校を設立、校長となり以後造園教育に邁進する。1925年日本造園学会、日本児童遊園協会を創立。その他日本庭園協会（1918）、日本造園士会（1938）等の創立に関与し発展に尽力。その間政府代表として汎太平洋学術会議に出席。

1953年東京農業大学教授、同名誉教授（1975）、東京高等造園学校を含めその間の教え子5000有余名に達す。

著作、作品、造園学汎論（1924）、日本風景美論（1943）、樹木大図説（1959）等200有余点、造園計画作品250有余に及ぶ。

1981年10月24日未明東京都三鷹市にて永眠。』

上原敬二は、東京帝国大学農科大学林学科では本多静六の門下生でした。造園学汎論は、近代造園学の体系を始めて著し、日本風景美論は、当時の国情と世評を反映したもの、樹木大図説は世界中の樹木を樹芸学の観点から著した全4巻からなります。また先進国の都市づくりを基礎とした「都市計画と公園」（1924）、造園に関する古典用語から現代用語まで網羅した「造園大辞典（1978）」などもあります（造園用語辞典第3版）。

さらに本学造園学科（現造園科学科）の優秀卒業論文に上原賞、日本造園学会に托した造園界の功労者に上原敬二賞を授与する制度を残され、蔵書を送られた本学図書館に記念文庫があります（上原敬二 1983 この目でみた造園発達史）。

前述の年譜に「造園教育に邁進する」というように、造園学汎論（1924）では当時殆ど入手できなかったと思われる国外の造園教育の内容を綿密に調べ上げ、さらに現在の社会問題になっているジェンダー教育について、「家政教育の改善」を説いていたことには驚かされます。

東京高等造園学校の開校から現在まで 東京高等造園学校は、林学博士上原敬二によって、1924年（大正13）4月中旬に開校、東京府庁により1924（大正13）年9月13日に正式に認可されました（上原敬二 1983 この目でみた造園発達史）。

東京ではヨーロッパの造園を参考にして日比谷公園（1903年）や新宿御苑（1906年）が造られてしばらく経ち、明治神宮の内苑（1920年）と外苑（1926年）がほぼ出来上がった時期、また関東大震災（1923年）直後になります。上原敬二は、「この災厄がなかったなら造園学科は生まれていなかったと思う」と述べています（上原敬二 1983）。この関東大震災が造園学の必要性を説いたという点は、本学造園科学科の基盤であり、私達の造園学の神髄がここにあることを肝に銘じたいと思います。

開校当初は、夜間部も加えていたとのこと、社会に還元しようとする姿勢に敬服します。その後1931（昭和6）年に校長が上原敬二から龍居松之助にかわり、1936（昭和11）年

◇造園学教育の黎明◇

には大森区調布大塚山共立女子薬科専門学校跡地に移転、1941（昭和16）年に東京農業大学専門部造園科として移換（東京高等造園学校の閉校）、1944（昭和19）年に渋谷常盤松に移転、昭和20年の戦後の新制大学令によって旧農学部緑地学科となりました。1956（昭和31）年に新制農学部造園学科と改称し、1998年（平成10）4月には東京農業大学農学部から地域環境科学部として造園科学科（Department of Landscape Architecture Science）となり現在に至っています。また1990年（平成2）に大学院農学研究科造園学専攻博士前期課程（修士課程）、2002年（平成14）に大学院農学研究科造園学専攻博士後期課程が設立され、2021年（令和3）から大学院地域環境科学研究科博士前期・後期課程に改組されました。

興味深いのは、これまで「造園」は、「狭義の庭造りとして誤解を招きやすい」とか、「内容がわかりにくい」、「イメージが悪い」などによって、学科名称変更の議論が多くされて

きました。しかし、この議論は、既に昭和20年以前から行われていました（上原敬二1983この目でみた造園発達史）。小寺（1976）は、「造園」ということばが、今日のように包括的な概念のもとに用いられはじめたのは、1916年（大正5）東京帝国大学農科大学林学科の課外講義であった。……このとき以降「造園」は、その文字のために狭義に解釈されがちな不利は争えず、さればとてほかに新しい適当な名称を選定し、社会の公認を獲得することも容易ではないので、そのまま今日に及んでいるというのが実情である」と述べています（造園様式、公園史と風景論 小寺駿吉論文集243-248. 千葉大学園芸学部造園学科風景計画論研究室）。これまで数年の「緑地学科」の時代があったものの、1世紀に亘り「造園」が社会的に認知されてきた実情から判断すると、今はその用語よりも、内容の充実を図る方が急がれるようです。

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
明治元年	1868			戊辰戦争、王政復古 明治と改元、神仏分離
2年	1869			東京遷都 五稜郭の戦い(北海道・榎本武揚)
3年	1870	居留外国人のための、彼我公園(現山手公園・横浜)設置		平民の苗字使用認可
4年	1871			廃藩置県
5年	1872			学制公布
6年	1873	太政官正院達第16号(公園制度の発祥)		徴兵令布告 地租改正条例公布
7年	1874	銀座煉瓦街に並木誕生		「明六雑誌」創刊
8年	1875	居留外国人のための、東遊園地(神戸)設置		樺太・千島交換条約調印
9年	1876			札幌農学校開校
10年	1877	第1回内国勸業博覧会開催(東京・上野公園)		西南戦争 東京大学発足
11年	1878			パリ万国博覧会参加
12年	1879			琉球処分(沖縄県設置)
13年	1880	岩崎弥太郎、深川別邸を深川親睦園と命名(現清澄庭園・清澄公園)		刑法・治罪法公布
14年	1881	農商務省設置		国会開設の勅諭 自由党結成
15年	1882			日本銀行設立 上野博物館開館
16年	1883			鹿鳴館落成
17年	1884			華族令制定 上野駅で白熱電灯点灯
18年	1885			内閣制度を採用 兌換銀行券発行
19年	1886			学校令公布
20年	1887	ヘルマン・エンデ=ヴィルヘルム・ベックマン(独)「日比谷官庁集中計画」立案		伊藤博文憲法起草開始
21年	1888	東京市区改正条例公布、日比谷練兵場跡を公園とする事業が決定		史町村制公布 枢密院設置
22年	1889	2.5 上原敬二、東京・深川に生まれる。 『園芸考』(横井時冬)		大日本帝国憲法公布 東海道線開通
23年	1890	小澤圭治郎「園苑源流考」執筆開始		府県制・郡制公布 教育勅語発布
24年	1891	3.徳川育英会を母体に私立育英優農科が設置される(麹町区飯田河岸／現在のJR飯田橋駅構内)。		ニコライ堂完成
25年	1892	10.東京市小石川区大塚窪町に移転し、私立育英優分優農科に改称。		
26年	1893	5.私立東京農学校に改称。 東京市が日比谷公園の事業を決定 『Landscape Gardening in Japan』(J.コンドル)		条約改正交渉開始
27年	1894			日清戦争勃発
28年	1895			下関条約調印、三国干渉
29年	1896			近代第一回オリンピック開催(アテネ)
30年	1897	1.私立東京農学校、大日本農会の附属となり、8.経営も大日本農会に移管。		
31年	1898	10.東京府豊多摩郡渋谷村(現渋谷区)常盤松御料地内に移転。		日本美術院創立(岡倉天心)
32年	1899			第二次恐慌
33年	1900	日比谷公園改良委員会設置		治安警察法公布
34年	1901	7.大日本農会附属私立東京高等農学校に改称。		『武蔵野』(国木田独步)
35年	1902	新宿御苑アンリ・マルチネの図で大改造着手		日英同盟協約調印
36年	1903	専門学校令による許可を受ける。 日比谷公園開園(本多静六設計、東京)		F.オルムステッド逝去(1822-、米国・セントラル・パーク設計者)
37年	1904			日露戦争開始 日韓議定書調印

◇造園学教育の黎明◇

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
38年	1905			ボーツマス条約調印
39年	1906		新宿御苑洋風庭園完成	鉄道国有法公布 南満州鉄道設立
40年	1907	4.校長に横井時敬就任。	福羽逸人・白沢保美「東京市行道樹改良案」	小学校令改正(義務教育6年)
41年	1908	3.上原敬二、東京府立第三中学校卒業。	東京市公園改良委員会設置 東京府立園芸学校創立	増税法公布
42年	1909		千葉県立園芸専門学校創立	国技館落成
43年	1910			朝鮮総督府設置 『白樺』創刊
44年	1911	7.上原敬二、第一高等学校大学予科卒業。 9.上原敬二、東京帝国大学農科大学入学。 11.私立東京農業大学と改称し、初代学長に横井時敬就任。	工場法公布	関税自主権確立
45年 大正元年	1912			7.30明治天皇崩御(大正に改元) 中華民国成立(清朝滅亡)、孫文臨時大總統に就任
大正2年	1913		運河法公布、東京市による郊外公園構想樹立、宮内省井の頭御料地を東京市に下賜	
大正3年	1914	7.上原敬二、東京帝国大学農科大学林学科卒業。 9.上原敬二、東京帝国大学農科大学院(森林美学専攻)入学。		第1次世界大戦開戦、東京駅開業
大正4年	1915	5.上原敬二、東京帝国大学農科大学院退学、明治神宮造営局技手に任命。		二十一カ条要求提出 大戦景気
大正5年	1916	用賀第二農場設置。		吉野作造・民本主義を唱導
大正6年	1917		『明治園芸史』出版、小澤の「明治庭園記」を登載 明治神宮内苑着工	ロシア革命
大正7年	1918	5.上原敬二、明治神宮造営局技手依頼免官。 9.上原敬二、東京帝国大学農科大学院再入学。	明治神宮外苑着工 東京市区改正条例を5大都市に準用 『造園概論』(田村剛)、『樹木根廻り運搬移植法』(上原敬二)、機関誌「庭園」創刊、日本庭園協会設立	シベリア出兵宣言 第一次世界大戦終結
大正8年	1919	4.上原敬二、東京農業大学講師(林学担当)を委嘱される(-20.7)。 9.上原敬二、東京帝国大学大学院退学。	史蹟名勝天然紀念物保存法公布、旧都市計画法制定	クラインガルテン法成立(独)
大正9年	1920	4.上原敬二、『神社林の研究』論文によって文部大臣より林学博士学位授与。 7.上原敬二、造園学研究の為に欧米留学(-21.11)	明治神宮内苑完成	国際連盟成立・加盟
大正10年	1921		東京市に公園課設置	ワシントン会議参加
大正11年	1922	2.上原敬二、東京帝国大学講師(森林経理学担当)を委嘱される(-22.7)。		ワシントン海軍軍縮条約調印
大正12年	1923	10.上原敬二、帝都復興院技師任命(-24.5)。	帝都復興特別都市計画法公布、帝都復興院設置	9.1関東大震災
大正13年	1924	4.1東京高等造園学校(本学科前身)、渋谷町常盤松(現渋谷区渋谷四丁目)東京農業大構内に開校(事務上の手続きミスで正式の設立認可は大正13.9.12付となっている。)初代校長上原敬二就任。 5月より1期生の授業が、当時一流の講師陣により開始される。開設科は本科2年、専科1年、研究科2年。初年度だけ実科1年を設けた(聴講生制度も別にあった)。設立時の理事は、岩崎潔治・井下清・上原敬二・龍居松之助・筒井春香。顧問は、白沢保美・本多静六・横井時敬の各氏。この時制定の校章は奥山恒五郎氏の図案による。 6.東京高等造園学校新緑会『造園』を創刊。(その後校友会文芸部として発行が続いた。) 10.15上原敬二『造園学汎論』を著し、造園学の領域を明示。従来の徒弟技術の造園から脱却した学体系的と教育を目標とした授業を目指す。	帝都復興計画告示 『造園学汎論』『都市計画と公園』(上原敬二)	アムステルダム国際都市計画会議開催
大正14年	1925	4.東京高等造園学校関係者を中心として、(社)日本造園学会を設立(理事、上原敬二・井下清・龍居松之助・岩崎潔治・永見健一・波多腰豊)。学会本部を目黒の東京高等造園学校事務局内に置き、同11月学会誌『造園学雑誌』を創刊。 11.東京上野に於ける全国副業展覧会会場前庭及び、全国農村めぐり展示会場が、在校生の設計施工により完成。その作品を含む絵葉書4種が発行される。	日本造園学会設立	日ソ基本条約(国交樹立) 治安維持法公布 普通選挙法公布 ラジオ放送開始
大正15年 昭和元年	1926	3.10 目黒校舎にて第1期本科生の卒業式挙行 4.1 東京府荏原郡目黒町下目黒510(現・目黒区目黒三丁目5)の林学博士中鉢氏所有地を借り受け独立校舎完成。2期生から8期生の授業がここでなされる。同校地は、在校生の実習により整備された。	日本造園学会『造園学雑誌』創刊 明治神宮外苑完成、初の風致地区指定	12.25大正天皇崩御(昭和に改元)

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
2年	1927			金融恐慌勃発 地下鉄開通(上野-浅草)
3年	1928			普通選挙実施
昭和3年	1928	1. 東京高等造園学校植物研究会『雲葉』(ふさざくら)を創刊(昭和6. 第9号までつづく)。 4. 制服をこれまでの背広、中折帽から黒詰襟に変更。 (研究科や事情あるものは黒色背広を着用した)	大阪市「総合都市計画」策定(100万坪の公園計画)	三・一五事件
昭和4年	1929		(財)国立公園協会発足 東京帝国大学農学部に造園学教室開設 千葉県立高等園芸学校が千葉高等園芸学校と改称	東京・大阪・福岡間定期航空開始
昭和5年	1930	2.1 東京高等造園学校関係者が中心となり、日本造園学会編『造園芸術』を創刊。	日本造園学会編『造園芸術』発刊 帝都復興大小55公園完成(内務省復興局・折下吉延、東京市公園課・井下清)	特急「つばめ」が東京～神戸間を9時間で運行開始
昭和6年	1931	3. 上原敬二校長辞任。理事・井下清(常任)、小山正一(監事)、白沢保美、龍居松之助(常任)、田中仙樵(監事)、田村剛、本多静六、安岡勝也(常任)、結城礼一郎、吉田亨二。 4.1 第2代校長に龍居松之助就任。	国立公園法公布	満州事変
昭和7年	1932	4. 校則改正により本科2年を3年とする。校誌『造園学報』を創刊。 11.5 「東京造園高等学校同窓会」設立。	東京緑地計画協議会発足 『理論実際造園学』(永見健一)、『都市の公園計画一応の理論』(北村徳太郎)	上海事変
昭和8年	1933	3.26 「常盤松造園研究会」設立(その後同会は昭和10.2.『造園研究報告』を創刊)。		アテネ憲章採択 ブルーノ・タウト(独) 来日
昭和9年	1934		「造園学雑誌」を「造園雑誌」に改称 8国立公園指定	満州国帝政実施
昭和10年	1935		東京市・八柱霊園(千葉・松戸)開設	天皇機関説(美濃部達吉)問題化
昭和11年	1936	7. 東京市大森区調布大塚町639(現・大田区雪谷大塚町14)東京共立女子薬科専門学校分校跡地に移転。生徒の手により目黒校舎からの樹木の移植と、構内整備が行われ沈床花壇、藤棚、テニスコート、バスケットボールコート等が設けられた。 9.1 雪ヶ谷校舎(池上線雪ヶ谷駅に近い)にて授業開始。11期生から18期生までの授業がここでなされる。	公園緑地協会(後の日本公園緑地協会)発足 「公園緑地」創刊	二・二六事件
昭和12年	1937	4. 東京高等造園学校同窓会名簿昭和12年版が体裁を整え発行される(昭和9. にすでに名簿の発行があり、昭和12. 14. 5. 16. 5に発行される)。 8. 在校生による造園勤労奉仕活動として、六義園内園路等の整備が実施される。		日中戦争始まる
昭和13年	1938	4. 日本造園士会設立(高等造園ゆかりの人々を中心)	厚生省設置	国家総動員法公布
昭和14年	1939		東京緑地計画 『日本庭園史図鑑』(重森三玲)	第二次世界大戦開戦
昭和15年	1940		都市計画法改正(緑地の法文化)	日独伊三国同盟調印 紀元二千六百年記念事業
昭和16年	1941	10.15 東京高等造園学校の経営の一切(含む教職員、学生、施設)を東京農業大学に移譲。同校設立者並びに校長龍居松之助との間に契約を締結。	防空法改正、空地を設けるための地区指定により建築制限を規定	真珠湾攻撃 住宅営団設立
昭和17年	1942	4.1現在在籍の2・3年生の授業は、引き続き東京農業大学内にてもたれた。以後、東京高等造園学校卒業生の学業成績、卒業証明書等の発行は東京農業大学が行う。専門部造園科(後に緑地土木科となり更に緑地科と改名)を新設した(大森区調布大塚町639)。初代科長に龍居松之助が就任。 11.29 造園科学生報国隊25名は常盤松、李鍵公邸で庭園の手入れ奉仕。この頃、農場は用賀農場(9.09ha)、千歳農場(4ha)、富士分場(20.1ha借地)の3ヶ所があった。	環状空地帯、および防空空地設定について閣議決定	ミッドウェー海戦 関門海底トンネル開通
昭和18年	1943	3.24 東京高等造園学校最後の卒業式を行う(高造時代卒業生534名)。 5.12 東京高等造園学校の廃校が認可された。 5.22 専門部造園科主催戦時「造園報国祭」を挙行。 8.1 造園科が渋谷の本部に、大学予科が大森区調布大塚町に交換される(昭和19に移転完了)。 12.1 兵役についた学生の要求から造園科を緑地土木科と改め、同時に永見健一(農学博士)が科長に就任。	防空法に基づく空地帯を指定 『日本風景美論』(上原敬二)	ガダルカナル撤退 学徒出陣
昭和19年	1944	4.1 専門部緑地土木科が渋谷区常盤松での授業を開始。 7 造園実習地(千葉県我孫子町)で、食糧増産実習実施。	千葉高等園芸学校が千葉農業専門学校と改称	サイパン陥落 本土爆撃本格化
昭和20年	1945	7.1 専門部緑地土木科一年、帝都各緑地に出動し食糧増産に従事。	戦災復興院設置	第二次世界大戦終結

◇造園学教育の黎明◇

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
昭和21年	1946	3.31 科名を緑地科と改め、永見健一科長就任。 4.1 世田谷区世田谷四丁目(現桜丘一丁目)に大学が移転し授業を開始。 7.『緑地研究』創刊号発行(4号まで発行される)。	特別都市計画法、自作農創設特別措置法、政教分離により社寺境内の公園解除 都市計画協会発足	住宅営団廃止
昭和22年	1947		厚生省国立公園部設立、国民公園公開 国土緑化運動開始	日本国憲法施行
昭和23年	1948	8. 世田谷キャンパスの造園計画実施(担当平山勝蔵)。緑地科長に龍居松之助就任(永見健一病気の為)。	IFLA(International Federation of Landscape Architects) イギリス第1回大会(国際造園家会議)で創設 建設省設置法、内務省解体、自治省・農林水産省設置「造園雑誌」第11巻1号復刊、雑誌「国立公園」復刊 東京都公園協会発足、軍用跡地の公園化がはじまる	極東国際軍事裁判
昭和24年	1949	4.1 新制東京農業大学発足、農学部緑地学科設置、学科長に龍居松之助就任。学校教育法による新制大学設置の認可を受け、農学科・林学科・畜産学科・農芸化学科・農業工学科・農業経済学科・緑地学科・協同組合学科の8学科を設置した(林学科・畜産学科は茂原に設置)。専門部廃止。このときの東京農業大学学長は佐藤寛次。この頃農場で井下清教授のもと東京都の公園からさし穂をもらい、樹木の繁殖を始める。 6.24 緑地学科主催でG.H.Q.天然資源局ボバン氏の特別講演(演題は日本のNational Park)実施。	林野庁発足 土地改良法 国立公園法改正 国土美化運動開始 千葉農業専門学校、千葉大学園芸学部となり造園学科を設置	ドッジライン発表 日本工業規格(JIS)制定 単一為替レート(1ドル=360円)設定
昭和25年	1950	3.14 短期大学の設置許可(造園科は申請のみ) 4. 開学	国土総合開発法、建築基準法、首都建設法、文化財保護法公布、国立公園協会設立、ガーデン協会発足・機関誌「ガーデン」発刊、国土緑化推進委員会発足、文化財保護委員会設置	朝鮮戦争開戦 特需景気 住宅金融公庫発足 金閣寺放火で全焼
昭和26年	1951	3.1 東京農業大学国土計画研究所規定制定(所長・北村徳太郎)。	建設省都市局「公園施設基準」制定、日本自然保護協会発足、日本都市計画学会設立	サンフランシスコ講和条約調印、日米安全保障条約 日本ユネスコ・ILOに正式加盟
昭和27年	1952	3.2 永見健一教授逝去。	道路法、農地法 江山正美「現代の造園形態」	日米行政協力調印 東京国際空港(羽田)供用開始
昭和28年	1953	5. 井下清教授、日本造園学会会長就任。	琉球政府「都市計画法」制定	内灘基地反対闘争、新教育委員会 NHK白黒テレビ放送開始
昭和29年	1954	12.4 緑地研究会を「造園同窓会」と改称再発足。用賀農場時代、「農業経営係(通称・農経)」はサツマイモや蔬菜の他に樹木を一部含む総合農業経営を実習指導した。	土地地区画整理法、東京造園建設工業組合設立 日本造園学会、IFLA(ウイーン)に日本代表を初派遣	警察法、防衛庁設置法、自衛隊法
昭和30年	1955	4.1 上原敬二、学科長就任。	日本住宅公団発足	55年体制成立、初の統一地方選挙 日本国政府ガットに正式加入
昭和31年	1956	4.1 緑地学科を廃し、造園学科を設置、科長に上原敬二就任(学科主事・56.5-59.3近藤龍雄) 4.1 短期大学栄養科・農業科・醸造科	首都圏整備法、都市公園法、東京都公園協会機関誌「都市公園」発刊、日本道路公団発足	神武景気
昭和32年	1957	学生サークル「観光研究会」発足(後に「造園観光研究会」と改称)。 この頃造園実習は90名をA・B班に分け樹木のスケッチ・四ッ目垣・剪定・さし木・除草(芝生内の除草)・冬囲い・石垣・消毒・天地返し等を、交互に年間12回午後の半日実習を昭和35年度まで実施。	自然公園法(国立公園法改正) 技術士法	なべ底不況 東海村原子炉に火ともる 国連総会で安保理事会非常任理事国に当選
昭和33年	1958	4.1 農場の「農経」を「樹木係」に名称変更。	文化財指定庭園保護協議会設立	東京タワー完成 八郎干潟干拓開始
昭和34年	1959	4.1 造園学科長に江山正美(農学博士)就任、(学科主事・59.4-64.3近藤龍雄/64.4-68.3金井格/68.4-71.3北沢清/71.4-75.3岸塚正昭/75.4-77.3永嶋正信) これ以後近代造園学の立場から科学的側面を強調し、環境計画学としての造園が強調される。	工場立地法、首都高速道路公団発足	岩戸景気 伊勢湾台風起こる
昭和35年	1960	この頃農場で毎年さし木、種子まき、安行への買出し等樹木生産に力を入れ、見本用も蓄える。 9.「造園学生会」結成、機関誌『LASA』創刊号発行。	新宿副都心再開発計画 『都市のイメージ』(K・リンチ)、「自然公園」創刊、「自然保護」創刊、世界デザイン会議(池原・田畑ら参加)、(財)日本自然保護協会設立	ヴェトナム戦争開戦 国民所得倍増計画閣議決定、(自民党・経済成長、所得倍増計画を発表)
昭和36年	1961	1. 東京農業大学造園同窓会『会員名簿』発行。 4.『LASA』2号発行。 5. 用賀農場売却、厚木農場へ移転。昭和25以来用賀農場で庭園樹木500余種培養、新農場に樹木約200種15,000本(2t車20数台、1日2台にて2週間)移送、90%活着。61-62年にかけて4回社会人を対象に造園技術講習会開催。	特定街区制度、宅地造成規制法 『Landscape architecture』(サイモンズ)、『造園技術』(関口鉄太郎) 災害対策基本法、農業基本法 国民休暇村協会設立	全国的に土木工事急増

年号	西暦	東京農薬大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
昭和37年	1962	3.厚木農場へは行かず本校にて5班で造園実習を実施(ー44.3)。 研究室を木造校舎から総合研究棟(2号館:現存せず)に移転。 6.16・17東京農薬大学創立70周年記念学術展示会に参加。 9. 農大主庭(図書館前)を整形的デザインに整備(担当 平山勝蔵)。	全国総合開発計画、都市樹木保存法 「風景の美と特質の保存に関する勧告」がユネスコで採択 『沈黙の春』(R・カーソン)	キューバ危機 首都高速開通 名神高速道路(栗東I.Cー尼崎I.C間)
昭和38年	1963	5. 佐藤昌教授、日本造園学会会長就任。	区分所有法、新住宅市街地開発法、新鳥獣保護及狩猟ニ関スル法	オリンピック景気 黒四ダム完成
昭和39年	1964		新河川法、工業整備特別地域建設法、土地改良法、厚生省国立公園部設立、児童施設研究会『こどものあそびば 計画・設計のすべて』、IFRA日本大会実行委員会『日本の造園』、第9回国際造園家会議(IFLA東京大会)、造園設計事務所連合設立、東都造園建設業協同組合設立	10.10東京オリンピック開会 海外旅行の自由化実施 東海道新幹線開業 名神高速道路全線開通
昭和40年	1965	12.18 上原敬二、寿寿、勲四等瑞宝章叙勲、著書百冊刊行祝賀会が開催さる(私学会館)。	公害防止事業団法、建設省「河川敷地の占用許可について」、日本造園緑地組合連合会設立、河川敷地公園の誕生、研究学園都市建設開始	ILO87号条約 日韓基本条約調印
昭和41年	1966		古都法、首都圏近郊緑地保全法、住宅建設計画法、「造園設計技術者名簿」の作成(造園設計事務所連合)、植物園協会設立	いざなぎ景気 東京海上ビル美観論争
昭和42年	1967	5. 江山正美教授、日本造園学会会長就任。 11.1 造園学科『造園学関係文献集(単行和書部)』発行(わが国初の造園書文献目録)。	「経済社会発展計画」(経済審議会)、公害対策基本法、近畿圏の保全地域の整備に関する法律、日本造園設計事務所連合設立(造園設計事務所連合を改称)、海中公園センター設立、平城宮東院庭園発掘調査開始、東京海上ビルを契機に美観論争が起る	美濃部都政 資本取引自由化決定
昭和43年	1968	3.1 造園学科『造園学関係雑誌索引集其の一』発行(わが国初の雑誌文献目録)。 4.1 農場の「樹芸係」を「造園樹木係」と名称を改める。	文化庁設立 新全総 林野庁自然休養林制度制定 新全国総合開発計画発表 観光資源保護財団設立 東海自然歩道構想 佐藤昌『欧米公園緑地発達史』 「ランドスケープジャーナル」創刊 明治の森(東京高尾・大阪箕面)	5月革命、学園闘争 川端康成ノーベル文学賞受賞 大気汚染防止法 小笠原返還協定に調印 イタイイタイ病の原因がカドミウムと認定
昭和44年	1969	Laマークこのころ(昭和44～45)から使用。(江山正美教授デザイン) 4.1 研究室を6つに整備し、造園学研究室、造園計画学研究室、造園植物学第一研究室、造園植物学第二研究室、造園工学研究室、造園管理学研究室。 4.1 農場の「造園樹木係」を「造園係」と改める。造園実習が農場にて再開される。移植・竹垣・石組・作庭を4教程3班にわけ年間12回実施。実習担当の班編成は5班、220名が4年次で実施。1960年以後の卒業生の集い「60F」発会、機関誌『60F』1号発行。 11.3 造園学科教員・学生有志百余名が「自然保護＝人間保護」を提唱して緑の旗のデモ行進(日比谷公園→銀座)を行い、新聞各紙が報道する。	都市再開発法 農業振興地域の整備に関する法律	アポロ11月号面着陸 東大安田講堂封鎖事件 東大・東教大(現筑波大)の4学部の入試中止 マンションブームと高層化 東名高速道路開通
昭和45年	1970	1.20 江山正美『造園学とは何か? 私たちが選んだ途の未来像』を全学生に配布。 3.25 1号館へ研究室を移転し、面積を拡張、施設整備を図る。 4.1 『造園学科指針』第1号を発行し造園学科と学生の学習に方向性を与える。 4.1 造園学科創立45周年を記念して「造園大賞」を制定し、5月18日第1回の授賞式(平井昌信)。 4. 戸野琢磨記念図書受入。 5.18 「平山勝蔵古稀祝賀会」を開催し、併せて造園学科の前身東京高等造園学校の授業開始日を記念しこの年以後毎年5月18日(後には前後の土曜に変更)に「造園学科卒業生の集い」を定例化する。造園学科創立45周年を記念して『現代造園用語辞典』、『造園学科抄史』を発行。 11.3 旧1号館スラローム型園路の中庭完成(江山正美設計)。 11.7 第2回の緑の旗デモ行進(世田谷公園→明治公園)を学科一体として実施、各新聞、放送局がとりあげる。	総合設計制度 水質汚濁防止法 海中公園の誕生 東京造園家協会設立 「季刊ランドスケープ」創刊	日本万国博覧会開催(大阪) 国鉄デイスカバージャパン 歩行者天国の試験的实施(銀座、新宿等) 国産初の人工衛星の打ち上げ成功 三島由紀夫、市ヶ谷の自衛隊内でクーデターを扇動、割腹自殺 核兵器拡散防止条約調印
昭和46年	1971	1. 「LALAの会」(造園学科女子学生の会)発足。1980年代頃まで活動。 3.25『造園学科指針』第2号を発行。 造園実習の5班専攻編成をやめ、学生を6班に分け、輪番制で実施。農場で金曜日に班ごと実習。この時より造園学科の教員も実習指導を担当。6班3教程(四ッ目垣・石組・作庭) 5.18 上原敬二著明治神宮の森造成の記録を『人のつくれた森』として造園学科より発行。 8. 井下清に名誉農学博士号が贈られる。 11. 緑の大旗、造園学科応援旗使用される。 10.17 造園学科が中心となって「農大を緑化する会」を組織し、有志の寄附金をもとにメタセコイア5本(図書館前)等でキャンパス緑化を図る(東京農薬大学創立80周年記念)。	環境庁設立 日本造園建設業協会設立 特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約 『景観論』(G.エックボ)	沖縄返還協定 NHK総合テレビ・全カラー放送化開始

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
昭和47年	1972	1.20『60F』2号発行。 2.1『造園学関係雑誌索引集其の二』発行。 4.1 研究室の名称の一部を変更し、系統化する(カッコ内は旧名称)。造園計画第一研究室(造園学)、造園計画第二研究室(造園計画学)、造園計画第三研究室(造園管理学)、造園植物学第一研究室、造園植物学第二研究室、造園工学研究室。 4.1 造園学科指針第3号『現代社会と造園学』を発行。 4.1 造園学科指針第4号『環境計画の科学』発行。	自然環境保全法 都市公園等整備緊急措置法 都市公園等整備5カ年計画発表 「庭」創刊 広域公園の設置開始	沖縄復帰(沖縄県復活) 日中国交正常化 田中角栄「日本列島改造論」 高松塚古墳で極彩色壁画発見 国連人間環境会議 山陽新幹線、新大阪～岡山間開業
昭和48年	1973	4.1 造園学科指針第4号『環境計画の科学』発行。 10. 農大主庭(図書館前)をスロームを基調に設計整備(江山正美設計)、園路広場植栽が完成し、その間にNHK・テレビがとりあげた。 10.16 造園学科『本学の環境整備について』を全学に配布し、大学全体の環境整備の基本を示し、理解を求めた。 12. 父兄会の援助により造園学科監修の学術映画『環境計画の科学ーこれからの造園学』を完成。	資源エネルギー庁設立 都市緑地保全法 工業立地法改正 日本緑化センター設立 日本道路緑化保全協会発足 日本植木協会設立 日本造園組合連合会設立 緑の国勢調査開始 造園技能士制度制定 「緑化産業新聞」創刊 「グリーンエイジ」創刊	オイルショック 江崎玲於奈・ノーベル物理学賞受賞 東独、北ベトナムと国交樹立
昭和49年	1974	4.1 大学院農学専攻内に造園学特論が新設され、造園の修士、博士課程が発足。 4.1 造園学科指針第5号『環境計画の科学』発行。 8.18 造園学科創立50周年を記念して「アメリカ文明の長短をさぐる一研修旅行」を実施、卒業生25名参加(9月1日迄、カナダ、アメリカの国立公園、都市公園、広場等を視察)。 10.31 造園学科創立50周年を記念して、大学に礎石(Milestone、江山正美設計・本小松石を建立、除幕寄贈(併せて収獲祭優勝杯2個を農友会に贈呈))。 11.28 造園学科創立50周年記念式典挙行(京王プラザホテル)、併せて上原に50周年を記念して記念品(卒業生からの寄金)を贈呈。	国土庁設置 国土利用計画法 生産緑地法公布 日本公園緑地管理財団設立 ナチュラリスト制度(富山県) 東海道自然歩道開通 国立公害研究所設置 国営武蔵丘陵森林公園(初の国営森林公園・明治百年記念)	地価高騰 佐藤栄作ノーベル平和賞受賞 山陽新幹線開通
昭和50年	1975	4.1 造園学科指針第6号『未知に挑む』発行。 4.1 農場の園芸部造園係を造園部に改める。 10. 造園学科創立50周年記念事業として『東京農業大学造園学科卒業生名簿』発行。 11.8 上原敬二、名誉教授となる。 『造園研究』No.1発行。	文化財保護法改正(重要伝統的建造物群保存地区制度)、環境庁第1回緑の国勢調査発表、日本造園組合連合会発足、造園施工管理技術検定制度制定、宅地開発公団設立	沖縄国際海洋博覧会開催 新幹線博多まで運転開始 ベトナム戦争終結
昭和51年	1976	4.1 学科学生定員が80名から120名に。 6.7 本学科創立者上原敬二からの御芳志を基金として、優秀な卒業論文を対象とする『上原賞』を設定した(昭53以降は江山賞ができたので造園植物部門の卒論を対象とするようになった)。 11. 井下清記念図書受入。	都市公園法改正 都市緑化対策推進要綱 日本造園修景協会発足(旧ガーデン協会) 『日本庭園史大系』(重森三玲・完途)完結	ロッキード事件発覚 天皇在位50周年式典開催 郵便料金値上げ 公共事業による遺跡の破壊増加で埋蔵文化財保存の訴訟増加
昭和52年	1977	2.5 江山正美教授退職記念講義で“Cherish your SCAPETECTURE”を語る。 3. 江山正美古稀祝賀記念事業委員会による記念出版として『スケープテクチュア・明日の造園学』発刊。 3.17 18期生の寄金と林弥栄教授の御厚意により、農大主庭にペニバナトチノキを移植。 4.1 小澤知雄(農学博士)学科長就任。(学科主事・77.4ー79.3 永嶋正信／79.4ー81.3 平井昌信／81.4ー83.3 進士五十八) 5. 江山正美、名誉教授となる。 5. 内山正雄教授、日本造園学会会長就任(ー79.4.)。 11. 造園学科全教職員の参加によるプロジェクト研究「生活環境における花と緑の心理的效果に関する調査研究」が行われた(東京農業大学農学集報・特別号第1号、1978.1)。	三全総 「緑のマスタープラン策定の推進について」都市局長通達 『日本公園緑地発達史』(佐藤昌) 『スケープテクチュア』(江山正美)	日本人の9割が中流意識 アジア初の社会主義インターナショナル会議を東京で開催
昭和53年	1978	4. 従来の『造園学科案内』の考え方を受け継ぎ、新たに『造園学科案内』を発行。 4.1造園実習のクラス編成をA・Bクラスに分け、金曜・A・B隔週、終日で年10～12回実施(根巻・移植／整姿・剪定／圃場管理・支柱工／踏踏／石張工／四ッ目垣／石組／作庭／機械／土壌調査及び分析検定)。 5.13号館上庭園(江山正美設計:ちえいの庭)完成。 6.故 江山東京農業大学造園学科葬挙行。 6.故 江山(1978.6.20逝去、本学名誉教授、元造園学科長)の御遺族からのご芳志を基金に、優秀な卒業論文(特に造園計画・施工部門)を対象とする『江山賞』を設定した。 7.8「東京緑友会」発足。これ以前京都、神奈川、東海に、これ以後、北海道、埼玉、福岡、千葉等に、造園OB中心の同窓会が結成される。 7. 1号館(旧)南西隅に故江山正美名誉教授遺愛のイヌシデを植樹(2014年現在、樹齢48年)。	都市緑化のための植樹等5ヵ年計画 『造園ハンドブック』(日本造園学会) 『日本公園百年史』(日本公園百年史刊行会)	日中平和友好条約調印 成田空港開港
昭和54年	1979	4.『造園学科案内』(1979年版)を発行。 10.1 植樹委員会(小澤知雄、林弥栄他)により農大キャンパスの植樹計画が策定され、以降約3,400本が植栽された。 10.旧1号館中庭を造園学科の設計で広場型に改造。	特定住宅市街地総合整備促進事業 環境庁・富士山グリーン作戦 『緑の東京史』	インバーダーゲーム大流行 元号法施行 大学共通一次試験実施 奈良市で太安万侶の墓誌出土、

年号	西暦	東京農薬大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
昭和55年	1980	8.1新築11号館として造園学科研究棟完成移転。6研究室、演習室、製図室等同棟内に配置し、研究室名称を改称(カッコ内は旧名称)。 庭園学・造園学原論研究室(計1)、都市緑地計画学研究室(計2)、風景計画学研究室(計3)、造園地被・植栽学研究室(植1)、造園樹木学研究室(植2)、造園工学研究室(同)。主な施設／第一製図室(120名収容)／第二製図室(80名収容)／造園工学演習室(100名収容)／造形演習室(100名収容)／造園実習園場(本学厚木農場内) 9.『造園学科案内』(三訂版)を発行。 10.中国林業技術交流団が農大造園学科を訪問。	地区計画制度(都市計画法改正) 日本造園設計事務所連合を日本造園コンサルタント協会に改称 住宅・都市整備公団設立	イラン・イラク戦争 衆参初の同日選挙 民法及び家事審判法改正 東大寺大仏殿大修理
昭和56年	1981			スペースシャトル打ち上げ
昭和56年	1981	2. 11号館前にハナミズキとソメイヨシノが列植される。 4. 推薦入試制度による初の新入生入学。以後この制度が多様な学生入学の契機となる。 4.「林弥栄の古稀を祝う会」による記念出版として『樹木とともに五十年―林弥栄古稀記念論文・業績集』発刊。 5.小澤教授、日本造園学会会長就任(―83.4)。 5. 中国林業教育考察団が学科を訪問。 5. 25期卒業生が造園学科旗を寄贈。 7. IFLA世界学生競技設計(テーマ:フロンティア・ランドスケープ)に造園学科・都市緑地計画学研究室の学生作品が2席に入選する。 11.故上原敬二(1981.10.24逝去、享年92歳。叙勲四等旭日小綬章、叙従五位、本学名誉教授、元造園学科長)の葬儀挙行。	日本住宅公団と宅地開発公団が合併改組され、住宅・都市整備公団が発足 広場公園(ポケットパーク)を公園緑地整備事業のひとつとして制度化	初の「北方領土の日」開催 ローマ法王ヨハネ・パウロ2世来日 福井謙一・ノーベル化学賞受賞
昭和57年	1982	3. 造園学科記録82―1〜3号として佐藤昌、高橋進、針ヶ谷鐘吉各先生の著作目録発行。 4. 編集も新たに『造園学科指針』と『造園学科案内(リーフレット式)』を発行。 4. 造園に関わるあらゆる図面や作品記録を収集し、教育・研究で活用できるよう検索システムを備えて保存することを目的として造園学科内に「造園図面ライブラリー」を開設。 5.29 高橋進先生の著作『風景美の創造と保護』出版記念会開催(風景計画学研究室＋造園観光研究会主催)。 5.29 北京市園林緑化考察団が農大造園学科を訪問。 6. 造園学科記録82―4〜6号として上原敬二、江山正美、林弥栄、各先生の著作目録発行。 9. 造園学科記録82―7号『平山勝蔵の著作』を発行。 10.『造園学論集第1号特集「造園大賞」業績・作品』80p.を発行。 10.故上原敬二名誉教授の蔵書が大学に寄贈され、図書館に『上原敬二氏記念文庫』開設。	昭和記念公園(東京) 桂離宮・初の全面解体修理 横浜みなとみらい21開発に着手	五百円硬貨発行 東北新幹線(大宮〜盛岡)、上越新幹線(大宮〜新潟)開業 フォークランド紛争
昭和58年	1983	1.『造園学論集第2号優秀卒業論文要旨(1955年度―1975年度)』238p.を発行。 3.『造園学論集第3号優秀卒業論文要旨(1976年度―1981年度)』147p.を発行。 4.1 金井格学科長就任。(学科主事・83.4―85.3近藤三雄)。 造園実習内に「花壇実習」をとり入れる。 8. 造園学科記録83―1号『戸野琢磨の著作』を発行。 11.日本造園学会関東支部設立総会、第1回支部大会を農大で開催(支部長に金井格教授就任)、造園学科内に日本造園学会関東支部の事務局が置かれる。以後、支部大会、例会、部会、幹事会が農大内を中心に活発に開催される。	市街地住宅総合設計制度 HOPE計画制度 東京ディズニーランド開園(千葉)	ファミリーコンピュータ発売 全国初の比例代表制選挙
昭和59年	1984		湖沼水質保全特別措置法	第3セクター設置ブーム
昭和59年	1984	2.28 本間啓教授逝去。 3. 造園学科記録83―2、3号として龍居松之助、永見健一両者の著作目録発行。 4. 小澤知雄教授、日本芝草学会会長就任。 4. 造園学科内に「学科史料室」を開設。 4. 1年生学外オリエンテーション(於:富士農場)に、造園フィールドゼミを導入。 7. 造園学科創立60周年記念事業として『東京農薬大学造園学科卒業生名簿』および『造園学科六十年史』を出版。 10.1小澤知雄教授(―89.3)、農大成人学校長就任。造園学科各教員も園芸・造園科の講義を担当。	東京都・「緑の倍增計画」を策定 建設省・都市景観懇談会設置	コアラ来日 グリオ社長誘拐事件(グリオ・森永事件に発展)

◇造園学教育の黎明◇

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
昭和60年	1985	3.『造園学論集第4号』発行。(以降86.3『第5号』、87.3『第6号』、88.3『第7号』、89.3『第8号』発行) 4.1 鈴木忠義(農学博士)学科長就任。(85.4－87.3 学科主事・荻茂寿太郎) 3.造園学科指導の学術映画『用と景～現代造園の視点～』(農大父兄会＋図書館制作)完成。 5.22 IFLA日本大会国際造園学生競技設計(テーマ:環境と創造)審査会開催 於造園学科。造園学科3年生学生グループ作品入選。 6.7 北京林業大学孟兆禎の講演会開催(演題:中国造園事情・中国庭園の構成と技法)。 6.造園学科創立60周年記念事業として『造園用語辞典』(535p.、解説語彙2300語、彰国社刊)出版。 9.21 龍居松之助生誕百年記念会開催(農大旧図書館内視聴覚ホール)。 11. 緑友会の全国組織「東京農業大学緑友会」発足。	オゾン層保護に関する条約 『宗教緑地論』(前島康彦)	つくば科学万博開催(茨城) 奈良斑鳩の藤ノ木古墳より朱塗りの家 形石棺出土
昭和61年	1986	2.25－3.3 造園学科「造園特別教育プログラム」のセミナー開催。台湾の研修生18名に修了証。	公園施設賠償保険 「季刊ジャパンランドスケープ」創刊	チャルノブイリ原発事故 男女雇用機会均等法 ハレー彗星接近
昭和62年	1987	4.1 平野侃三(農学博士)学科長就任。(学科主事87.4－89.3麻生恵／89.4－91.3小林章) 5. 内山正雄、客員教授となる。5.塩田敏志教授(農学博士)、日本造園学会会長就任(－89.4)。 10. この年、造園学科1年生の体育実技は農大旧浦和総合運動場にて実施。 11. 造園学科記録87－1号『内山正雄の著作』発行。 11.25 内山正雄退職記念会開催。内山正雄編『都市緑地の計画と設計』出版。	四全総 総合保養地域整備法(リゾート法) 集落地域整備法	国鉄民営化 利根川進・ノーベル医学・生理学賞受賞
昭和63年	1988	3.25 韓国ソウル大・農科大学にて造景学科の学生と風景計画学研究室の学生を中心に交流会。 4.1 造園総合演習Ⅰ～Ⅳを柱とし、造園学科のカリキュラムを改定。 7.塩田教授、日本学術会議会員就任(－91.6)。 10. 造園観光研究会『観研30年史』発行。	特定物質の規制等によるオゾン層の保護に関する法律	青函トンネル開業・瀬戸大橋開通 ベレストロイカ 「ふるさと創生」1億円交付決定 リクルート事件
昭和64年 平成元年	1989	4. 小澤知雄、名誉教授となる。 4. 造園総合演習Ⅰ(ランドスケープ・ウォッチング入門)開始。2年生のフィールドでの学習を充実。新カリ造園実習開始(飛石・つくばい、樹木の栽培管理、修景地維持管理、機械、丁張、垣根)、従来の4年次から2年次配当に。 9.25－27 造園総合演習Ⅱ開始。2年生120名と担当教員が富士畜産農場に宿泊、集中演習開始。 10.24 小澤知雄の退職記念会開催。『グラウンドカバープランツ』出版。 11. 造園学科記録89－1号『小澤知雄の著作』刊行。	土地基本法	1.6昭和天皇崩御(平成に改元) 天安門事件 ベルリンの壁崩壊 消費税スタート 佐賀で吉野ヶ里遺跡発見
平成2年	1990	4.1－9.30 国際花と緑の博覧会、大阪にて開催。造園学科教員も審査員等で参画。 4.1 大学院農学研究科造園学専攻(修士課程)発足。塩田教授専攻主任就任。(91.4－専攻主事 荻茂助教授) 4.1 造園総合演習Ⅰテキスト『ランドスケープ・ウォッチング入門』(農大出版会)出版。 4.6 造園学科新入生202名、そのうち女子54名。造園学専攻修士1年生(M1)8名入学。 4. 造園総合演習Ⅲ開始。3年生が厚木中央農場を対象に計画演習。 9. IFLAノルウェー大会・国際学生競技設計(テーマ:水と出合う空間)に造園学科学生グループ作品がNLA受賞。 9.25 造園総合演習Ⅱテキスト『キャンプ場の計画入門』出版(2版より『サイトプランニング入門』と改題)。 10.8 タイ王国チェンマイ大学農学部長が農大国際交流センターを通じ造園学科訪問。 11.14 「造園OB大学校」を東京緑友会が開催(第1回近藤三雄教授、以降各教員が講義)。 東京農業大学短期大学から東京農業大学短期学部に変更(生物生産技術学科、環境緑地学科、醸造学科、栄養学科)	多自然型川づくりの通達 うるおい・緑・景観モデルまちづくり制度	バブル崩壊 国際花と緑の博覧会(大阪) 東西ドイツ統一
平成3年	1991	4.1 永嶋正信学科長就任。(91.4－93.3学科主事濱野周泰) 4. 造園総合演習Ⅳ開始、4年生が安行、塩山(次年度から稲田)の産地見学、作品見学、石組モデル、実施設計。造園特別演習も開始、卒論の演習や多彩な非常勤講師陣の演習、造園実習の内容に創造実習を追加。 4. アシスタントシップ(TA)制を採用。大学院生が演習・実習のティーチングアシスタントに採用 5.平野侃三教授、日本都市計画学会会長就任(－93.1)。 5.18 東京農業大学創立百周年記念式典開催。造園学科教員は百周年記念事業の各部門に活躍、造園学科OBも協力。 10.1進士五十八教授、学生部長就任(－93.9)。	樹木医認定制度発足	湾岸戦争 ソ連解体 雲仙岳で火砕流発生

年号	西暦	東京農薬大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
平成4年	1992	3. 造園学専攻から初の修了生、アジア地域初のMLA。 造園学科卒業生が7000名を超える。この年、従来の「卒業証書」から「学位記」に変更。 3. 『造園学論集9号』発行。 4. 臨時定員増により造園学科の定員は200名に(平成11年度まで)。 4. 造園実習の内容に作庭実習を追加。 10. 日本造園学会関東支部10周年記念大会開催 於農大。農大学生が呼びかけ、学会内に学生セッションを初めて設ける。	都市計画法改正(市町村マスタープラン制度) 定期借地権創設(借地借家法) 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律	地球環境サミット 日本が「世界遺産条約」を締結 国連環境開発会議(アジェンダ21の採択) 生物の多様性に関する条約 PKO協力法案可決
平成5年	1993	4.1 近藤三雄教授学科長就任。(93.4ー学科主事鈴木誠) 4. 学士編入および他大学からの編入学生の受け入れを開始。共に2年次、3名編入。 4.16 オーストラリア、クイーンズ大学のジョージ・ウィリアムス造園学科を訪問。 10.1 進士五十八教授、総合研究所長就任。 10.1 平野侃三教授、富士畜産農場長就任。 10.1 金子忠一講師、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学に1年間の依命留学。 11. 北沢清助教授労働大臣「功労賞」受賞(技能検定委員として)	環境基本法	Jリーグ開幕 北海道南西沖地震 東京サミット
平成6年	1994	2.25 小澤知雄、勲四等瑞宝章叙勲祝賀会開催。 4. 大学教養課程の改組に供ない、従来の6研究室に「造園共通研究室」が加わり、7研究室体制となる。 5.18 造園学科70周年記念式典。『東京農薬大学創設70周年記念卒業生名簿／七十周年史』発行。	「緑の基本計画」制度化 日本造園学会誌「造園雑誌」を「ランドスケープ研究」に改称	青森県で三内丸山遺跡発見 関西空港開港 大江健三郎・ノーベル文学賞受賞
平成7年	1995	10. 進士五十八教授 農学部長に就任。近藤三雄教授 学生部長に就任。 10. 養茂寿太郎教授造園学科長就任。(学科主事ー96.3鈴木誠、96.4ー高橋新平) 12.18号館完成にともない1階に200人収容の学部共通演習室、3階にコンピューター演習室を整備。12.『造園学論集別冊第1号』発行	生物多様性国家戦略 地方分権推進法 「季刊ランドスケープデザイン」創刊	阪神・淡路大震災 地下鉄サリン事件
平成8年	1996	4.『造園学科指針』をB5版に改定。 5. 造園学科70周年を記念し、卒業生の寄付金を基に企画された「造園情報センター」が11号館5Fに開設。 5. 1995年度の卒業論文の要旨をまとめた「卒業論文要旨集」が編集される(以後毎年編集される)。 8. 高校生向けのキャンパス見学会(毎夏開催オープンキャンパス)に際し学科教員・学生有志が学内美化のためのグラウンドワークを開始。	文化財保護法改正(文化財登録制度創設) 日本造園学会「ランドスケープ大系」発刊開始	原爆ドームが世界遺産に登録 O-157が全国で猛威
平成9年	1997	3. 「造園学論集」別冊第2号発行。 6. 風景計画学研究室が長年関与してきた新潟・巻機山での景観保全活動が第15回朝日森林文化賞(巻機山景観保全ボランティアーズ)を受賞。 11. 日本造園学会と韓国造園学会による初の日韓国際シンポジウム「ウォーターフロントのランドスケープ」を東京農薬大学にて開催。 12. 「造園学論集」別冊第3号発行。	環境影響評価法、地球環境問題に関する行動計画	温暖化防止京都議定書締結 アイヌ文化振興法成立 英領香港が中国に返還
平成10年	1998	3. 「造園学論集」別冊第4号発行。 4. 学部改組に伴い、地域環境科学部(森林総合科学科、生産環境工学科、造園科学科)が発足。進士五十八教授 初代地域環境科学部長に就任(ー99.7)。 4. 養茂寿太郎教授初代造園科学科長に就任(学科主事98.4ー00.3金子忠一、00.4ー鈴木貢次郎)。従来の7研究室から3分野12研究室体制がスタート。造園科学科臨時定員増(120名定員を200名に、平成10ー11年度)。 大学院造園学専攻修士課程定員を8名から12名に改定。学科教育の一環として公務員志望者、留学生・留学希望者、造園業後継者・起業者を対象として特別プログラム(チューター制)を導入。	五全総 地球温暖化防止に関する法律 中心市街地活性化法	農政改革大綱 NPO法
平成11年	1999	5. 進士五十八教授 日本造園学会会長就任(ー01.5)。 7. 第10代東京農薬大学学長に進士五十八教授就任(短期大学長を兼任)。 第7代東京農薬大学成人学校校長に近藤三雄教授就任(ー04.3)。 9. 11号館4階に大学院生用ネットワークルーム整備。 9. 鈴木誠助教授、米国・カリフォルニア大学パークレー校に1年間の依命留学。	日本造園コンサルタンツ協会がランドスケープコンサルタンツ協会に改称	PFI法 食料・農業・農村基本法
平成12年	2000	3. 大学院造園学専攻修士課程10周年を記念し『造園学論集第12号修士論文要旨集1992ー2000』発行。	大深度地下の公共的使用に関する特別措置法 国際園芸・造園博覧会(淡路島)	地方分権、循環型社会形成基本法 旧石器発掘ねつ造事件 白川英樹・ノーベル化学賞受賞

◇造園学教育の黎明◇

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
平成13年	2001	3. 「造園学論集第13号」、「造園学論集 別冊第5号(博士論文梗概集1)」発行。 4.1 根本正之教授学科長就任(学科主事02.3—鈴木貢次郎、02.4—服部勉) 4. 「造園学論集 別冊第6号(博士論文梗概集2)」発行。 5. 「造園学論集 別冊第7号(博士論文梗概集3)」発行。 5. 日本造園学会全国大会を東京農業大学にて開催。 7.11号館6階大学院生ブース、5階GISルーム整備。 8. 『1級造園施工管理技士試験短期総仕上げと演習問題』(東京農業大学造園技術研究会 編)刊行 12.20 金子忠一講師「都市公園の管理計画指針の基本構造に関する研究」によりわが国初の「博士(造園学)」を授与される。	東京における自然の保護と回復に関する条例	小泉内閣発足 省庁再編 国立研究所等の独立行政法人化 能楽が世界無形文化遺産に登録 アメリカで同時多発テロ事件発生
平成14年	2002	3. 造園科学科から学位記「学士(地域環境科学)」初の卒業生。 4. 学部共通テキスト『地域環境科学概論』刊行。 4. 大学院造園学専攻博士後期課程が始まる。 5. 『造園用語辞典 第2版』刊行。 9. 『地域環境科学概論Ⅱ』刊行。 9. 荒井歩助手、英国・リトルカレッジに1年間の依命留学。 10. 日本造園学会関東支部第20回支部大会を開催。 11. 東京農業大学地域環境科学部造園科学科プログラム(農学一般関連分野)として日本技術者認定機構(JABEE)の試行審査を受審。	都市再生特別措置法 登録ランドスケープアーキテクト(RLA)制度 文化財庭園保存技術が国の選定保存技術に選定	日本・北朝鮮、初の首脳会談
平成15年	2003	3.11号館6階ランドスケープ資源植物分野実験室整備。 4.1 麻生恵教授学科長就任(学科主事—04.3服部勉、04.4—阿部伸太) 5. 『1級造園施工管理技士試験短期総仕上げと演習問題 第二版』刊行 6. 進士五十八教授 日本都市計画学会会長就任。 10. 日本造園学会関東支部第21回支部大会(設立20周年記念)を開催。	指定管理者制度発足	有事関連三法成立
平成16年	2004	3. 「造園学論集第14号」、「造園学論集 別冊第8号(博士論文梗概集4)」、「造園学論集 別冊第9号」発行。 4. 養茂寿太郎教授 東京農業大学副学長(大学改革推進担当)に就任。 4. 樹木医補資格養成機関に認定。 4. 近藤三雄教授、(社)日本芝草学会会長就任(—08.3) 5. 造園科学科80周年記念式典。80周年記念事業の一環として造園科学科教授8名による東京農大カレッジ講座「庭園から都市の緑の創造へ ～造園学の80年」を開講。(—04.7、全8回)。 6. 近藤三雄教授 日本芝草学会会長就任。 11. 東京農業大学地域環境科学部造園科学科プログラム(農学一般関連分野)として日本技術者認定機構(JABEE)の本審査を受審。 11. 天空の和みの庭(農大一高、屋上庭園制作、都市緑化技術研究室・造園地被学研究室) 12. 美しい国づくりランドスケープアーキテクト展(食と農の博物館、代表・養茂寿太郎教授—05.3)	景観緑三法、文化的景観創設 独立行政法人都市再生機構発足	自衛隊、イラクへ派遣 新潟中越地震発生
平成17年	2005	3. 本年度卒業生よりJABBE、樹木医補の認定が開始される。 3. 大学院造園学専攻博士後期課程より初の「博士(造園学)」3名が誕生。 3. 『東京農業大学地域環境科学部造園科学科八十年史』発行。 3. 「海外の日本庭園シンポジウム～海を渡った日本庭園のこれまでとこれから～」を鈴木誠教授をはじめ海外からの研究者を交え開催。 4. 小林章教授学科長就任(学科主事—06.3 阿部伸太、06.4—栗田和弥) 4. 梶田信彌講師、日本桜草展開始(「食と農」の博物館、植物生態学研究室)、以降毎年恒例となる。	愛・地球博開催(愛知)	郵政民営化法成立
平成18年	2006	1. 「造園学論集 第15号」発行。 3. 目黒十五庭(目黒区役所屋上庭園制作、都市緑化技術研究室・造園地被学研究室) 3. 「造園学論集 第16号」発行。 4. 本年度入学生より、測量士補の資格習得が適用される。 4. 麻生恵教授、エクステンションセンター長就任(—24.3)。 5. 「造園学論集 別冊第10号」発行。 11. 環境誌展(「食と農」の博物館、造園樹木学研究室— 4. 屋上緑化・壁面緑化展(「食と農」の博物館、都市緑化技術研究室・造園地被学研究室—11.) 4. 巻機山展(「食と農」の博物館 巻機山企画展実行委員会—8.) 4. 進士五十八教授、紫綬褒章を受章。 5. 養茂寿太郎教授、(社)日本造園学会会長就任(—09.5) 5. 『1級造園施工管理技士試験短期総仕上げと演習問題 第三版』刊行。 9. 高橋新平准教授、豪州・西オーストラリア大学に1年間の依命留学。 9. 「京都研修」(京都迎賓館、桂離宮、修学院離宮)進士五十八教授の企画で開始。 9. 「造園学論集 別冊第11号(博士論文梗概集5)」発行。 10. 日本造園学会関東支部第25回支部大会を開催。	防災公園の創設	改正教育基本法成立
平成19年	2007		21世紀観光立国戦略、文化庁・歴史文化基本構想の策定推進開始	参議院選挙で自民党大敗 高松塚古墳の石室解体 石見银山遺跡・世界遺産に登録

年号	西暦	東京農薬大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
平成20年	2008	2. 「造園学論集 別冊第12号」発行。 4. 鈴木誠教授、学科長就任(学科主事-10.3荒井歩) 4. 小林章教授、短期大学部環境緑地学科長就任(短期大学部教授併任-09.3) 4. 麻生恵教授、日本レジャー・レクリエーション学会理事長に就任(-14.3) 9. 「造園学論集 別冊第13号(博士論文梗概集6)」発行。 11. 2009年の上原敬二・生誕120周年を記念し、地球を庭にした「造園」の仕事と魅力展を開催(「食と農」の博物館、造園科学科-09.5)	観光庁設置、地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律(歴史まちづくり法)公布	北海道洞爺湖サミット
平成21年	2009	3. 馬事公苑前緑地整備(世田谷区との協働事業として壁面緑化などを制作、都市緑化技術研究室・造園地被学研究室) 3.造園科学科紹介DVD初版完成(東京農薬大学教育後援会制作) 3.30 造園科学科ブログ「ランドスケープの広場」開設。 5. 『「造園力」で地球を庭に』刊行。 5. 改訂版『人のつづった森—明治神宮の森「永遠の杜」造成の記録』刊行。 9. 阿部伸太准教授、仏国・ボーヴェ・ラ・サール・ポリテクニク学院に1年間の依命留学。 9.「ランドスケープデザイン30年の軌跡」展～都市に暮らし、自然と遊び、歴史に学ぶ～(「食と農」の博物館、造園科学科客員教授 戸田芳樹)	都市公園安全・安心対策緊急総合支援事業創設 歴史的環境形成総合支援事業創設	裁判員裁判開始
平成22年	2010	3. 「造園学論集 別冊14号(博士論文梗概集7、修士論文要旨集2)」発行。 4. 濱野周泰教授、学科長就任(学科主事-12.3山崎元也)。 4. 神奈川県川崎市環境局と地域環境科学部間で「かわさき多摩丘陵グリーン・コンソーシアム」を締結。1年生の造園体験演習などの教育や研究の場として活用開始。 4.花ひらき、美しく舞う緑の「造園文化」～江戸・明治に見るはじめて物語り～(-9. 「食と農」の博物館、近藤三雄教授企画) 9. 11号館各研究室改装整備。 11.鈴木貞次郎准教授、中国・中国科学院昆明植物研究所に半年間の依命留学。	都市公園技術標準改正 東京臨海広域防災公園開園 生物多様性自治体会議(COP10)が名古屋で開催	平城遷都1300年祭 東北新幹線が青森まで延伸
平成23年	2011	3. 「造園学論集 別冊15号」(博士論文梗概集8、修士論文要旨集3)発行。 4. 『造園用語辞典 第三版』刊行 5. (社)日本造園学会 東日本大震災復興支援緊急集会開催。 7. 新1号館竣工(旧体育館跡) 8. 近藤三雄教授ら、福島県郡山市で新しい方法による芝生の除染の実証実験実施。 11. (社)日本造園学会 平成23年度全国大会を開催(東日本大震災の延期を受けて開催)	屋外広告物法改正 平泉・小笠原諸島、世界遺産に登録	東日本大震災 福島原発事故発生 九州新幹線全面開業
平成24年	2012	2. 東京農薬大学国際日本庭園研究センター設置(代表鈴木誠教授)。 3. 「造園学論集 別冊16号」発行。 4. 金子忠一教授学科長就任(学科主事-14.3水庭千鶴子) 4. 麻生恵教授、地域環境科学部長就任。 4. 鈴木誠教授、エクステンションセンター長就任。 6. 鈴木誠教授、日本庭園学会会長就任。 9. 服部勉准教授、米国・ポートランド日本庭園(オレゴン日本庭園協会)に1年間の依命留学。 9. 第29回全国都市緑化フェアTOKYO(井の頭恩賜公園会場)に「心と体を豊かにする庭」を造園科学科として制作・出展。 9. 「造園学論集 別冊17号」発行。	都市公園法運用指針の改定 社団法人日本造園学会が公益社団法人化	山中伸弥、ノーベル生理学・医学賞受賞 東京スカイツリー完成
平成25年	2013	3. 本年度卒業生より自然再生士補の資格取得が適用される。 3. 目黒天空庭園(大橋ジャンクション屋上庭園制作、近藤三雄教授 企画・設計監修) 10. 日本造園学会関東支部第31回支部大会(設立30周年記念)を開催。 12. 北京林業大学園林学院と学術協定を締結。	富士山が世界遺産に登録 JLAU(一般社団法人 ランドスケープアーキテクト連盟)発足 三陸復興国立公園創設	2020年の夏季オリンピック・パラリンピックが東京に招致決定
平成26年	2014	1. 農大アカデミアセンター利用開始(図書館・事務棟) 2. 旧1号館解体完了 2. 『1級造園施工管理技士試験短期総仕上げと演習問題 第四版』刊行。 3.造園科学科紹介DVD第2版完成(東京農薬大学教育後援会制作) 4. 高橋新平教授、学科長就任(学科主事-國井洋一) 4. 金子忠一教授 学生部長就任。 4. 濱野周泰教授、生物環境調整室長就任。 5.11 造園科学科90周年記念式典。	3. 慶良間諸島国立公園(沖縄・渡嘉敷村、座間味村)わが国31番目の国立公園に指定	4. 消費税8%に引き上げ

◇造園学教育の黎明◇

年号	西暦	東京農薬大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
平成27年	2015	台湾東海大学と学部間学術協定を締結 上海交通大学と大学-学部間学術協定 8. 造園科学科創立100周年キックオフ北陸信越祝賀会を開催 11. 造園企業研究会開催 11. 北京林業大学(林菁先生来校 特別演習開講)		安全保障関連法が成立 COP21でパリ協定採択 大村智・北里大特別荣誉教授がノーベル医学生理学賞、梶田隆章・東京大宇宙線研究所長がノーベル物理学賞を受賞 新国立競技場建設、エンブレム白紙にTPP交渉が大筋合意 辺野古移設、国が着工
平成28年	2016	学科長(山崎元也), 主事(栗野隆) 8. 2016造園科学科地方縁友会 in ひろしまを開催 11. 造園企業研究会開催 11. 北京林業大学(林菁先生来校)特別演習開講 2. 2017造園科学科地方縁友会 in おきなわを開催		熊本地震 米大統領、歴史的な広島訪問 参院選で改憲勢力3分の2に 障害者施設で19人殺害 第31回夏季オリンピック・リオデジャネイロ大会、リオデジャネイロ五輪・パラリンピック大会 米大統領選でドナルド・トランプ氏勝利 英国がEU離脱決定 地球温暖化対策のパリ協定発効
平成29年	2017	東京農薬大学短期大学部の学生募集の停止 4. 鈴木誠教授京都大学に6ヶ月の特別研究期間制度で在籍 4. 地域環境科学部に地域創生科学科を開設 8. 「造園学論集第19号、第20号」発行 9. 國井洋一准教授ミシガン州立大学に1年間の依命留学 11. 北京林業大学(林菁先生来校)特別演習開講		九州北部豪雨 電通に有罪、働き方改革へ機運 ミャンマーからロヒンギャ難民 国連、核禁止条約採択
平成30年	2018	学科長(服部勉), 主事(水庭千鶴子) 副学長(金子忠一) 11. 造園企業研究会開催 11. 北京林業大学(林菁先生来校)特別演習開講 12. 造園企業研究会開催		西日本豪雨、北海道地震、災害相次ぐ 第23回冬季五輪平昌大会 中央省庁で障害者雇用増し 働き方改革、外国人就労で関連法 米朝が史上初の首脳会談 米中貿易摩擦が激化 メルケル独首相「引退」、欧州に衝撃 習中国主席が「1強」強化 米国抜きTPP11が発効
平成31年 /令和元年	2019	4. 栗野隆准教授、国立台湾師範大学に8ヶ月の依命留学 5. 「造園学論集第21号」発行 12. 造園企業研究会開催		天皇陛下が即位 ラグビーW杯日本大会開幕 京都アニメーション放火 東日本で台風大雨被害 ノーベル化学賞に吉野彰氏 沖縄・首里城が焼失
令和2年	2020	学科長(鈴木貢次郎), 主事(福岡孝則) サイエンスポートへ研究室移動 COVID-19パンデミックにより、緑のフォーラム等学内外の諸行事が中止、遠隔授業、リモートワークの実施 9. 「造園学論集第22号」発行	COVID-19パンデミックのため学会はオンライン開催	COVID-19パンデミック 高輪ゲートウェイ駅開業 米大統領選、バイデン氏勝利
令和3年	2021	学長(江口文陽), 学部長補佐(服部勉) 地域環境科学研究科を改組、造園科学科内の6研究体制を5研究室体制に改組 緑のフォーラム初のオンラインと対面のハイブリッド開催	「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界自然遺産登録、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録	栃木県足利市で山火事 ミャンマーでクーデター＝国軍が全権掌握 香港選挙制度変更を決定＝中国全人代 G7、中国に重大懸念＝外相声明 東京オリンピック・パラリンピック開催 香港のリンゴ日報、26年の歴史に幕 集団下校の小学生にトラック＝5人死傷
令和4年	2022	学科長(國井洋一), 主事(田中聡) 7. 造園学専攻の大学院生がドイツ・オスナブリュック応用科学大学主催国際ランドスケープデザインワークショップに参加 9. 経堂門東側の道路の拡幅工事開始 10. 旧13号館は解体完了、インターロッキング広場に 10. 3年ぶりに対面にて収穫祭及び教育懇談会を実施	日本造園学会全国大会が3年ぶりに対面で開催 観光地文化財庭園への外国人観光客が徐々に再開	ロシア軍、ウクライナ侵攻 改正民法が施行され、成人年齢が18歳に引下げ 沖縄復帰50年 安倍晋三元首相、銃撃により死亡
令和5年	2023	学科長(荒井歩), 主事(張平星)		英国王戴冠式
令和6年	2024	5. 造園科学科100周年記念式典		能登半島地震

3. 教育理念と人材育成の目標

3-1 地域環境科学部における造園科学科の位置付け

1998年（平成10）に創設された「地域環境科学部」は、「生物に対する深い理解」を基調とし、自然と人間の調和ある地域環境と生物資源の保全・利用・管理のための科学技術を確立することを目指しています。さらに、ミクロな地域環境問題の解決はもとより、マクロな広域環境問題、さらにはグローバルな地球環境問題の解決に貢献する人材を養成することを目的としています。

地域環境科学の中でも造園学は、空間を創る「技術」に特徴をもつ分野です。庭園主流の時代から公共的な環境空間整備が求められた時代、そして地域環境にアプローチすることを通じて、地球環境問題の解決を目指す時代へと時代の要請に伴い、造園学の担う役割や対象も大きく変わってきました。

このような変化に応えるために、造園科学科では、造園教育の本質的部分は残しつつも、時代に即した新たな知識を教育プログラムの中に体系的に組み込み、また教育の手法改革を重ねています。

3-2 造園科学科のアドミッション・ポリシー

東京農業大学のアドミッション・ポリシーである、「生命」「食料」「環境」「健康」「エネルギー」「地域創成」をテーマに、農と生命を科学し“生きる”を支える農学の進化に挑戦し、持続的な社会の発展に貢献する人材養成という大きな目的を踏まえ、造園科学科では「環境」と「緑」の分野を創造するために、次のような学生を求めています。

- (1) 自然、緑（みどり）、生きもの、環境、まちづくり、景観、デザイン、生活、健康、文化、歴史などへの興味と、自然科学・社会科学・人文科学の知識を有していること。
- (2) 人間と自然が共生した空間や環境を実現するための植物・生物・地域・歴史に関する知識と、論理的思考方法、コミュニケーション能力などの技術を備えた造園家、造園技術者として、地域社会へ貢献することを目指していること。

3-3 造園科学科の教育・研究上の目的と教育目標

造園科学科では、庭園文化を踏まえ、人間と自然の調和共生社会の実現をめざし、都市から田園、自然地域にわたる国土の環境と景観を保全・活用し創造するための、調査・計画・設計・施工・管理・運営及び材料に関する理論と応用を教授し、豊かな感性とデザイン力、確かな倫理観を持つ造園家、造園技術者を養成することを目的としています。

また上記の目的を踏まえ、教育目標として以下の3点を掲げています。

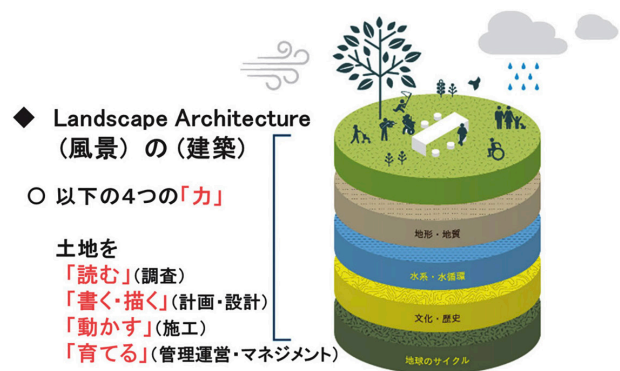


図3-1 造園家（＝ランドスケープアーキテクト）とは？

- (1) 都市環境から自然環境に至るまでの育成と保全に科学的かつ実践的に対応できる者。
- (2) 新たな環境を計画的、デザイン的に創成できる者。
- (3) 技術と実践力をもって自然環境の利活用を生態技術的、環境芸術的に処理できる者。

3-4 上原敬二の造園学への「まなざし」と「教育理念」

上原敬二 『造園学汎論』 序

術としての造園学は学に先立って何れの国にも発達して来たのであるが、然しその多くは斯学の一部門である庭園学の領域に限られて居た。

造園も他の新しい学術と同じ径路を踏んで今正に学界の水準線に上って来たのである。そこに組織と体系とを整えて従来の術に一步を進め系統的に学としての価値を将来せねばならぬ。果して然らば造園は学としての待遇を学界より受け得るであろうか、若し受け得るとせばその内容は如何なるものであろうか。

本書は我が国において造園を学として体系化し、組織立てたる最初の著述であると信ずる。不敏なる著者が微力を顧みずその価値を高唱し、普及を高調したる最初の試作である。

内容は著者の創意になれるもの多く、欧米に於ける造園のそれと趣を異にするもの少なからざるにより一々国情に照応せしめ、独特の排列樹立したつもりである。素より浅学その任に非ず将来の大成を期して益々本邦独自の造園学を完成せしめんことこそ著者畢生の願である。造園は著者のライフワークである、併せて著者全人格の反映である。従って本書の所論悉く造園に対して懐抱せる著者の主観である。その研究と普及との為には何物を犠牲に供するも厭はざる真摯と熱愛との情に於ては敢て人後に落ちないつもりである。

顧みて我国に於ける軌近造園界の発達を関するに遅々として振わず、常に前途尚お遑遠の感なきを得ず。既往を通じて将来を案ずるに何れの日か彼岸に達することが出来よう。さりながら霧深き学海の怒濤に棹すパイオニアの使命広漠たる



図 3-2 造園の対象領域

未開の領域に瘴癘と闘うは著者に授けられた試練の天命と信じ、忠実なる本書を伴侶とし、これによって斯界に投ぜられた一石の波紋を追って斯学研究の一路に精進したいと思う。幸いに著者と志を同うせられ造園発達の将来に望を嘱せられる諸賢の忠言によってこの小著をして益々価値あらしむる機運の到らんことを切望するのである。

本書著述中先輩諸賢の言説に対し忌憚なき妄評を敢てせる節々少からず。一つに斯学発達に貢献せんとする好学熱愛の余情として寛諒せられんことを読者諸君に懇請する次第である。

大正十三年三月一日

(上原敬二『造園学汎論』大正 13 年 10 月 林泉社より)

本校教授要項

- ▽本校は詰め込み主義を排す
- ▽本校は生徒の自由自習を尊重す
- ▽本校は教授よりも指導に重きを置く
- ▽本校は生徒の個性発達に重きをおく
- ▽本校は学と術の並行を期す

創立主旨

海外諸国に於ては已に造園に関する技術を修得する機関として専門学校の特徴を見ること久し、然るに我が国に於てはその必要性を唱導すること数年の久しきに亘るも、未だその創設を見ず。然も時世の進運、社会の欲求は遂に這般の方面に及び日に日に痛切を加えつつあり。

茲に本校は時世に鑑み新興學術の研究と欽如せる造園技術者の養成とを目的とし最も新しき教材と教育方針の下に、斯界の権威者たる専門家中の専門家を講師として招聘し、目下創業勿々に際し二ヶ年を以て専門教育に従事せりと雖も近く三ヶ年の課程に改め専門学校としての内容充実を図り所期の目的を達せんことを期す。

教授は公園、庭園、住宅、園芸、都市計画、田園都市、土地経営、建築工芸の全般に亘り、技術家として必修の學術技術を授け新しき領域を開拓して社会に貢献せしむるを理想とし、一つは時世の要求に応じ併せて新しき使命を奉じ、国家の文化的発展に資せんとす。

大正十三年四月

(大正 13 年「学校規則」より)

4. 研究・教育体制と施設

4-1 研究室における教育と研究

大学に来て、研究室という文字が頻繁に目につき、また知らず知らずの内にその言葉が耳に入ったりするようになります。研究室とは一体なんだろう？と思った人も多いでしょう。実験室かな？ 学習室かな？ 果ては高校にあったような職員室かな？ いろいろに思われます。

大学の研究室は、いわゆる企業の研究室や研究専門機関のそれとは違って、教育機関の中に位置付けられた研究室といえます。したがって、そこでの研究活動は、学生への教育効果を配慮し、かつその成果は教育へフィードバック（還元）されるものでなければなりません。

造園科学科の研究室の性格を理解するには、これに該当する英語でみるのが判りやすいと思います。「研究室」を辞典でみると、そこには、study room、laboratory、seminar が並んでいます。study room は学習室であり、laboratory は、これが特に化学系の研究室に当てられることからもうなづけるように、実験機器の備わった部屋ということになります。また、seminar は、特定のテーマを設定して、教員の指導の下、学生が集まって共同研究をするところです。比重の差こそあれ、造園科学科の研究室にはこれら3つの性格が共存しているといえます。

造園科学科の教員はそれぞれの専門領域に応じていずれかの研究室に所属し、研究室を拠点として学生の指導や研究活動に従事しています。

学生諸君は4年生になると卒業論文（または卒業制作）に多くの時間をついやすことになりますが、その際に各研究室に所属する教員の指導を個別に受けることになります。

また、本学科が教育し、研究を推進している応用学としての造園学は、長い歴史をもつ造園活動の変遷の中で、「近代造園学（Landscape Architecture）」として体系化を目指してきました。その使命は、人間と自然との広範な調和共存環境を創造することにあります。「近代造園学」体系化への努力は、全ての造園学研究者に課せられた使命ですが、同時に各研究室の使命でもあります。各研究室は、それぞれの分野の主要研究や専門的研究を通して、造園学の発展と体系化を目指しています。これには、高度に分化・先鋭化させていく方向の研究と、総合化していく方向の研究があり、これらはそれぞれ並行して展開されています。また、研究室の名称からも理解されるように、研究の視点を背景としたものと、造園活動の対象領域がその表面にあらわれているものとがあります。

それぞれの研究室が主要な研究対象と研究方法を合せ持ち、それぞれの研究分野を把握しているといえます。

こうした研究分野にもとづき、各研究室では研究資料や

データの収集・蓄積と、それらの整理をおこない、なるべく多くの学生諸君がそれを活用できる体制を整えています。

4-2 教育の分野と研究室の構成

造園科学科には、教育研究の括りとして、「環境計画・設計分野」、「ランドスケープ資源・植物分野」、「景観建設・技術分野」の3つの分野があります。

環境計画・設計分野は、造園科学の応用の着地点である各種環境の空間創成に向けて、造園の総合化を計画科学およびデザイン面からアプローチする分野で、地域環境計画における保全、ランドスケープ計画、ランドスケープデザインの理論と実際を扱います。

ランドスケープ資源・植物分野は、造園科学のバックボーンである植物、植生そして自然を科学し、生物技術による環境創成を扱う分野で、造園樹木や地被植物などの造園材料、快適空間をつくりだす造園植栽、特殊環境地などの緑化技術の理論と実際を扱います。

景観建設・技術分野は造園科学が適用される空間を建設するエンジニアリング部門であり、造園工法や造園施工法に着目して、建設技術工学、建設施工管理などの理論と実際を扱います。

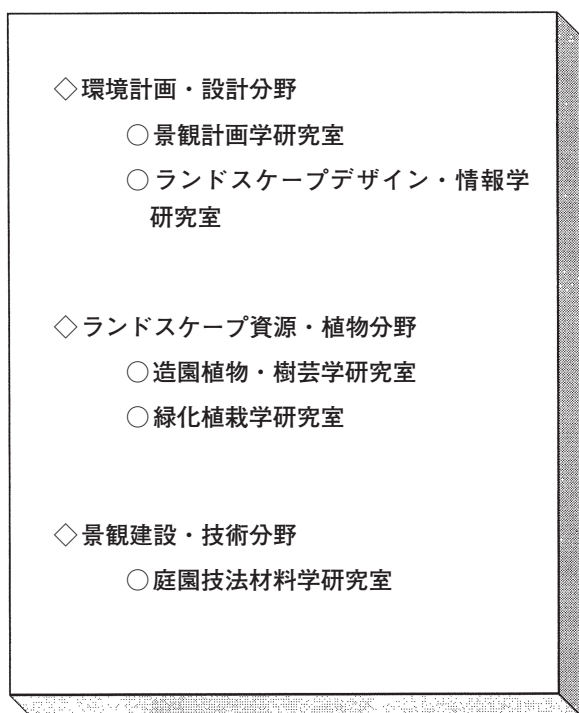
造園科学科は、造園学の教育と研究を、体系的、効果的に推進するために、3つの柱を立てており、研究室の構成もこれに沿って3分野5つの研究室が設けられています。そして、この分野の異なる5研究室のとり研究手法、方法論は必ずしも同一ではありません。それぞれが独自の研究アプローチを必要とする5つの研究室で構成されています。したがって、造園科学科の研究室は、自然科学的アプローチの他、社会学的、論理学的、数理科学的アプローチなど、様々な方法論を駆使できる研究室を揃え、総合的な造園科学研究の系統的体制を確立しています。

1) 環境計画・設計分野

＜景観計画学研究室＞：私たちの研究室では、人と自然の関係として現れる景観に着目し、造園の最小単位である庭から、まち、その広がりである都市域から中間山地域・自然地域まで、幅広いフィールドを対象に研究を行っています。研究アプローチの基盤は、計画学ならびに管理・運営論です。庭からはじまり、公園や緑地、都市近郊に残る里地里山、中山間地域の農山漁村の景観、自然地域の国立・国定公園、自然風景地に展開する空間・景観の持続可能な保全と活用を探究し続けています。

地域らしさを創出している固有の地形や植生、文化・歴史や生業の特徴を明らかにし、それらを生かした景観計画、観光計画やレクリエーション計画のあり方を造園的観点から模索するのが私たちの使命です。

表 4-1 研究室の構成



<ランドスケープデザイン・情報学研究室>：本研究室では、人口減少、都市の縮退、気候変動への適応といった課題に対してオープンスペース（屋外空間）を活かした住みやすく、持続的な都市の創成に貢献する研究をおこないます。庭、空地、公園緑地、街路、農地など、小空間から数百 ha の都市まで幅広いスケールにおける調査・計画・設計理論と技術の探求、さらには ICT や GIS による分析・視覚化、空間の質を検証するシミュレーション解析などのデジタル技術を利活用します。それにより、社会課題解決に向け「デザインの思考や技術」と「工学的な空間情報技術」が融合するランドスケープデザインを探求します。学生は調査研究や実践的な取り組みを通じてランドスケープデザイン・情報学の基礎的な技術を取得し、自然・歴史・文化を活かした都市づくりに貢献することを目指します。

2) ランドスケープ資源・植物分野

<造園植物・樹芸学研究室>：私達の生活は、様々な生物によって支えられています。なかでも植物は、その生理・生態・形態的機能によって、環境調節に大きく貢献しています。造園は、植物を構成要素として、快適性と美を追求する営みで

す。私達の研究室では、造園植物の特性や役割等を、生物学的視点から究明します。例えば、里山の希少種の保全と効果的な維持や管理、サクラやユリ科植物等の園芸植物の都市空間への利用、生理・生態学的な特徴からみた雑草等を含む草本植物の利用や管理、樹木医の視点による巨木・老木の在り方について、野外調査や実験により探求します。また、造園植物の時代背景、文化等の社会的調査も実施し、これらを次代に継承するための環境教育もおこなっています。人の生活と植物の普及、生育との関係を問い、生活の中の植物を自然科学の視点で捉え、みどり人と人のより良い関係を考えます。

<緑化植栽学研究室>：私たちの生活する都市には、身近な空間の緑として地域の公園や運動施設などから、高層のビル群が立ち並ぶ空間の緑として屋上庭園や壁面緑化、室内のアトリウムなどがあり、これらのさまざまな場所の緑化空間は、私たちの生活の質を高めています。ところが、これらの場所は植物にとって健全な生育が困難な環境であることが多いです。このような環境での植栽について緑化技術（造成・維持管理）の開発および研究をおこなっています。また、花や緑が人間心理や都市環境に与える効果について解明をする研究や環境要因と地被植物の生育特性（成長量や糖・イオン等の体内分布等）との関係を解明する研究など幅広いテーマを設定しています。研究対象は都市空間から沙漠地や災害地等の過酷な環境で人の生活と密接した場所が主となっています。

3) 景観建設・技術分野

<庭園技法材料学研究室>：思想・芸術・技術の総合体ともいべき日本庭園は、土・石・木といった自然材料の特性を発揮させる知恵と、地形・光・風・水・音を活かす技法から成立します。当研究室は、庭園の工法（庭園の創造、育成、維持、管理に関する技術）、材料（石材・木材・竹材・左官材料の種類、産地、特性、加工）、施設（庭園建築、石造物、垣根等）の研究を通じ、庭園の保存修復と技術の伝承とともに、先人の知恵と工夫を現代の造園空間へも応用することを射程します。さらに東アジアや欧米を含む国内外の造園史研究と庭園様式・空間構造の分析、日本庭園の感性工学的研究とデジタル化への挑戦から、庭園の本質と真実に迫ります。研究室活動では、庭園と材料産地のフィールドサーベイ、技術に関する実地研修、庭園の調査修復ワーキング、他大学との学術交流等を展開します。

4-3 教員のプロフィールと専門分野

造園科学科の教員は、造園に関する豊富な情報はもちろん専門分野の第一人者として学会等で広く社会で活躍しています。同時に人間性豊かな人格を備えており、学問に限らず生活面においてもきめ細やかな対応をしています。

〈環境計画・設計分野〉



教授 荒井 歩
ARAI, Ayumi

研究テーマ：文化的景観の構造解明と保全システムの構築、再生可能エネルギー施設の景観に対する環境影響評価の動向
関心のある研究教育分野：景観計画、景観マネジメント、環境影響評価技術
担当科目：景観論、環境デザイン基礎演習、風景地計画学、公園マネジメント論、専門特化演習(二)(建築デザイン)ほか
所属：景観計画学研究室
出身：千葉県



教授 國井 洋一
KUNII, Yoichi

研究テーマ：レーザ測量とフォトグラメトリによる造園空間の3次元計測、画像処理による景観分析の定量化
関心のある研究教育分野：UAV(ドローン)による造園空間の多面的把握、深層学習による最適な景観の構築
担当科目：測量学、測量実習、空間・情報学、専門特化演習(二)(エンジニアリング)、造園工学基礎演習ほか
所属：ランドスケープデザイン・情報学研究室
出身：東京都



教授 服部 勉
HATTORI, Tsutomu

研究テーマ：庭園を中心とした造園空間の歴史と構成
関心のある研究教育分野：外の日本庭園、歴史的遺産の保全と活用、芸術家と庭園との関係性、江戸・東京の園芸文化
担当科目：造園科学概論、庭園史、ランドスケープ政策論、造園工学演習、造園総合論ほか
所属：景観計画学研究室
出身：東京都



准教授 阿部 伸太
ABE, Shinta

研究テーマ：緑地の計画手法、管理運営に関わる研究
関心のある研究教育分野：都市緑地の配置計画および保全・活用手法、再開発等の都市デザイン、公園計画、住宅地計画、地方活性化、景観づくり
担当科目：都市緑地計画学、都市および農村計画、CAD・GIS基礎演習、造園総合演習ほか
所属：ランドスケープデザイン・情報学研究室
出身：埼玉県



教授 福岡 孝則
FUKUOKA, Takanori

研究テーマ：グリーンインフラ形成に関する研究、屋外公共空間のデザイン及び利活用手法
関心のある研究教育分野：サステナブルな都市デザイン、まちのマネジメント手法
担当科目：環境デザイン基礎演習、ランドスケープデザイン論、造園工学演習、造園総合演習ほか
所属：ランドスケープデザイン・情報学研究室
出身：神奈川県



助教 栗田 和弥
KURITA, Kazuya

研究テーマ：市民参加による自然環境保全活動と高山〜里山の自然保護
関心のある研究教育分野：山岳・原生自然の保全、わが国および世界の国立公園・保護地域内外の問題、環境教育・自然解説(インタプリテーション)、環境NPO
担当科目：共通演習、自然保護論、風景地計画学、造園植栽演習ほか
所属：景観計画学研究室
出身：東京都

〈ランドスケープ資源・植物分野〉



教授 鈴木貢次郎
SUZUKI, Kojiro

研究テーマ：植物の種子繁殖法、巨木の生育環境と保全
関心のある研究教育分野：植物分類、植物と生育環境（土壌）、植物と文化
担当科目：造園植物基礎、緑地生態学、専門特化演習（二）（植栽基盤）、造園植物基礎演習、造園植物・植栽演習ほか
所属：造園植物・樹芸学研究室
出身：神奈川県



教授 高橋 新平
TAKAHASHI, Sinpei

研究テーマ：造園地被植物（グラウンドカバープランツ）と芝草の生育と生態
関心のある研究教育分野：芝草・地被植物・土と光と水のこと、植物の生理・生態学、形態学、植栽地の管理
担当科目：芝生論、グラウンドカバープランツ、造園植物・植栽演習、専攻研究、卒業論文（制作）ほか
所属：緑化植栽学研究室
出身：岩手県



教授 水庭千鶴子
MIZUNIWA, Chizuko

研究テーマ：植物を取り巻く環境とその相互作用に関する研究
関心のある研究教育分野：ヒートアイランド現象緩和のための緑地に関する研究、ファイトレメディエーション、快適な緑空間の創生・保全・利活用について
担当科目：造園植栽学、植栽基盤論、造園植物基礎演習、造園植物・植栽演習、専門特化演習（二）（植栽基盤）ほか
所属：緑化植栽学研究室
出身：茨城県



准教授 金澤 弓子
KANAZAWA, Yumiko

研究テーマ：植物の生態と造園材料としての有用性
関心ある研究教育分野：植物の繁殖、生活史、地域資源の保全と活用
担当科目：造園植物基礎演習、緑地生態学、造園植物・植栽演習、専門特化演習（一）（植物学）ほか
所属：造園植物・樹芸学研究室
出身：東京都



准教授 田中 聡
TANAKA, Satoru

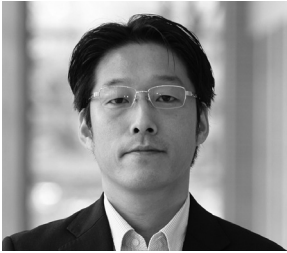
研究テーマ：造園植物の生態や管理に関する研究
関心のある研究教育分野：造園植物の生態、造園植物の共起現象の把握、土壌資材、雑草
担当科目：グラウンドカバープランツ、造園植物基礎演習、造園植物・植栽演習、専門特化演習（一）（都市緑化）ほか
所属：造園植物・樹芸学研究室
出身：兵庫県



助教 中島 宏昭
NAKAJIMA, Hiroaki

研究テーマ：二次的自然の管理手法と造園植栽技術への応用
関心のある研究教育分野：地被植物の生育特性、植物のフェノロジー、保全生態学、公園緑地の維持管理
担当科目：グラウンドカバープランツ、専門特化演習（一）（都市緑化）、造園植物基礎演習、造園植物・植栽演習、造園植栽学
所属：緑化植栽学研究室
出身：神奈川県

〈景観建設・技術分野〉



教授 栗野 隆
AWANO, Takashi

研究テーマ：近代造園の歴史・意匠、歴史的庭園の保存修理技術、考古学遺跡の保存・整備・活用と造園計画
関心のある研究教育分野：庭園史・意匠論、庭園考古学、遺跡保存修復、伝承造園技術
担当科目：近代造園史、造園施工材料演習、造園施設設計、造園施工論、専門特化演習（二）（伝統技法）ほか
所属：庭園技法材料学研究室
出身：兵庫県



教授 斎藤 馨
SAITO, Kaoru

研究テーマ：風景認識原論、庭園技法とサイバースペース、自然保護のデジタル化
関心のある研究教育分野：庭を造り維持管理する人の意思、風景を観賞する人の心、サイバースペースの中の自然、感性情報によるランドスケープのデジタル化、景観の予測と評価、ランドスケープ情報学
担当科目：造園工学、専攻研究、卒業論文（卒業制作）ほか
所属：庭園技法材料学研究室
出身：新潟県



准教授 張 平星
ZHANG, Pingxing

研究テーマ：造園材料の産出と特性、庭園空間と景観設計における材料の活用
関心のある研究教育分野：日本庭園の造園材料、石造物、CAD 及び GIS を用いた景観分析
担当科目：造園施設材料、測量実習、造園工学基礎演習、造園工学演習、専門特化演習（二）、（エンジニアリング）ほか
所属：庭園技法材料学研究室
出身：中国・南京市



助教 内藤 啓太
NAITO, Keita

研究テーマ：大名庭園と水の供給システム、庭園空間の近代化とその変容過程、モダニズム建築にみる庭園の特質
関心のある研究教育分野：庭園史、建築史、都市史、都市インフラと庭園、庭園遺構の保存と活用、庭園の社会性、庭園の維持管理と新陳代謝
担当科目：測量実習、造園工学演習、造園施工材料演習、専門特化（伝統技法）ほか
所属：庭園技法材料学研究室
出身：神奈川県

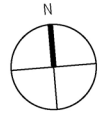
〈地域環境科学部 教養分野〉



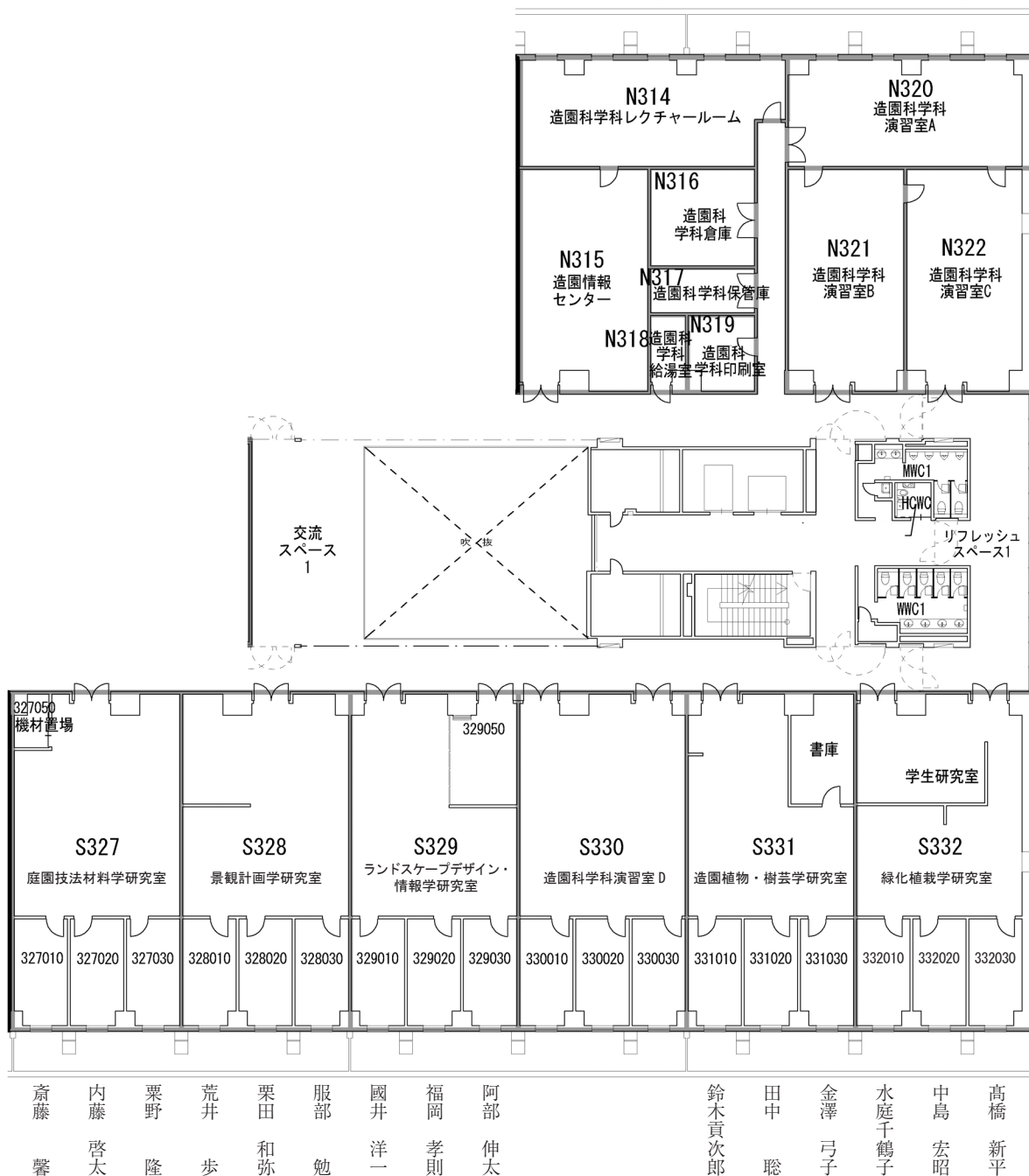
教授 上岡 洋晴
KAMIOKA, Hiroharu

研究テーマ：温泉利用と生活・運動指導を組み合わせた総合的健康教育
関心のある研究教育分野：老年科学（介護予防）、疫学（生活・運動）、温泉医学
担当科目：スポーツ・レクリエーション（一）・（二）ほか
所属：身体教育学研究室（教養分野）
出身：栃木県

4-5 造園科学科の研究室と演習室



<サイエンスポート 3 階>：造園科学科



5. 研究室ガイド

環境計画・設計分野

景観計画学研究室

服部 勉 教授、荒井 歩 教授、栗田和弥 助教

1. 研究アプローチ

人と自然の関係として現れる景観に着目し、造園の最小単位である庭から、まち、その広がりである都市域から中間山地域・自然地域まで、幅広いフィールドを対象に研究を私達は行っている。

研究アプローチの基盤は、計画学ならびに管理・運営論である。

庭からはじまり、公園や緑地、都市近郊に残る里地里山、中山間地域の農山村漁村の景観、自然地域の国立・国定公園、自然風景地に展開する空間・景観の持続可能な保全と活用を探究し続けている。

地域らしさを創出している固有の地形や植生、文化・歴史や生業の特徴を明らかにし、それらを生かした景観計画、観光計画やレクリエーション計画のあり方を造園の観点から模索するのが私たちの使命である。

併せて、自然保護に関する自然再生技術や自然学習の手法も検討しており、造園空間の活用・運営についても考現学的視点から提案している。

2. 教員の研究活動

景観計画学研究室には3名の教員が所属している。

服部勉教授

庭園や公園の価値に着目した利用と活用に関する研究や、日本文化から歴史まちづくり、環境デザインへの応用手法に関する研究を行っている。

海外の日本庭園の管理・運営に関する調査や、COVID-19流行下における公園利用や運動環境に関する研究など幅広いテーマを扱っている。

荒井歩教授

人々の生活や生業のながめである文化的景観に関する研究や、環境影響評価や景観アセスメント手法に関する調査、近郊都市および中山間地における農業景観の保全に関する研究を行っている。

景観まちづくりにおける市民協働や合意形成に関するプロジェクトも手掛けている。

栗田和弥助教

自然環境保全ならびに自然保護の研究、観光地やリゾート地などの管理・運営計画に関する調査を行っている。

長年にわたり山岳地の自然再生活動に携わり、活動プログ

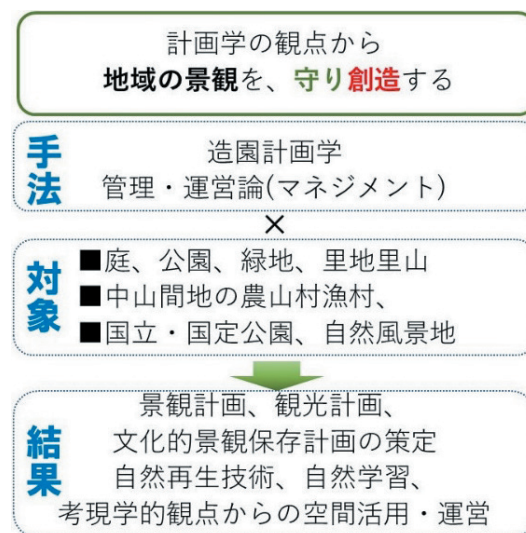


図1 「景観研」研究アプローチの特徴

ラム内容の整理および活動史に関する研究も行っている。自然環境保全に関するマネジメント的視点からの調査・研究も扱っている。

3. 研究室内の活動

①3年生

教員毎に、専門性を活かした調査や討論を行い、造園関連分野が直面している問題の認識、問題・課題に対する研究手法についての理解や課題発見能力と問題解決能力を修得することを目標とした3年生のゼミ活動が「専攻研究」である。その他研究室全体での発表会や合宿などが計画される。

②4年生

卒業論文は教員毎のゼミ活動を中心に1年間かけて行う。講義とは異なって研究としての色彩が強くなり、卒業制作も演習課題とは異なり、制作する人の独創性と、制作作品が完成までの基礎資料の収集・分析、構想などのプロセスが重要となる。

また詳細にわたっての文章内容チェックや図表の表現技術、発表テクニックも要求される。

③大学院

人と環境・景観との関わりについての原論的視点や計画論的視点から論究している。大学院は博士前期課程(2年)、

◇研究室ガイド◇

博士後期課程（3年）にわかれており、私達の研究室は3つある専修のうち、「造園計画・設計学専修」に該当する。地域計画やまちづくりに深く関わる景観計画、観光政策の理解と応用展開を目標とした研究が主体となる。テーマは地域における人と環境・景観との関わりについての原論的視点や計画論的視点から論究する。

4. 夏合宿から学んだ「私の景観計画学」

伊豆半島周辺の産業遺産・ワサビ田・自然景観を視察し、人間生活と景観の関係について学ぶことが出来たと思う。伊豆半島の成り立ち、産業（製鉄・ワサビ）、温泉地を体験し、景観と人間関係を考えられる有意義な合宿であった【M2】。

修善寺温泉街では、足湯・温泉や射的などの温泉街らしい街並みに加え、トレイルランナー向けの施設などの新たな文化が混じった、面白い街並みを見ることが出来た。地形を生かした新たな文化が形成され、それに伴う商業も生まれていることにスポーツの可能性を感じた【M2】。

地形の面白さとして、伊豆半島はジオパークに認定されているため、たくさんの資料や説明が各地で充実しており、視覚をはじめとした感覚だけでなく科学的に理解することができた。自然美を感じた堂ヶ島温泉や滝などには行幸の記念碑があることに気付いた。昔から評価されている場所には現在においてもよいと感じる普遍的な魅力があることを実感した【M2】。

今回の合宿中に見聞きした範囲内では、現在アニメツーリズムを含む聖地巡礼とスポーツツーリズムが盛んに行なわれていた。アニメツーリズムの面では、漫画・アニメ『ゆるキャン△』で登場した観光名所を地域の側から聖地として積極的に売り出していた。加えて伊豆ジオパークとも連動し、聖地として売り出すだけでなく伊豆の自然を体験してもらえよう工夫がなされていた【M2】。

日本で旅行することは初めてではないけど、学校の合宿参加するのが初めて体験することだから、すごく新鮮でした。出発する前に合宿のスケジュールを見て、全部聞いたことがない場所だからちょっと不安になったけど、実際参加したら、全ておもしろくすごく楽しかったです【M1】。

今回の合宿ではアルコール類が禁止であったため少しばかりさみしいとも感じたが、美味しいお料理と本当に素晴らしい露天風呂が吹き飛ばしてくれた。【4年】。

初の研究室合宿を通じて、国立公園や社会問題、地域との繋がりといった景観計画、ランドスケープの視点から観光を楽しむことができ、静岡県観光地における取り組みを一部見る事ができた【4年】。

1日目の西伊豆の旅館・清流の露天風呂は海と真隣で、星空も綺麗で、貴重な思い出です。2日目・松崎の街並み散策では、なまこ壁など、昔の技術が残されているのを間近に見



写真1 映画のワンシーンの様な夏合宿の昼食



写真2 夏合宿で視察した卒業生のナーセリー



図2 3年生・専攻研究の成果の一例

て、歴史を感じました。長八美術館でも地域愛を感じ、街の誇りとも言える技術을展示してあるのがいいなと思いました。2日目の夜にはゼミの後輩の女の子たちを部屋に呼んでゲームをしたのもいい思い出でした【4年】。

1日目は天気がよく国立公園から見える海はとても美しく感じました。この日に泊まった旅館から見える海の景色も良かったです。海のすぐそばにある露天風呂は最高でした【4年】。

今回初めて景観計画学研究室で伊豆旅行に行き、そこで印象に残った空間としては、浄蓮の滝とわさび園です。また、湯めぐりの宿修繕寺温泉桂川とその周辺の街の雰囲気も印象にのこりました。浄蓮の滝は日本の滝100選に選ばれている静岡県伊豆市湯ヶ島にある観光名所で、周りの樹やわさび園、滝のスケールの大きさ、空気、水の綺麗さなど都内では体感することのできない空間でした。また、秋などは紅葉を含めもっと美しい自然空間になると思いもう一度行ってみたいと思いました【4年】。

韭山反射炉は、地域住民の理解や協力の下、適切な補修・修理工事を重ねながら今日まで保存されてきた。今後も、この歴史の変遷を十分理解・尊重した上で、さらなる調査・研究を通じて必要保存の措置を講じ、貴重な遺産を後世に継承して欲しい【4年】。

研究室合宿では、普段では学べない、歴史、自然、環境について知識を深めることができた。

新型コロナウイルス感染拡大の中、服部先生をはじめ、他の教授、農家、旅行会社、ホテル等の様々な方の協力のおかげで良い経験ができたと感じています。ありがとうございます。就職活動や部活動で県外に行く時間はありませんでしたが、合宿を通じて、友人と楽しんでおいしい食事ができて、良い気分転換になりました【4年】。

今回の伊豆旅行にて人生で初めて滝を見る事が出来た。

永遠に流れてくる水が一体どこから流れているのか、そしてこの水はどこに流れていくのかとても興味がわいた。更に滝の近くはとても涼しく9月でまだ残暑の中快適な気温でずっとその空間に居られるような感じだった。水が透き通っていてとても綺麗で私が好きなゲームの世界に似ていて現実が一瞬分らなくなるほど綺麗な場所だった【4年】



写真3 巻機山での景観と植生の復元活動



写真4 港区・芝浦公園でのゼミ活動



写真5 卒論発表会直前の研究室



写真6 4年生の総まとめ：卒論最終発表会

■:服部勉 ★:荒井歩 ●:栗田和弥 ◆:上岡洋晴 (地域環境科学部・教養分野)

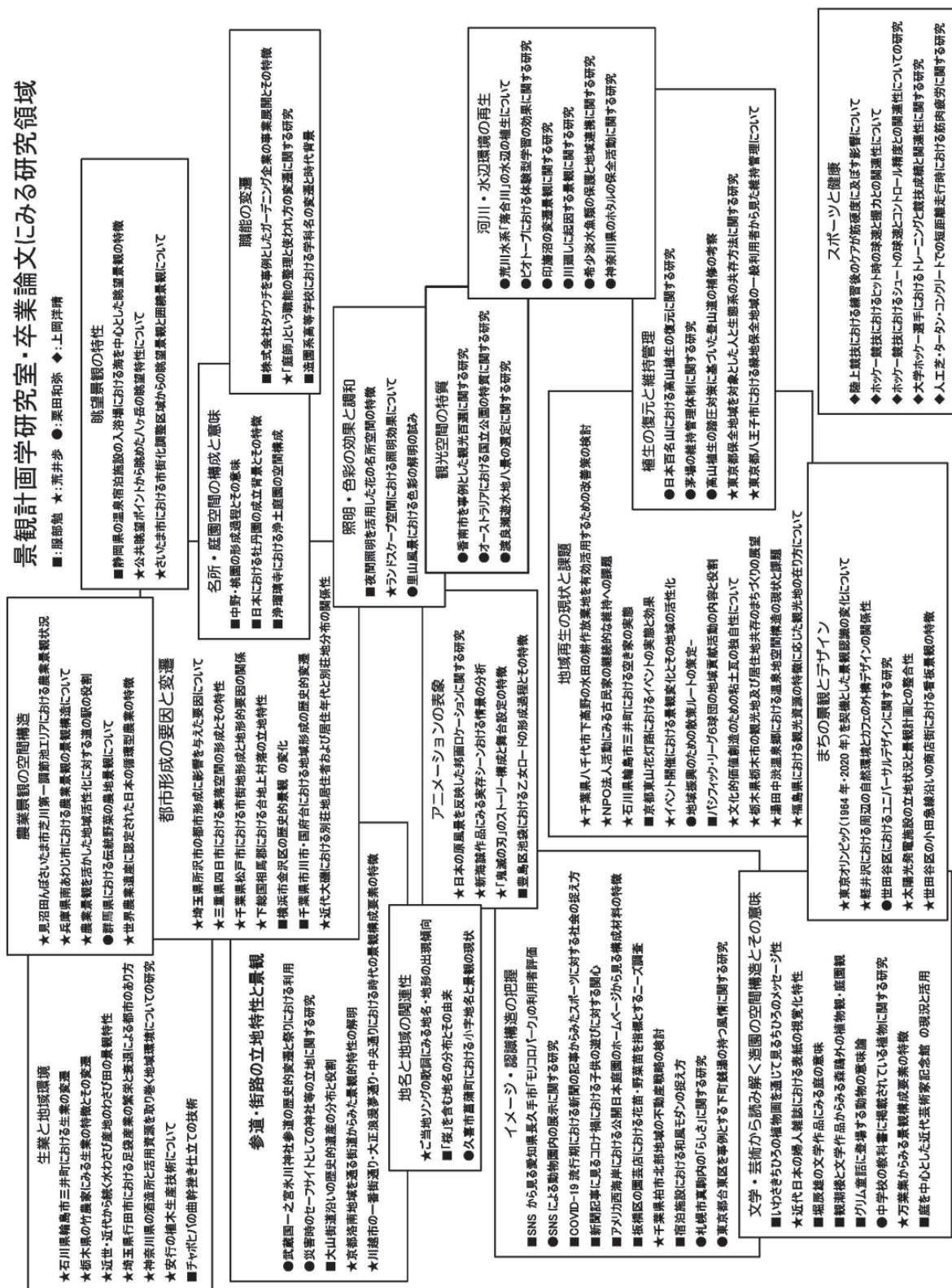


図3 景観計画学研究室・卒業論文にみる研究領域の特徴

環境計画・設計分野

ランドスケープデザイン・情報学研究室

國井洋一 教授、福岡孝則 教授、阿部伸太 准教授



写真-1 農大の「食と農」の博物館における研究室の展示風景



写真-2 農大世田谷キャンパスデザインプロジェクトのメンバー



写真-3 オープンスペースデザインのための現地見学

1. はじめに

ランドスケープデザイン・情報学研究室では、人口減少、都市の縮退、気候変動、そして自然災害への適応といった課題に対してオープンスペース（屋外公共空間）を生かした「住みやすく、サステナブルな都市」の創成に貢献する研究および取り組みをおこないます。ランドスケープ空間の構築に欠かすことのできないデザイン技術と、そのデザインの実現に向けた定量的な根拠を収集するための情報技術とを融合させ、研究をおこなっております。造園学が対象とする空間は多種多様であるため、学生によってアイデアを出し合い、技術を習得し、適用させることで、快適な空間作りへと繋がります。

2. ランドスケープデザインの追究

ランドスケープ空間において誰もが共感できるデザインには「この時代にこの場所で」という必然性があります。当研究室では、自然と人間が共生する快適な環境の創出を目指し、その実現に向けて、計画論ならびにデザイン論の観点から追究しております。すなわち、快適な生活環境を形成するランドスケープ空間を計画的に保全、活用、創出することを目指し、さまざまなフィールドを対象として、ランドスケーププランニングとランドスケープデザインの理論と技術を探究しています。対象とするフィールドは、公園や広場、街並みなどの空間から、都市および農山村の地域環境まで、多種多様に扱っております。そのため、それらのフィールドは規模や特性、存在する生物や構造物、人の過ごし方などが大きく変わるため、デザインにおいても柔軟な姿勢が求められることとなります。そのための具体的な研究として、都市および農村地域の緑地の保全・活用・回復に関わる計画や制度の研究、ランドスケープデザインにおけるコンセプトメイキング（共感を憶える概念操作）の方法ならびに形態操作の技術と手法の究明など、環境デザインの基礎研究から応用研究までに取り組んでいます。また、研究室活動では、フィールドサーベイ等による実態把握、先端技術を活用した地域環境の調査解析、デザインワークを通しての問題意識の高揚、課題解決のためのコンセプトメイキングとデザインの具現化など、実践的な活動を通して、計画およびデザインの理論と技術の応用力も養っています。



写真-4 樹木を対象としたレーザ測量

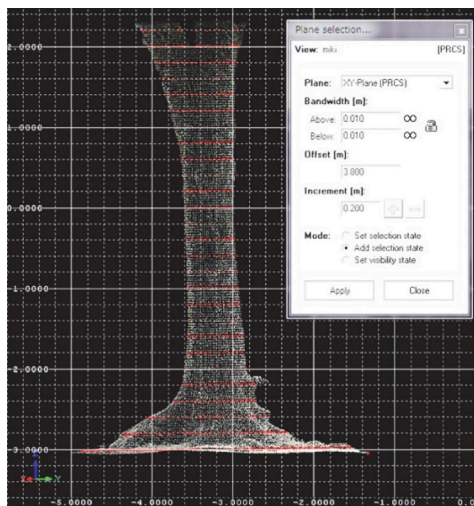


図-1 レーザ測量の成果



写真-5 ARによる観葉植物の表現

3. 空間情報学の追究

デザインを追究するうえで不可欠であることは、それぞれの研究対象に対する空間情報の取得です。人が美しい、心地よいと感じる空間に対し、なぜそのような感覚を生み出すことができるのかを追究するためには、その空間を構成している定量的なデータが不可欠となります。具体的には、公園や広場といった空間の広さ、園路の幅や長さ、植栽されている樹木に対する樹高、幹周、枝張といった寸法、さらには地球上でどの位置にあるのかを示す緯度・経度の情報も重要となります。そのようなデータを取得するための方法としては、リモートセンシング、GIS、GNSS (GPS)、写真測量、レーザ測量といった空間情報技術が効果的です。空間情報技術は進化が早く、情報を効率的に取得するための新しい技術が革新します。近年では、ドローンと呼ばれる UAV (Unmanned Aerial Vehicle) により、上空から写真測量やレーザ測量をおこなう技術や、車載写真レーザ測量システム (Mobile Mapping System : MMS) と呼ばれる自動車に搭載された機材により、自動車を走行させながら沿道を一挙に測る技術も発展しております。当研究室ではそのような空間情報技術を応用展開し、造園空間を構築する方法についても研究をおこなっています。さらに、造園空間を魅せるという観点では、CAD や CG、VR 等による造園空間の視覚化についても追究しています。さらに近年はスマートフォンの普及によって拡張現実 (Augmented Reality : AR) の利用がより身近になっているので、現実空間に仮想的な構成要素を配置することによるシミュレーションにも取り組んでおります。

4. 教員紹介

國井洋一 教授

近年の測量技術は、ICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術) を活用した空間情報技術として幅を広げております。これらの手法を使って、公園や庭園、都市空間といった造園空間を効率的に測り、さらには快適な空間の創造までつなげたいと考えて日々研究をおこなっております。元来、空間情報技術は土木工学の分野で発展してきた技術であるため、土木構造物の測量に対して多く応用されてきました。一方、造園学においては樹木や草本といった緑が空間の構成要素となるため、構造物とは特徴が大きく異なります。そのため、UAV やレーザ測量の技術をそのまま造園空間に応用するのではなく、データの取得方法や処理方法について様々な工夫を凝らしております。それにより、どのような対象地における測量においても、高い再現性を確保できるよう努めております。



写真-6 UAV（ドローン）飛行のようす

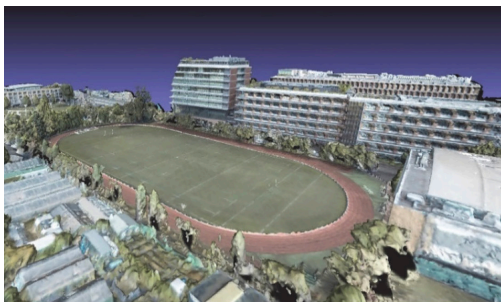


図-2 UAV 写真測量の成果



写真-7 東京・世田谷の国分寺崖線の樹木を活かした住宅地



写真-8 兵庫・目神山の宅地における接道部デザイン

さらには、得られた情報をわかりやすく表現するためには、AR や VR の技術の応用が考えられますが、そのためにはスマートフォンやタブレットの活用が大変便利です。取得した空間情報をアプリに取り入れることで、デザインしたい空間において構成要素を仮想的に見せることが可能です。そのような、視覚的な提示に関する方法論についても研究指導をおこなっております。

阿部伸太 准教授

日本はもとより世界には魅力的な風景がたくさんあります。私が専門とする緑地計画学は、その土地の気候・風土との関係で育まれてきた暮らしと、その表れである風景を大切にしつつ、そこで暮らす人々がそれまで以上に生き生きとしていける都市・農山漁村・自然地を計画しデザインしていく学問です。そのためには、自然、歴史、文化などの観点からその土地ならではの地域資源を見つけ出し、それをどのように保全・活用していくか、場合によっては新しい価値観やデザイン加えていくかを考えることが大切です。しかもその時により多くの人々の共感を得ることが重要であり、そのためにそうした考え方の客観的根拠を得るための様々な研究をおこなっていきます。例えば带状に続く斜面緑地が、都市化により宅地開発されたにもかかわらず、なぜ樹林に囲まれたような雰囲気を継承しているのかを、土地の改変を歴史的に捉えることでそのメカニズムを明らかにしたり、敷地規模が小さい敷地であっても緑豊かに感じられる住宅地にするための設計手法を読み解いたりします。そしてこうした研究成果は、私が委員を務める様々な自治体への助言、例えば海の眺望を活かした公園のリニューアルや、古墳を保全しながらも道路をつくるプロジェクト、公園をより一層楽しむためのプログラム提案やマネジメントへのアドバイスなどに活かされています。

福岡孝則 教授

専門は都市域のランドスケープデザイン。①公園や広場などオープンスペースの計画・デザイン手法、及びオープンスペースを活かしたサステナブルな都市デザイン手法、②雨水浸透能力など屋外空間の環境性能に着目したグリーンインフラの計画・デザイン手法、③都市のオープンスペースにおける利活用やプレイスメイキングの3つに焦点をあて、実践的な課題（コンペ、プロジェクト等）に取り組み、調査から計画・設計技術習得を目指した研究・設計指導をおこないます。気候変動をはじめとする複雑な社会課題に向き合い、解決するスキルを得るために、自治体など多主体とも協働しながらランドスケープデザインとは何かを探求します。国際的なデ



図-3 千葉・木更津の公園リニューアルのカフェ（木更津市ホームページより）



図-4 沼津の古墳を活かした道路整備コンペ（沼津市ホームページより）



図-5 模型やドローイングによるデザイン検討

デザイン実務経験や建築など周縁領域での教育経験も活かし創
造的で実践的なランドスケープアーキテクト育成を目指しま
す。

5. おわりに

我々が目指すデザインと空間情報との融合は、造園学のす
べてフィールドに応用できる技術です。当研究室では、その
ような汎用性の高い研究に日々取り組んでおります。
当研究室での多種多様な活動は、SNS を通じて発信して
おります。ぜひご覧ください。

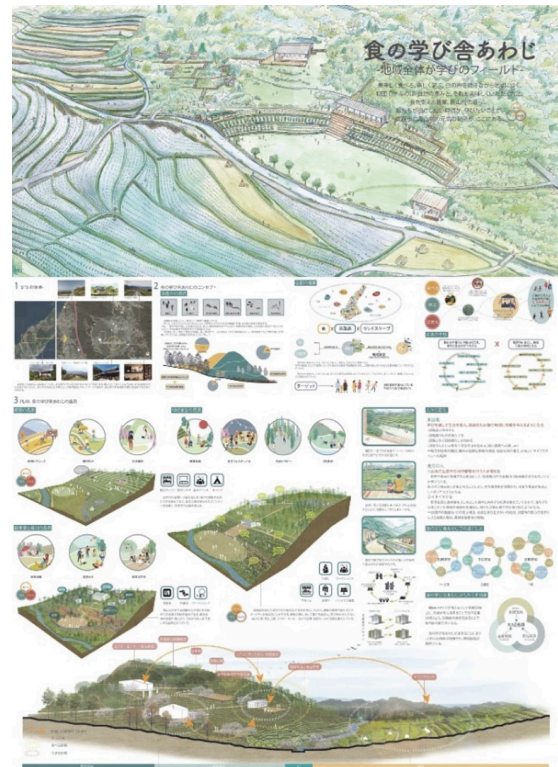


図-6 日本造園学会でのデザインコンペ作品



図-7 ランドスケープデザイン・情報学研究室 Facebook

ランドスケープ資源・植物分野

造園植物・樹芸学研究室

鈴木貢次郎 教授、金澤弓子 准教授、田中 聡 准教授

1. 研究室の使命

造園植物に関する基礎的な研究を進め応用的な見地を強調するため、2017年度より造園学科時代の造園樹木学研究室から造園植物・樹芸研究室になりました。「芸」は「藝」の省略形で、「藝」は「草木を植える」意味、上原敬二先生も頻繁に用いています（上原敬二 1979 談話室の造園学、技法堂出版、222pp.）。

拝金主義が漂う現代社会の中、今や公園や街路樹、庭園の植物まで邪魔もの扱いになることが多く、不要になれば伐採処理、気付けば消耗品扱いになっています。こんな状況の中、私達の研究室では、古典的且つ現代にあった植物と生活の関係を追究し、生物界に生きる一員としての真の豊かさを求め、SDGsを実践しています。

人々の快適な生活は、自然と人の調和によってもたらされます。これは都市化によって多くの生物が生育・生息する自然を破壊しながらも、人々の生活にとって必要となれば、自然を保護・保全してきたことになります。現在みることのできるみどりは、自然の一部が辛うじて私たちの身の周りに残っている状態です。

造園空間の主構成要素である植物を対象として、その基礎となる分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、社会的背景（文化、経済等）を鑑みながら、生物の保護と保全、利用、管理を図ることを目的としています。また、造園植物の時代背景、文化等の社会的調査も実施し、これらを次代に継承するための環境教育もおこなっています。



2. 研究の視点

用（機能性）と景（意匠）の程度については、これまでも多く議論されてきました。しかし、生物学に基づいた生活空間づくりを目指す私たちの研究室では、「用（機能性）」によって景（意匠）が完成される」、換言すれば「景が先行したものは一過性に過ぎない」という視点で探求しています。そして、人の生活と植物との関係を、自然科学の視点で捉え、緑地、里山、地域などのマクロな視点から遺伝子レベルまでのミクロな視点によって研究・教育を進めてきました。

3. 成果

草本、木本植物を問わず、分類や繁殖、環境応答等の造園植物に関する基礎的な研究と、特に樹木の利用について研究してきました。

3.1 巨木、水災害防止、サクラ、樹木医学

里山、庭園、都市緑地、生垣、街路等に生育する植物の生理・生態を探求すると共に、巨木、サクラ等、衣食住に関わる植物文化、あるいは生活における植物の関わりや役割を、フィールド調査や実験を通して解析してきました。

1) 国内外や東京の巨木

巨木や老木の生理・生態的特徴を調べると共に、その地域での役割や、長年守られてきた社会背景や地形などを調べてきました。国内だけでなく台湾、中国南西部まで遠征し、これらの地域の文化や風土、植物の生態などを比較・考察しています。

「東京には、自然がない」と思いがちですが、辛うじてその名残になるものを巨木にみることができます。倒木問題や落ち葉問題などによってかつては保護されてきた巨木も、今や邪魔者扱いの存在、なぜ日本人は巨木を大切にしてきたのか？という原点に戻り、東京にある巨木の実態とその意義について調べてきました。

Xu *et al.* (2018) Species, size, and location of "giant trees" in Tokyo's urban area and western suburbs. *Arboricultural Journal* 40 (4), 234-256

2) 巨木の生育立地条件、水害との関係

樹木の種類によっては、短期間（1週間程度）の根系部の滞水や、長期間の土壌物理性の悪化で枯死してしまいます。

現在みることのできる植物の分布から、かつての河川氾濫跡を読み取ることができました。またこれらの知見は、植物にとって劣悪な環境となる都市での植栽技術に応用されます。都市内で樹木が倒木する原因などを、里山の植物調査から考察し、これまであまり言及されてこなかった土壌の物理性と植物の生育に関わる問題などを追究してきました。

鈴木他 (2016) 中国福建省のクスノキの巨木、「中尾佐助照葉樹林文化論」の展開—多角的視座からの位置づけ) 北海道大学出版会

松永他 (2020) スダジイ (*Castanopsis sieboldii*) の生育に及ぼす土壌の物理性と化学性、樹木医学研究 24 (2), 128-129

Watanabe *et al.* (2021) Landforms and distribution patterns of giant *Castanopsis sieboldii* trees in urban areas and western suburbs of Tokyo, Japan, Urban Forestry & Urban Green 60, (126997) <https://doi.org/10.1016/j.ufug.2021.126997>

3) 根の滞水条件と植物の生育

豪雨水害の多い日本では、植物体の冠水、または根系部の滞水と植物の生育との関係は大きな課題です。冠水や根の滞水下における各種植物の生育について調べてきました。

中村他 (2004) ヤブラン亜科 5 系統の冠水抵抗性の比較. 東京農業大学農学集報 49 (3)、98-104

鈴木他 (2008) 長期間冠水したジャノヒゲ (*Ophiopogon japonicus*) の根の形態的特性. 日本芝草学会 Vol.36 (2)、105-108

4) 福島県や山梨県等の一本桜

サクラの巨木 (幹周 3m 以上) を、一本桜とよんでいます。これまで福島県や山梨県その他、全国各地の一本桜の生育場所とその形態、生育状態を観察、記録し、その生育場所の特徴などを調べてきました。

藤田他 (2010) 福島県内のサクラの巨木. 樹木医学研究 14 (3)、50-51

金澤他 (2010) 山梨県内におけるサクラの巨木の種とその生育場所及び生育状態. 樹木医学研究 14 (1)、9-14

鈴木 (2011) 地域の生活に関わる一本桜 —福島県を事例として— BIOSTORY 16、88-97

5) 早咲き性サクラの作出に関する研究

日本の国花であるサクラには 400 を超える品種 (雑種) があるといわれています。近年は、多くの品種 (雑種) が枯死しています。サクラの雑種を研究室で作出し、形態などを比較すると共に、サクラの雑種 (カワヅザクラやアタミザクラ等) の親種を遺伝子分析などによって調べました。

染郷他 (2004) 熱海桜' の遺伝的特性 櫻の科学第 11、11-25

Ogawa *et al.* (2011) Origins of early-flowering cherry cultivars, *Prunus* × *kanzakura* cv. *Atami-zakura* and *Prunus* × *kanzakura* cv. *Kawazu-zakura*, revealed by experimental crosses and AFLP analysis. Scientia Horticulturae 140, 140-148

金澤他 (2016) 早咲きのサクラ品種とカンヒザクラ地域集団の遺伝的關係, 園芸学研究 15 (2)、129-138.

3.2 樹体構築・樹形

樹木が種子発芽の段階から老木に至るまで、どのような過程を経るのかを形態学的に追究しています。

木本植物の樹形は、それぞれの種の特徴を示し、造園空間を構成する重要な形質です。しかし、木本植物の生長は時間を要するため、その樹形の成り立ちなどは詳しく解析されていません。これまで、サクラ類の樹形の成り立ちを長期的に分析する様々な手法を試みました。

齋藤他 (2010) 実生にみるエドヒガンの立ち性型と枝垂れ型. 樹木医学研究 14 (3)、48-49

渥美他 (2011) 三春滝桜の樹形及び年変化の解析. 櫻の科学 15、15-23

金澤他 (2011) 三春滝桜にみられる折れた枝の特徴. 櫻の科学 16、9-12

金澤他 (2021) 栃木県小山市における思川桜の植付け後 17 年生の樹形変化. 関東森林研究 72 (1)、49-52

3.3 里山、絶滅危惧植物の保全、繁殖 (種子発芽) 生態、外来植物

稀少植物や林床植物の保護・保全のための繁殖生態、植物の増殖、栽培化、苗木や成木の生産、販売、流通に関わる諸問題を、経済や文化、自然科学的側面から解明してきました。

また植栽に供される自生・外来の樹種や草本の天然分布、生育適地 (生育環境)、遺伝的な変異などについて生態・地史、植物地理、遺伝学的に解明しました。

1) 日本産ユリ科植物の種子繁殖に関する研究

広義ユリ科は、ジャノヒゲやヤブランの他、ホトトギスやギボウシ、キスゲ、ヤマユリ、ウバユリ、カタクリ、ヤマラッキョウ、ノビル、ニラ、スカシユリ、オニユリ、ツバメオモト、エンレイソウ、アマドコロ、ホウチャクソウ、サルトリイバラなど、私たちの衣食住にとって極めて身近な植物を含む分類群です。これらの植物は、高山植物、二次林の林床植物、春植物としての観賞用の他に、食用、薬用としても多く利用されてきました。これらの植物を人為的に増殖するためにも、また自然界での繁殖力を高めるために、生活史の中での種子繁殖の生態を探究しました。

鈴木 (1999) 日本産ユリ科植物の繁殖習性に関する研究 (1) 種子発芽習性、植物地理・分類研究 47、111-120

Suzuki *et al* (2007) Responses of *Liriope platyphylla* F.T. Wang & T.Tang and *Ophiopogon japonicus* (L.f.) Ker Gawl. seeds to desiccation. Seed Science and Technology 35, 129-133

Suzuki *et al* (2013) Seed germination time course and seedling development of *Clintonia udensis* Trautv. et Mey. (Uvulariaceae): a typical cool temperate woodland perennial in Japan. Plant Species Biology 28, 235-242

Kanazawa *et al.* (2014) Seed storage longevity of *Hosta sieboldiana* (Asparagaceae). South African Journal of Botany 98, 6-9

Suzuki and Kawano (2010) Seed germination and dispersal strategy of *Trillium apetalon* (Trilliaceae): a typical temperate woodland perennial in Japan Plant Species Biology 25, 231-239

Kanazawa *et al.* (2018) Influence of temperature, moisture, and light conditions on the germination of seeds of *Erythronium japonicum* Decne. Open Journal of Forestry 8, 105-116

Kawano *et al* (2019) Seed germination characteristics of *Maianthemum dilatatum* (Wood) Nels. et Macbr. (Asparagaceae). Plant Species Biology 35(1), 1-11

2) 造園植物の種子繁殖

造園植物を増殖するための基礎研究としてその種子繁殖生態を実験で究明すると共に、生育地での繁殖調査をおこないました。

濱野他 (2007) ヤマモモ (*Myrica rubra*) の種子発芽習性からみた生育環境と増殖法. 環境情報科学センター 21, 55-58

福永他 (2008) 低含水率に調整したマユミ種子の発芽促進. 日本緑化工学会誌 34 (1), 63-68

金澤他 (2009) サクラ属種子の発芽に及ぼす温度と光、水分条件. 櫻の科学 14, 11-19

3) 絶滅危惧植物の保全、生活史に関する研究

都市近郊の里山には、近年絶滅していたと思われる植物や、絶滅危惧植物が残っている場合があります。これらの植物の生活史（結実、散布、発芽、生長、開花、受粉）を把握すると共に、生育を困難にしている原因を探ってきました。

自治体と地域連携をし、神奈川県川崎市早野梅ヶ谷特別緑地保全地区における林床植物としての稀少植物（タマノカンアオイ等）や、低木、高木の保全・研究を10年以上継続してきました。

中島他 (2021) タマノカンアオイの生育・開花に及ぼすアズマネザサの刈り取りの影響、ランドスケープ研究 84 (5)、

687-692

4) 里山の植生管理が植物相や動物相に及ぼす影響

里山での植物管理は、植物相への影響だけでなく動物相にも影響します。そこで里山における植物管理が林床植物の生育に及ぼす影響、及び昆虫（特にアオオサムシ）の生息に及ぼす影響について調べました。

中島他 (2018) 二次林下におけるアズマネザサの刈り取りがヤブランとジャノヒゲの生育・着花に及ぼす影響. ランドスケープ研究 81 (5)、479-484

Nakajima *et al.* (2018) Ecological and growth characteristics of trees after resumption of management in abandoned substitution forest in Japan, Landscape Ecological Engineering Vol.14, Issue 1, 175-185 DOI 10.1007/s11355-017-0336-8

大浦他 (2020) 関東地方の放棄二次林における林床と竹林の管理が地表性甲虫類の生息数に及ぼす影響. ランドスケープ研究 83 (5)、743-748

5) 外来植物の種子発芽、分布

日本の環境で、外来植物はどのように繁殖しているのか？種子発芽習性に関する室内実験をおこない、分析してきました。約20年に及ぶ発芽力の維持能力の高さや暖温湿層処理によって発芽力の高まる種などを明らかにしてきました。

吉田他 (2008) 日本列島におけるナガミヒナゲシ (*Papaver dubium* L.) の生育地の拡大. 雑草研究 53 (3)、134-137

吉田他 (2009) 種子発芽特性からみたナガミヒナゲシの日本の生育地. 雑草研究 54 (2)、67-70

金澤他 (2014) 外来種コバンソウ（イネ科）の種子発芽特性と国内での生育地. ランドスケープ研究 77 (5)、623-626

3.4 都市緑地の生物多様性

都市における生物多様性の向上を求めて、都市緑地とその植物の種類との関係を求めて土壌地面積の重要性を追求しました。

Killmann *et al.* (2022) Characteristics of urban greenspaces based on analysis of woody plants in Yokohama City, Japan Landscape Ecological Engineering 18 221-238

Killmann *et al.* (2022) Relationship between the greenspace area and number of plant spaces in the urban area of Yokohama, Japan Ecohabitat 28(1), 5-18

3.5 都市の公園等の公共用芝地の植生管理

出現している雑草と土壌理化学性との対応関係や、9種の局所的な環境要因の値と雑草の空間分布の関係を調べました。また芝地に侵入した雑草の生育に及ぼす植栽資材の影響について実験をおこない、土壌理化学性が雑草の分布や生育に及ぼす影響について明らかにしました。そして、芝地の主

要雑草と土壌肥沃度、踏圧および土壌の乾湿との関係を示すモデルを考案しました。さらにLEDの光が芝草の生育に及ぼす影響の解析や、共起する植物（木本と草本等）の調査及び分析をおこないました。

田中他（2007）京都市の公共用芝地における土壌理化学性の現状．芝草研究 36（1）、26-33

田中他（2009）京都市の公共用芝地における雑草の分布と土壌要因の関係．雑草研究 54（1）、7-16

Tanaka *et al.* (2010) Small-scale heterogeneity in the soil environment influences the distribution of lawn grass and weeds. *Weed biology and management* 10, 209-218

Tanaka *et al.* (2012) Effects of the planting substratum on the growth of horseweed (*Conyza sumatrensis* (Retz.) Walker) in *Zoysia japonica* Steud. *Turf. Grassland science* 58, 117-119

杉浦・田中・水庭・高橋（2017）塩ストレス環境下における *Zoysia matrella* Merr. の生育と塩類集積緩和効果．芝草研究 45（2）、103-107

Tanaka & Inoue. (2017) Plant communities around *Spiranthes sinensis* in urban green spaces. The 26th Asian-Pacific Weed Science Society Conference (APWSS). 366

田中他（2019）色温度および照射時間の異なる高光束密型LED光源下におけるベレニアルライグラス（*Lolium perenne*）の生育．芝草研究 47（2）、95-104

3.6 植物と文化、教育

幼児をはじめとして小・中学生、高校生への植物教育の現状とそのあり方について、カリキュラムや園庭の植物等を調査・分析してきました。

1) 東京の庭園の植物

日本庭園の主体となる構成要素は植物です。都内唯一の緑地とも捉えられる庭園（大名庭園等）に、どのような植物資源が残っているのかを、研究室員で調べてきました。

2) 植物と文化

日本には、なぜ植物に関わる文化が多いのか？その実態と要因を、生物学的、社会科学教育学の視点から調べました。

川上他（2014）中学校教科書にみる樹木名．東京農業大学農学集報 58（4）、235-242

竹林他（2016）表着の柄に描かれた植物の種数が増えた時代

と種の特徴、ランドスケープ研究 79、403-408

3) 保育所、幼稚園の園庭の植物

児童期にふれる植物は、原風景の最も大切な構成材料であり、人の生涯に大きな影響を及ぼします。保育所や幼稚園で毎日遊ぶ園庭にはどのような植物が植えられ、子供たちにどのような影響を及ぼすのか？フィールド調査をおこなってその実態を調べました。

片山・鈴木（2013）幼稚園及び保育所の園庭に関する研究 1. 樹木調査から．和泉短期大学研究紀要 33、17-27

片山・鈴木（2014）幼稚園及び保育所の園庭に関する研究 一2. 低木と草本、つる植物の調査から一、和泉短期大学研究紀要 34、59-64

4) 里山の保全と環境教育

自治体と連携しながら里山（神奈川県川崎市早野梅ヶ谷特別緑地保全地区）の保全活動をおこなっています。11haにおよぶ里山を価値あるものとして維持していくためには地域住民、特に子供達への環境教育が課題になります。本研究室では、定期的に地元で里山を紹介し、実際に管理作業をおこなってきました。

中島他（2015）大学と小学校、及び地方自治体の連携による里山の活用、ランドスケープ研究 VOL.78 増刊 技術報告集 2015、134-137

4. 活動方針

研究室内外の研究・教育体制を繋ぐことが大きな使命になります。社会と研究室、フィールドと実験室、理論と実践、都市と地域、自然と人工、日本と世界（国際化）、社会科学と自然科学、そして時間を要する木本を取り扱う研究であるからこそ先輩と後輩、教員と学生というチームワークを重視してきました。

中でも学術的な近々の課題として、国際化の問題があります。造園植物に関わる様々な国内の問題が、世界的に共通する問題になっています。剪定技術や移植技術、栽培・植栽技術等の日本の樹芸（Arboriculture）は、世界に誇る伝統ある高度な造園技術です。造園・園芸立国のイギリスで開催される学会（The Arboricultural Association）などに積極的に参加する一方、フランス、中国、台湾、アメリカ、フィリピン、メキシコ、ミャンマー、ケニアなど様々な国からの留学生と研究・教育の幅広い思考を実現してきました。

ランドスケープ資源・植物分野

緑化植栽学研究室

高橋新平 教授、水庭千鶴子 教授、中島宏昭 助教

1. 研究室の使命

研究室体制がスタートした昭和 37 年（1962 年）当初は造園学を造園計画、造園植物、造園工学に大別し本研究室を造園学第三研究室（昭和 37 頃（1962 年）旧 2 号館内）という名称で教員と学生自らのゼミ形式の活動がスタートしました。その後特に造園植物に特化した名称の造園植物学第一研究室（昭和 44 年（1969 年）旧 1 号館内）に変更し、さらに専門領域や研究手法の拡大を意図し、造園地被・植栽学研究室（昭和 55 年（1980 年）11 号館内）の時代へと変遷しました。バブル期には基礎と応用領域の研究室体制に発展するため、本研究室の名称も造園地被学研究室と都市緑化技術研究室という 2 つの名称を持つ研究室体制を経て、現在の「緑化植栽学研究室」として変遷・進化してきました。

学科内ではこの頃より基礎的研究領域と応用的研究領域に分けて拡大展開を図ろうと考え、6 研究室体制から 12 研究室体制を開始した時代です。いわゆる「日本における拡大発展期の時代」でありました。このような背景から、都市やその近郊における人々の生活空間には植物や緑化植栽地が重要な役割を果たしています。建築構造物を緑化する植物、公園やレクリエーション園地の芝生地、ゴルフ場やサッカー場などのスポーツターフなど様々な目的や用途に植物が利用されています。このような場所や空間は植物にとって健全生育が困難な環境であることが多く、植物や緑化の効果が発揮できない空間が存在しています。太陽光を妨げる高層ビルや高架道路等による日陰地、局地的豪雨による都市の冠水、建築構造物による都市の乾燥化や高温化、宅地化等による緑地の減少など、植物の生育環境の変化によって顕著に影響を受けている場所です。生活空間のより良い環境を創出し社会に貢献することを使命として、緑化（地）植物に関しての造成、維持管理、管理運営マネジメントなど緑化技術の調査実験研究を行っています。その研究フィールドは都市空間域は勿論のこと、災害地や乾燥地や沙漠地、積雪寒冷地など過酷な環境まで対象としています。具体的な調査実験研究内容としては、芝草・地被植物・草花をはじめとする緑化（地）植物について緑化植栽方法や造成維持管理方法、あるいは公園緑地や植栽地の維持管理マネジメント、花や緑が人間に与える影響、など基礎と応用研究を行っており、屋外での植物調査や実験室内での分析調査などにその対象地が大別されま

す。①植物栽培環境における植物生育や土壌、水、光などを分析する方法、②植物生理に係る植物体内の栄養分析やイオン分析の方法、③植物の健康診断、植物生態に係る光合成や蒸散など生育環境要因との関係性を検証する方法、④植物生活史や個体生態に関する実験調査方法、⑤芝草などを含む草本群落の群集生態に関する植生調査方法、⑥植物の生育環境である太陽光、水分、土壌、気温等の要因と生育性を検証する方法、⑦植物の有用性（体内成分）を分析する方法、など数多くの調査や実験手法を採っており、具体的な研究成果を挙げて以下に詳述します。

2. 研究の視点と手法

研究手法について前述した通り、植物個体から植物群そして植物群集を対象として、植物の成長解析、植物生理、植物生態、植物生育環境要因分析などの方法による調査と実験を行っています。

実験室における種子発芽や根茎再生実験ではシャーレでの種子発芽、浸透圧溶液中における発芽や根茎再生実験など小型人工環境気象室を用いた実験を行います。

また、生育環境要因と幼植物の育成や苗木成長に関する実験では、実験用ポットに植え養生した植物個体群を対象に季節的に成長変化する植物の葉部、茎部、根部を分解採取して光合成によって蓄えた糖分を分析し成長との関係性を検証する温室や人工環境気象室での実験を行います。また生活空間内で人体に悪影響のあるトルエン、二酸化窒素、カドミウムなどの有害物質を植物が除去、吸着、吸収する度合いを実験的に検証する透明アクリル箱やドラフトチャンバー内での実験、そして過去には芝草の遺伝的な交雑を解析検証するためのマイクロサテライト解析（SSR:Simple Sequence Repeat）、DNA 抽出に CTAB 法を用い PCR にて特定遺伝子型を増殖した後 GenALEx 等による遺伝情報整理を行う分析実験も行ってきました。

公園や緑地や里山で生育する草本植物、木本植物を対象とした葉部や枝部の成長量測定や地表面を被覆して成長する群生度合いを環境条件との関りで調査する屋外調査研究など、さまざまな手法を用いた研究事例があります。研究室で行ってきた調査実験研究の成果や研究プロジェクトによる成果について詳述します。

3. 研究成果と展開

研究における現地調査や分析には様々な方法が採用され成果に至るまでには多くの議論と時間を要します。研究室や研究プロジェクトで行ってきた沢山の研究成果を以下の①～⑥のグループに大別して具体的にその成果について詳述しました。特に異なる専門分野の研究者で構成されるプロジェクト研究では調査実験の成果から緑化に係る実用新案や技術特許登録の成果を得てきたが、拡大普及や展開という段階では関連業界などの協同協力がさらに必要となり今後重要であると考えます。なお研究成果は関連学会などに論文として公開された一部を選択し、研究室の時代背景も推察できるように古い年代業績もあえてグループ分けて挙げてみました。研究対象の広がりや研究手法、今までの取り組みの理解を得たいと考えています。

①芝草や造園地被植物の生育特性と環境ストレス

震災や災害、局地的豪雨等によって生活空間領域が消失・破壊される頻度が高くなっています。このような生活空間領域の復旧や再生には必ず緑地空間や公園が必要となり災害時の一時的避難地としての機能も重要になっています。様々な制約にある緑地や公園を植物群によって再生する際に必要な条件などが調査実験研究の視点と基盤になっています。ここでは特に芝草やグラウンドカバープランツに特化した研究成果を挙げてみました。

◆齊藤・中島・水庭・池田・高橋: Perennial rygrass (*Lolium perenne*) の生育診断と生育障害可視化の可能性, 芝草研究, 53 (1), pp2-9, 2024 年

◆齊藤・池田・高橋: Hybrid Bermuda Grass (*Cynodon dactylon* × *C. transvaalensis*) の生育診断と生育障害可視化の可能性, 芝草研究 52(1), pp1-8, 2023 年

◆Sugiura, and TAKAHASHI: Physiological integration for salinity stress alleviation in stoloniferous turfgrass, *Zoysia matrella* Merr. In heterogeneous saline environments, Landscape and Ecological Engineering, January, 2021.

◆SUGIURA, and TAKAHASHI: Ion amount in *Zoysia matrella* Merr. leaves during the winter season in the saline environments, 日緑工学会誌. Jpn. Soc. Reveget. Tech., 46(2), pp. 232-236, 2020 年

◆杉浦・田中・水庭・高橋: 塩ストレス環境下におけるコウライシバ (*Zoysia matrella* Merr.) の生育と塩類集積緩和効果, 芝草研究 45 (2), pp. 103-107, 2016 年,

◆飯島・吉濱・鈴木・高橋・近藤: ドウダンツツジの水ストレス反応とその臨界点に関する実験的研究, 日本造園学会誌ランドスケープ研究, 62(2), pp. 177-180, 1998 年 05 月,

◆高橋・鈴木・近藤: 弱光条件下における St. Augustine grass の生育について, 日本造園学会誌ランドスケープ研究, 58(5), 1995 年 01 月,

◆高橋・曾我・近藤: 弱光条件下における芝草類の生育と光合成反応,

造園雑誌, 日本造園学会, 57(5), 1994 年 06 月,

◆高橋・中林・近藤: 暖地型地被植物の積雪寒冷条件下における生育可能性について, 日本緑化工学会誌, 17(3), pp. 29-36, 1992 年 01 月,

◆高橋・近藤: 各種グラウンドカバープランツの日照条件に対する適応性に関する実験的研究, 造園雑誌, 研究発表論文集 9, 54(5), pp. 161-166, 1991 年 06 月,

◆高橋・多比良・近藤・小澤: 各種日照条件下における地被植物の生育反応について, 造園雑誌, 研究発表論文集 5, 50 (5), pp. 96-101, 1987 年 03 月,

②緑地(化)植物の生育要因と生理・生態特性

緑地(化)植物の生育特性を理解した緑化(活用)方法が提案できる研究の成果をまとめてみました。前述の植物が生育環境ストレスをどのように克服し生活しているかを理解するための研究と類似していますが、以下の研究成果は植物自体より取り巻く環境要因との関りを重要視した研究成果と言えます。緑地の地域特性や水特性を主とした研究成果となります。

◆杉浦総一郎・高橋新平: 耐塩性芝草をリビングマルチとして用いた土壌塩類集積緩和効果, 日本沙漠学会, 沙漠研究, 30(1), pp.1-5, 2020 年

◆高橋(新)・鈴木(伸)・渡邊・高橋(悟): 西オーストラリアにおける *Distichlis spicata* (Salt grass) の塩分寛容性について, 日本沙漠学会誌, 沙漠研究, Dec, 2009, 19(3), pp. 507-511,

◆Shinpei TAKAHASHI, et. Al.: Evapotranspiration and Irrigation of *Zoysia matrella* Merr., Journal of Arid Land Studies, The Japanese association for arid land studies, Desert Technology VIII Refereed Paper. 15(4)321-324, 2006 年 03 月

◆H. Shiwachi, S. Takahashi, et. Al.: Influence of Water-holding Substances on the Growth of Oleaster (*Elaeagnus angustifolia* L.) in the Double Sack Planting Method, Journal of Arid Land Studies, Journal of Arid Land Studies, 15(4)371-374, 2006 年 03 月

◆Fumio WATANABE, Shinpei TAKAHASHI, et. Al.: A Method to Estimate Suitable Irrigation Timing for Afforestation in Areas Using Changes in Stem Diameter., The Japanese Association For Arid Land, Studies, Desert Technology VIII Refereed Paper. 15(4)317-320, 2006 年 03 月,

◆ISMAEL tabarek M・小塩・高橋・福永・渡邊: ジブティ共和国各地の水面蒸発散量の推定と水不足の現状について, 日本国際地域開発学会, 開発学研究, 14(2), pp. 19-27, 2003 年 12 月,

◆Iamael Tabarec, Koshio, Fukunaga, Watanabe, Takahashi: Estimation of Evaporation from Water Surface and Current Situation of Water Shortage of Some Selected Districts in the Republic of Djibouti, Journal of Agricultural Development Studies, 14(2), 2003 年 12 月,

③緑地空間等における緑化方法・植栽方法・維持管理

ここでは緑化方法や緑化植栽方法、あるいは緑化（地）植物の維持管理などに係る調査研究の成果を挙げて、その研究成果を公開することで将来の展開や拡大が図れることを期待した成果として位置づけができます。実用新案や緑化技術に係る特許申請が生まれる背景となった多くのプロジェクト研究の成果があります。

◆中島・松永・田村・水庭・高橋：放棄二次林におけるアズマネザサの刈り取りがナラ枯れに及ぼす影響，日本緑化工学会誌，50（1），pp13-18，2024年

◆中島・久野・増田・水庭・亀山：二次林下のアズマネザサの刈り取りがタマノカンアオイ移植株の生育・繁殖に与える影響，ランドスケープ研究 87(5)，pp413-418，2024年

◆高橋・水庭：日本における校庭芝生の経緯と現状，芝草研究，2011年10月

◆水庭・高橋：高等教育における芝生に関するカリキュラムの現状，ランドスケープ研究，74(5)，pp. 731-734，2011年03月

◆高橋（久）・和泉・高橋・渡邊・福永・志和地：熱帯乾燥地におけるダブルサック工法が樹木の生育に及ぼす影響，日本沙漠学会，沙漠研究，15(2)，pp. 115-118，2005年09月，

◆田島・渡邊・高橋・関山：空気中からの取水を行う装置の開発，日本沙漠学会，沙漠研究，15(2)，pp. 119-123，2005年09月，

◆関山・ISMAEL Tabarek M・渡邊・田島・高橋（悟）・高橋（新）：太陽エネルギー利用による空気中からの採水と蒸留，日本沙漠学会，沙漠研究，14(3)，pp. 177-182，2004年12月

◆Ismael Tabarek M, Kiyoshi Tajima, Shinpei Takahashi, Fimio Watanabe, and Tetsuo Sekiyama: The possibility of Water Collection by Condensing Air in Arid Areas, Journal of Agricultural Development Studies, 14(3), pp. 1-10, 2004年03月，

◆高橋：都市公園内における芝生地の消失について，日本造園学会誌ランドスケープ研究，64(5)，2001年05月，

◆Shinpei TAKAHASHI, et. Al.: Waterside Revegetation at the Mouth of the Tama River, Japanese Institute of Landscape Architecture / Korea Institute of Landscape Architecture, The 5th International Symposium of Japan and Korea, Reserch for the landscape of Waterfront, 1997年11月，

◆高橋・近藤：水辺の緑化に関する実験的研究—ヨシ・ガマ・オギの発芽特性について—，日本緑化工学会誌，16(3)，pp. 31-38，1991年05月，

◆近藤・福沢・高橋：濁水・流水条件下における緑化用植物の冠水抵抗性について，造園雑誌，研究発表論文集 4，49（5），1986年03月，

◆近藤・望月・高橋・小澤：花卉によるのり面の緑化修景のための適性草種・播種量について，造園雑誌，研究発表論文集 3，48(5)，1985年03月，

④建築空間域における緑化手法研究とその応用

都市空間では建築構造物と関わりの深い緑化が行われてお

ります。一例で屋上緑化、壁面緑化、室内緑化などの言葉に代表される緑化形態あります。緑化手法の開発や普及啓蒙を意図した研究成果でもあります。研究室の卒業生と所属する学生・教員が共同で工事施工した成果として位置づけができます。

◆近藤・佐藤・高橋・水庭・他：屋上庭園に導入した新たな手法・技術の評価について，（社）日本造園学会，技術報告集 5，72(5)，98-101，2009年06月

◆近藤・高橋・水庭・佐藤：目黒区総合庁舎本館屋上「目黒十五庭」，（社）日本造園学会，ランドスケープ研究，作品選集，2008年03月

◆近藤・佐藤・水庭・高橋・他：天空の和（なごみ）の庭 東京農業大学第一高等学校の屋上庭園，（社）日本造園学会，技術報告集，2006年01月，

⑤花や緑が人間の心理や心身に与える効用について

生活空間内で人体に悪影響のある物質、例えばトルエン、二酸化窒素、カドミウムなどを植物が除去、吸着、吸収して低減する効果を検証し、利活用の普及やその方法提案につなげる研究成果です。また、造園学を学ぶ学生達を対象としたモノづくり実態調査研究も含め、花と緑の効用研究についての理解を得たいと考えます。

◆町田・浅井・水庭：ヘデラ・ヘリックスとヘデラ型イミテーショングリーンの大気汚染物質の表面吸着特性，日本緑化工学会誌，42(4)，2017年03月

◆祁吉強・浅井・水庭・近藤：主要芝草による放射性物質の吸収除去能に関する実験的研究，芝草研究 43(2)，pp. 168-171，2015年03月，

◆相川・浅井・水庭・近藤：ヘデラ（Hedera）属植物への光触媒処理による二酸化窒素除去能向上に関する研究，芝草研究，41(2)，pp. 144-148，2013年03月

◆浅井・田中・飯島・水庭・近藤：チャンパー内においたセダム類とコウライシバによる二酸化窒素除去能について，ランドスケープ研究，74(5)pp. 399-402，2012年03月

◆茂木・水庭・近藤：公園の機能早期回復にむけた芝生地の除染工事報告，芝草研究，40(2)pp. 148-154，2012年03月

◆水庭・茂木・赤堀・近藤：放射性物質で汚染された家庭の芝生の除染について—造園式芝生除染・更新工法の検証の試み—，芝草研究，40（1），pp. 43-46，2011年10月

◆水庭・荒井・國井・栗田・鈴木（貢）：造園学を学ぶ大学生が体験した自然とのふれあいやものづくりに関する実態調査，東京農業大学農学集報，56(2)，pp.171-181，2011年09月

◆浅井・鹿ノ戸・水庭・近藤：イボメアとヒューケラの二酸化窒素浄化能に注目したファイトレメディエーション能力の評価，造園技術報告集 6，pp. 74-77，2011年02月

◆水庭・阿藤・近藤：緑化が被験者に与える緊張感の変化—歯科医診療室を事例として—，東京農業大学農学集報，2008年09月

◆申恵京・水庭・近藤：室内における光触媒用酸化チタンコーティ

◇研究室ガイド◇

ング剤を塗布した観葉植物によるトルエンの除去可能性, 東京農業大学農学集報, 52(4), 2008 年 03 月

◆浅井・佐藤・水庭・近藤: ペレニアルライグラスおよびトールフェスクのカドミウム吸収能について, 芝草研究, 36(1), 2007 年 10 月

◆申恵京・水庭・近藤: 酸化チタンの光触媒反応を利用した観葉植物によるホルムアルデヒドの除去可能性, 環境の管理, 2007 年 03 月

◆申恵京・飯干・水庭・近藤: 鉢物観葉植物による室内の揮発性有機化合物 (トルエン) の除去技術確立のための研究, ランドスケープ研究, 造園技術報告集, 4(2007), 2007 年 02 月

⑥緑地植物の荒地地や乾燥地や沙漠地における環境緑化の可能性について

主に海外プロジェクト研究の成果として、緑化方法・植栽方法・維持管理方法に係る研究例に類似しますが以下にその具体を示しました。本学で 25 年以上継続している最も長い海外プロジェクト研究成果の一例です。

◆高橋 (悟)・鈴木・高橋 (新)・他: 乾燥地の水利用と緑化技術, 日本沙漠学会, 2010 年 05 月

◆島田・高橋・他: 衛星データを活用した乾燥地緑化ポテンシャルの評価, 日本沙漠学会, 沙漠研究, 17(1)29-32, 2007 年 06 月

◆高橋 (悟)・北中・西牧・高橋 (新)・渡邊: アフリカの水利用から見たネリカ普及の可能性, 日本沙漠学会, 沙漠研究 17(1)33-38, 2007 年 06 月

◆ Sawahiko Shimada, Shinpei Takahashi, et. Al: Monitoring the Land Surface Changes of Djibouti using LANDSAT Images, Journal of Arid Land Studies, 2006 年 03 月

◆高橋 (悟)・豊田・福永・高橋・田島: アフリカ沙漠地域の農業開発について, 農業土木学会誌, 73(3), pp. 199-203, 2005 年 03 月,

◆飯島・鈴木 (貢)・高橋・近藤: 平成 4 年夏期の干天条件下における都市緑化用樹木の被害実態について - 関東地方の自治体のアンケート結果 -, 日本緑化工学会誌, 19(3), 1994 年 01 月

4. 研究室の活動・ゼミ

研究室は学生が主体となり運営し活動しています。大学院生や 4 年生が多くの時間を費やした研究成果が緑化産業や造園関連業界との係りや結びつきを強くしてくれるものと確信しています。その他、研究のための調査や実験には、温室などを含む実験圃場や調査フィールドの利用は欠かすことができません。施設やフィールドの定期的維持管理は円滑な調査



写真 現地視察会の様子

(左: 夏季のグラススキー場芝生地整備の説明会, 右: ゴルフ場芝生の管理実態についての現地ゼミ)

実験研究を可能とします。このような環境整備も研究室活動の一環として位置づけ全員で取り組んでいます。

5. 今後の課題と展望

今まで以上の研究成果が公開できるように研究活動を充実させること、そして造園緑化関連産業の研究機関や大学など研究機関にて調査研究に携わる人材が育つこと、また緑化造園関連産業で活躍できる人材が育つこと、研究室における研究手法や成果を積み上げること、多くの卒業生や緑化造園関連産業の専門家と連携をとり産学のつながりを強化すること、また産官学連携のプロジェクト研究や海外研究プロジェクトに参加・運営すること、プロジェクト研究チームを結成し異分野との連携や海外研究者との共同研究を実行すること、などなど多くの課題と期待と展望を持っています。

既に卒業生 (研究室) の中には海外に定住し日本庭園づくりやリゾート開発などの業務プロジェクトで活躍する方々も増加しています。また国内でも関連産業界で活躍される卒業生が多く、視野を広く構え、目の前のことを手堅く積み上げてゆける人材が育つこと、そしてその支援ができる研究室体制でありスタッフであることが重要と考えています。私達と一緒に調査や実験分析ができ緑化・造園関連産業界など社会に貢献できる研究室でありたいと考えています。



写真 研究室での現地視察見学会と現地調査の様子

(左: 造園企業の太陽光発電と地域活性事業, 右: 事業所内で雑草抑制試験する学生達)

景観建設・技術分野

庭園技法材料研究室

齋藤 馨 教授、栗野 隆 教授、張 平星 准教授、内藤啓太 助教

1. 研究室の使命

思想・芸術・技術の総合体というべき日本庭園は、土・石・木といった自然材料の特性を発揮させる知恵と、地形・光・風・水・音を活かす技法から成り立っています。当研究室は、庭園の工法（庭園の創造、育成、維持、管理に関する技術）、材料（石材・木材・竹材・左官材料の種類、産地、特性、加工）、施設（庭園建築、石造物、垣根等）の研究を通して、庭園の保存修復と技術の伝承とともに、先人の知恵と工夫の現代の造園空間への応用に挑戦します。さらにデジタル技術を駆使し、視覚と聴覚に関する環境情報から地形・光・風・水・音が人に与える影響を測定・評価し、刻々と変化する庭園景観の再現等、風景認識に関する学理的研究を推進します。

研究室活動としては、学生が造園の技術家に必要な堅実な理論と時空間に対する確かな視野を備えるべく、庭園と材料産地のフィールドサーベイ、技術に関する実地研修、庭園の調査修復ワーキング、デジタル技術の研修等を展開します。

2. 研究テーマ

当研究室のテーマは、庭園の工法、材料、施設、歴史・意匠・空間原理、デジタル化を扱い、多岐にわたります。

①庭園の工法に関する研究として、土工・地形造成方法、池泉・水工、石の運搬・据え付け、庭園施設の工作・組み上げに関する伝承造園技術の解明と失われた造園技術の実験考古学的再現、②庭園の材料に関する研究として、造園石材の産地の調査や全国の庭園に多用される庭石の種類と用途の調査にもとづく地質・視点からの庭園文化論の構築、③庭園の施設に関する研究として、石灯籠、層塔、石橋、舟着場等の写真測量による詳細把握とカタログングにもとづく編年作成、④歴史・意匠・空間原理に関する研究として、東アジアにおける日本庭園の影響、東京の近代庭園の立地特性と眺望景観の復元、⑤デジタルな庭園技法研究として、360度全周VR映像音声などの日本庭園デジタルコレクションとリアルな庭園とを融合し、新たな花鳥風月と季節の移ろいの表現や壮大な自然の写実写意による新しい庭園鑑賞技法の開発、などの具体的なテーマに取り組んでいます。

3. 教員の研究成果とゼミ活動

上記2. で掲げた①～⑤の研究テーマのうち、教員や学生

が究明した主たる成果を以下に紹介します。

(1) 栗野隆教授の研究成果とゼミ活動

主な活動対象を歴史的庭園（発掘庭園、遺跡庭園、伝世庭園）とする栗野は、特にその保存と修復のために必要な調査研究を進めてきました。以下では、これまでの研究成果と現在進行形の研究について紹介します。

1) 歴史的庭園等の保存・修復に関する研究とゼミ活動

長年地上部に露出した庭園は、経年変化や自然現象によって、築山等の土の流出、石垣や池泉護岸石組の緩み、池の漏水、雨水の排水不良や樹木の根上がりにとまなう地面の不陸など、数々の損傷が顕在化します。庭園の適切な保存・修復に際しては、まずは精緻な実測により図面を作成し、損傷箇所と損傷の度合いを特定し、いかなる工法が有効かを検討する必要があります。これまで、新潟の旧齋藤氏別邸庭園、大磯の旧陸奥宗光別邸跡・古河別邸庭園、小田原の清閑亭庭園、柴又の題経寺遼溪園等でフィールドワークを軸に庭園の保存・修復研究を進めつつ、その応用として富士塚（豊島長崎富士塚）の修復も実施しました。

- ・栗野・國井（2013）清閑亭庭園を対象とした3次元測量と直接計測との併用による歴史的庭園の調査技術、ランドスケープ研究 76（増刊）造園技術報告集 7、126-129
- ・栗野・國井他（2015）旧齋藤氏別邸庭園を事例とした近代和風庭園の保存のための調査計画手法、ランドスケープ研究 78（増刊）技術報告集 8、92-97
- ・武井・栗野他（2015）「豊島長崎富士塚」を事例とした富士塚の保存修理に関する造園技術、ランドスケープ研究 78（増刊）技術報告集 8、86-91

2) 日本近代の造園施設に関する研究とゼミ活動

日本近代の造園空間を特徴づける材料はセメントです。具体的にはコンクリート造モルタル仕上げの擬木・擬石・擬岩の意匠・構造・製作方法に関する研究をおこなってきました。上原敬二先生は、擬木・擬石は「材料の真、構造の真」に背くと指摘されましたが、大正・昭和初期の擬木に代表されるセメント工作物は、すべてハンドメイドの一品生産で鋳や鍛、釘による造作が見事で、日本近代の造園技術の粋を示すものといえます。研究では、擬木・擬石の造園空間への導入経緯、製作方法、学生との擬木づくりワークショップを実施しています。



写真-1 陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸庭園の保存のための池泉護岸の検出



写真-2 日本近代の擬木づくりワークショップの様子



写真-3 八王子城跡御主殿会所跡庭園遺構の調書作成の様子

- ・栗野隆（2015）近代東京における擬木擬石づくりの名手、松村重の足跡、ランドスケープ研究 78（5）、425-430
- ・栗野隆（2011）近代の大阪および阪神間を中心とした擬木・擬石・擬岩の導入と展開、ランドスケープ研究 74（5）、359-364
- ・栗野隆（2011）近代日本の擬石・擬木製作法、ランドスケープ研究 74（増刊）造園技術報告集 6、140-143

3) 造園の歴史・意匠・空間原理に関する研究とゼミ活動

造園の技術研究を推進するにあたっては、その技術の是非や価値をしっかりと認識できる歴史観がきわめて重要です。したがって上記の造園の技術研究の基礎学（造園学原論）として庭園を中心とした造園史・意匠構造・空間原理に関する研究をおこなっています。主たる時代対象は明治・大正・昭和初期の日本近代ですが、近年では台湾を中心とした東アジア全体へも広がりつつあり、「東アジア庭園史」の構築を射程した国際的研究を推進しています。歴史を作ってきたのは「人」であることから、造園人物史（人物誌）研究も重要なテーマです。

- ・近藤・栗野他（2021）『百花繚乱「横浜植木物語」』、誠文堂新光社
- ・近代庭園マップ東京研究会（2020）『近代庭園マップ東京2020』、東京農業大学造園科学科
- ・農大造園100年研究会（2020）『農大造園の遺伝史』、東京農業大学造園科学科
- ・T. Awano（2020）A study on the preservation situation and spatial characteristics of Japanese style garden built in Taiwan during the Japanese rule, Impact, 2020（6）70 - 72
- ・栗野隆（2018）『近代造園史』、建築資料研究社
- ・T. Awano（2017）Style Features and Spatial Composition of Gardens in Meiji Japan, International Symposium III, The Japanese Garden Intensive Seminar Plus in Kyoto
- ・栗野隆（2016）近代庭園の潮流と昭和の庭園作家の系譜、

庭 NIWA（225）、21-24

(2) 張平星准教授の研究成果とゼミ活動

張は主に造園石材の研究をおこなってきました。「木の文化」と言われる日本でも、生活基盤は石材なしで成り立ちません。石材の採掘技術と運搬技術が発達してきた江戸時代まで、地元の石材は大切に使われました。特に山の景色を縮小して表現する日本庭園では、石材の形・色・斑紋などの美観性を追求していました。日本列島各地の異なる地質により、造園石材の風土性が生まれました。現代景観の中、コンクリートやインターロッキングブロックなどの人工材料に比べ、自然資源である石材は高級材料として扱われています。世界中の石材流通により、造園石材の風土が失いつつあるが、地域外の石材による新たな使い方が生まれます。

1) 造園石材に関する研究の視点

張の造園石材の研究について、2年生後期必修の「造園施設材料」でその知識体系を紹介しています。造園石材そのものに注目するだけでなく、ひとつひとつの造園石材に秘められた日本列島の動きと人間の知恵を見極めるのを目指しています。①地球的視点から造園石材の生まれ方と特徴の関連性（十数万年～数千万年の時間軸）、②歴史的視点から人間の石材利用と文化・信仰・技術の関連性（数千年～数百年の時間軸）、③世界的視点から日本列島とアジア大陸・ヨーロッパ大陸の造園石材の特性と加工技術の相違（国スケール）、④地域的視点から集落における造園石材の採掘・加工・販売と利用のプロセス（集落スケール）など、異なる時空間のスケールから造園石材の研究を進めています。

2) 造園石材に関する研究の方法と内容

以上①～④の視点から幅広く知識を習得し、全国各地の日本庭園に、どんな造園石材はどのように使われているのかについて、庭園の石材調査をおこないます。調査では、作庭者の意図、庭園の所在地周辺から産出する石材、地域外から石材を搬入する可能性、を把握した上、石材を識別します。庭園の石材を砕いて内部を観察したり、サンプルを研究室に持



写真-4 携帯型帯磁率を用いた清澄庭園の庭石観察会 (2021 江東区)

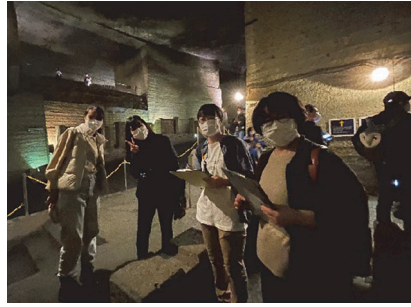


写真-5 大谷石地下採石場跡の研修会 (2021 栃木県宇都宮市)



写真-6 肥後細川庭園の石材パンフレットPJ (2021 文京区)

ち帰って実験したりは不可能なため、肉眼で石材の表面を観察するのが主な調査手段になります。ところで、造園石材は経年劣化や表面の変色が多く、さらに類似石材が多く存在するため、肉眼の観察には限界があります。張の研究では、「携帯型帯磁率計」という岩石の磁性の強さを測定する機器を多用し、造園石材の識別に役立つ証拠データを収集しています。

その一方、造園石材は、日本庭園のみならず、伝統的町並み・集落・街道の石仏・燈籠・石積み・石橋、現代の都市景観の舗装材料・ベンチ・塀、建築の外壁にもたくさん使われています。様々な造園空間の中の石材の今まで使い方を把握し、未来へ向かって新しい材料の新しい使い方の可能性を考えていきます。なお、造園石材の研究の基盤として、石材の産地となる集落や採石場の調査をおこない、収集したサンプルを研究室で観察します。

- ・張ほか (2016) 京都東山北部における近代以降の白川石の産出場およびその変遷、ランドスケープ研究 79 (5)、437-442
- ・柴原・張 (2020) 滋賀県坂本地区における穴太積みの積み方の法則性、2020年度日本造園学会関東支部大会ポスター発表 (優秀発表奨励賞)
- ・張 (2021) 京都市左京区山麓部の石仏の分布と石材利用、ランドスケープ研究 84 (5)、517-520
- ・梁・張 (2021) 中国の江南園林の築山に使われる太湖石の産地の推定、日本造園学会 2021 年度全国大会ポスター発表
- ・張ほか (2018) 造園材料としての白川石および類似花崗岩の色彩的特徴の分析、ランドスケープ研究 81 (5)、467-472

3) ゼミ活動の詳細

張ゼミは、3年生の入室してから、庭園見学、石材店の見学、先輩の卒論調査の補助、関東周辺の材料産地の研修会などの室外活動をおこない、多面的に物事を論理的に判断する能力を養い、造園石材を識別する能力を身に付け、材料を活用す

る技術の発展性を自主的に学習していきます。また、庭園の石材パンフレットや研修会の成果発表用ポスターの作成を通して、チームワークとPC技術 (GIS、CAD、PS、AI など) を習得します (写真 4-6)。

(3) 斎藤馨教授の研究成果とゼミ活動

2021年4月に着任して庭園技法や材料についての研究テーマを模索中です。前職東京大学での32年間は、景観 (ランドスケープ) と人の感性との関係性をテーマに、景観予測評価、造園における情報技術応用、遠隔の森をライブ配信・記録公開するサイバーフォレスト、サウンドスケープと、それらのデータを使った環境教育を研究してきました。庭園とは関係が無いように思われるでしょうが、造園学原論や造園史では庭は自然を身近に取り込む空間や装置であり、それぞれの時代の中での人々の自然観と技術のバランスのなかで作庭されていると考えると、むしろ関係は強いのです。

私は、50年程前の高校生1年生の頃に日本庭園に興味を持ち、その後大学2年生の頃まで、京都や奈良の庭園巡りをおこなっていました。思い返すと、当時の私は由緒ある庭園は良いお手本なのだと自分に言い聞かせるようにして、実は何が良いのか分からないままに緊張して見て回っていたのでした。しかし拝観料を払って見学を重ねるうちに、次第に「たまたま公開時間帯に訪れて1、2時間程度見て回ったところでそれはどういう価値や意味があるのだろうか」という疑問が芽生えて、だんだんと大きくなりました。庭は日々の生活の中で楽しんだり、来客に庭を見せたりするならそこには飲食を伴うだろうし、茶室の路地庭などもあるし、離宮では歌を詠んだり夜空の月を愛でたりしただろうし、禅宗寺院の「枯山水」は、水が無くとも石組に自然の風景を写しながら瞑想修行する対象でもあるだろうと考えるようになりました。そして次第に庭そのものの形などありようから、庭の背後にある人の感性と自然との関係に興味に移り、これまで冒頭の研究をしてきたのだと思います。

斎藤ゼミの活動について

現在ゼミ生は3年生4名が所属していますが、造園を通じての将来のことや、造園空間の読み解き方や利用者の感じ方、はたまた造園と芸術などについて意見交換しながら、明治神宮の写真撮影散策にでかけたり、農大1高美術部の創作活動見学したりしています。

私の学生指導はこれまで一貫して、テーマを与えるのではなく学生自身がテーマを見つけることから始めるようにしており「フィールドワークとICRRC (Inventory Classification Reference Review Cycle) による個人別実践アプローチ」と名付けています。学生自ら課題を見つけ、それを解決するための調査分析方法を創り出し、調査分析して結果を導くための方法になります。もう少し詳しく説明します。

造園科学科に入学して以来、各自が大学生活の中での授業や演習、友達との議論などを通じて、各自各様に造園に関する知識経験を積みながらも、何故だろうという疑問や、この問題を解決できたら良いなというような課題を持つようになるはずです。それは具体的であっても漠然としていてもかまいません。それら全てをひっくるめて「フィールドワーク」と捉え、各自が同じようで違った体験をしているのです。フィールドとは各自の興味の対象であり、それは庭という現場でもあるし、庭に関する文献資料もフィールドとしても良いのです。Instagram や Line, TikTok など SNS の「# 日本庭園」であっても良いのです。自分自身が気になって実際に関わっていると、だんだんと誰よりもそのことに詳しくなります。つまりフィールドワークをしていると、いろんな課題を見つけることになるのです。気になっていることを、もっとはつきりと理解して問題解決をしたくなったら、その課題を明らかにために、項目を拾い出して分類整理し、これまでの事例との関係を調べ、自分なりの理論を立てながら、他人に説明して理解してもらえるような話を組み立てることになりますが、私はこの一連の事を研究と呼んでいます。これをそれぞれの英単語の頭文字をとって ICRRC と私が勝手に名付けました。おそらくインターネットを検索しても見つからないと思います。I は思いつくことを全てリストアップすることです。最初に 100 程度を列挙してみます。C は、リストした項目を分類することで、見方を変えればいろんな分類ができるでしょう。R は、それらの項目と分類を眺めて、過去の事例や文献などに同じようなことがないかを調べることで。もうひとつの R は、関連する事例や文献の内容を、自

分の挙げた項目や分類との関係を読み解きながら、課題との関係を説明することです。そして最後の C は、この ICRR を何度も繰り返すということです。繰り返すうちに自ずと自分だけのオリジナルな課題解決のための物語ができるのでそれを論文という形にまとめます。するといつの間にか一生ものの自分自身のオリジナルな方法や考えが身につくのです。

Saito, Kaoru, Nakamura, Kazuhiko et.al, (2015); Utilising the Cyberforest live sound system with social media to remotely conduct woodland bird censuses in Central Japan. AMBIO: A Journal of the Human Environment, 44(4): 572-583.

中村 和彦, 斎藤 馨 ほか (2020) 森林体験活動を教室内学習へ持続的に反映させる方法論の検討: 一小学校第5学年のべ学習單元における振り返り映像の視聴を事例として—日本森林学会誌 102 (1) 77-82

(4) 内藤啓太助教の研究成果とゼミ活動

2025 年 4 月からの着任となります。私はこれまで建築学の分野から、庭園が歴史的に建築、地域、都市、社会、環境といった外部とどのように結びつきながら形成されてきたのか、を主たるテーマとして研究を進めてきました。それは学際的な視点のもとに、これまで庭園が担ってきた役割を多角的に解明することを企図したものです。そして近年、線状降水帯やゲリラ豪雨、土砂災害など、頻発する自然災害によって人間の生活と緑・水・土との関係性を再構築することが求められています。そうしたなかで、ゼミ活動では、持続可能な社会を実現するための重要な「環境資源」として庭園を捉えなおし、現代の造園空間への応用を見据えた研究を推進します。主に古庭園やその遺構を対象とし、フィールドサーベイや実測図面の作成による現状記録および文献や聞き取り調査によって、庭園が人為的な改修や自然現象などの影響をどのように受けながら継承されてきたのか、その変遷を科学的に分析し、庭園の現状やそれを取り巻く社会・環境の条件を丁寧に解説しながら、現代における庭園の在り方や役割、ひいてはこれからの造園空間についての考えや問題意識を深めていきます。また、これらを通して、造園に対する自分なりの評価軸を身につけていくことが大きな目標です。

・内藤啓太 (2022) 江戸大名庭園における上水の影響—庭園経営と水源に関する研究—、日本建築学会計画系論文集 87 (802)、2654-2665

・内藤啓太 (2024) 江戸大名庭園における滝と上水の関係性、日本建築学会計画系論文集 89 (816)、433-444

6. 教育カリキュラム

6-1 造園科学科の学習・教育目標

造園科学科のカリキュラム・ポリシーはディプロマ・ポリシーを踏まえて設定されています。造園科学科のディプロマ・ポリシーは、「ランドスケープの専門家すなわちみどり環境の創造と保全を担うスペシャリストとして、人間と自然の共生した空間は環境の実現のために、次のような能力が身につけている学生に対して、学位を授与する」とし、以下9つの能力を設定しています。

- (1) 地域レベルから地球レベル、ならびに地域社会から国際社会に至る幅広い視点から造園学を捉え、その沿革、社会的使命、将来の目標や課題を理解し、その発展に貢献できる能力を身につけている。
- (2) 社会に対する造園家としての使命感と責任を把握し、貢献できる能力を身につけている。
- (3) 幅広い造園学の対象領域とそれを司る原理や、造園空間の特徴、構成要素、自然のシステム、社会や経済のシステム、情報などを理解し、造園技術を社会で活かすための基礎能力を身につけている。
- (4) 造園家として必要な言語や図面等による表現能力、コミュニケーション能力を身につけている。
- (5) 造園空間の創成に向けて問題や課題を調査・分析し、それらの解決手段である総合化技術とその具現化手法であるデザイン技術を身につけている。
- (6) 造園空間の創成に必要な植物について、その種類、生理生態、美観的特性を理解し、植栽から育成管理に至るまでの技術と手法を身につけている。
- (7) 造園空間を創成するための工学的知識、計測技術、建設・施工にかかわる具体的手法を身につけている。
- (8) 多様な主体との協働・連携によりプロジェクトを計画的・組織的に推進する実務的・実践的な能力を身につけている。

造園科学科のカリキュラム・ポリシーは、「基礎的な科目からより専門的な科目までを配当する。造園科学科の専門分野は、環境計画・設計分野、ランドスケープ資源・植物分野、景観建設・技術分野の3分野であり、各分野に至る科目および専門科目を総合化する科目を配当し、教育を行う」とし、具体的に以下5つを示しています。

- (1) 地域環境を構成する植物、土、水の基本要素にかかわる基礎教育、地域環境問題に関する見方や地域環境科学の学習への動機づけ、造園を学ぶために必要な感性を引き出すことをねらいとする基礎科目を配当する。
- (2) 造園学における計画や設計に関わる基本理論と専門理論、造園空間創成のための手法論を修得する環境計画・設計分野の専門応用科目を配当する。
- (3) 生物や生態に関わる基礎知識、造園植物や造園植栽、緑地生態などに係わる基礎理論と専門理論、造園空間創成のための技術論などを修得するランドスケープ資源・植物分野の専門応用科目を配当する。
- (4) 造園建設・施工に関わる基礎理論と専門理論、造園空間創成のための技術論などを修得する景観建設・技術分野の専門応用科目を配当する。
- (5) 造園学を構成する3つの専門分野を統合し、造園学を横断的に理解しつつ、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークを軸に学修を展開することにより、実践的・実務的な応用力を修得する総合化科目および専門応用科目を配当する。

造園科学科では、造園家としての知識・能力を養うために8つの具体的な学習・教育目標が設定されています。これはJABEEの定める技術者としての修得すべき知識・能力とも連携するものです。

表6-1は、造園科学科の授業科目と学習・教育目標との関係、表6-2は学習教育目標を達成するための授業科目の流れを示しています。

表 6-1 造園科学科カリキュラムと学習・教育目標

科目区分	履修区分	授業科目名	学年	配当学期	単位数	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
						(1)地域レベルから地球レベル、ならびに地域社会から国際社会に至る幅広い視点から造園学を捉え、その沿革、社会的使命、将来の目標や課題を理解し、その発展に貢献できる能力を身につけている。	(2)社会に対しての使命感と責任を把握し、貢献できる能力を身につけている。	(3)幅広い造園学の対象領域とそれらによる原理や、造園空間の特徴、構成要素、自然のシステム、社会や経済のシステム情報などを理解し、技術を社会で活かすための基礎能力を身につけている。	(4)造園家としての必要な言語や図面等による表現能力、コミュニケーション能力を身につけている。	(5)造園空間の創成に向けて問題や課題を調査・分析し、それらの解決手段である総合化技術と、その具現化手法であるデザイン技術を身につけている。	(6)造園空間の創成に必要な植物について、その種類、生理生態、美観的特性を理解し、植栽から育成管理に至るまでの技術と手法を身につけている。	(7)造園空間を創成するための工学的知識、計測技術、建設・施工にかかわる具体的な手法を身につけている。	(8)多様な主体との協働・連携により、プロジェクトを計画的に推進する実務的・実践的な能力を身につけている。
総合教育科目	全学共通科目	導入科目	必	東京農業大学入門	1	F	2						△
			必	共通演習	1	T	1						○
			必	情報基礎(一)	1	F	2		○	○			
			必	情報基礎(二)	1	L	2		○	○			
				データサイエンス基礎(一)	2	F	1		○	○			
				データサイエンス基礎(二)	2	L	1		○	○			
		スポーツ関係科目		スポーツ・レクリエーション(一)	1	F	1		○	○			
				スポーツ・レクリエーション(二)	1	L	1		○	○			
		課題別科目		特別講義(一)	1	F	2	○					
				特別講義(二)	1	F	2	○					
				特別講義(三)	1	F	2	○					
				特別講義(四)	1	F	2	○					
		就職準備科目		キャリアデザイン(一)	2	F	1	○	○				
				キャリアデザイン(二)	2	L	1	○	○				
外国語科目	全学共通科目	基礎英語科目	必	英語(一)	1	F	2		○				
			必	英語(二)	1	L	2		○	○			
			必	英語(三)	2	F	2		○	○			
			必	英語(四)	2	L	2		○	○			
	学部共通科目	実用英語科目		実用英語(一)	1	F	2		○	○			
				実用英語(二)	1	L	2		○	○			
				実用英語(三)	3	F	2		○	○			
				実用英語(四)	3	L	2		○	○			
		初修外国語科目		中国語(一)	1	F	2		○	○			
				中国語(二)	1	L	2		○	○			
				ドイツ語(一)	1	F	2		○	○			
				ドイツ語(二)	1	L	2		○	○			
専門教育科目	学科教養科目	人文科学分野科目	選必	哲学・倫理学	1	F	2	○		△			
			選必	歴史学	1	L	2	○					
				文学	1	L	2	○		△			
		社会科学分野科目	選必	日本国憲法	2	L	2		○				
				社会学	2	L	2						
				経済学	3	F	2		○				
		自然科学分野科目	選必	生物学	1	F	2		○				
				化学	1	F	2		○				
				地学	1	F	2		○				
				物理学	1	L	2		○				
	学科専門科目	専門共通科目		技術者倫理	4	F	2	○	○				△
				源流文化学	2	F	2						△
				統計学	2	F	2						
				景観論	1	L	2					○	
				芝生論	3	F	2		○		○		
				群集生態学	3	F	2		○		○		
				日本の森林文化	2	L	2		○		○		
				きのこ学	2	F	2				○		
				微生物環境学	1	L	2				○		
				海外農業農村開発学	4	F	2				○		
		専門基礎科目	必	造園科学概論	1	F	2	○	○	△			
			必	庭園史	1	L	2		○				
			必	近代造園史	2	F	2	○					
			必	環境デザイン基礎演習	1	L	2			○			
			必	造園植物基礎演習	1	F	2				○		
			必	造園植物基礎	1	L	2				○		
			必	造園工学基礎演習	1	L	2					○	
			必	測量学	2	F	2					○	
			必	測量実習	2	F	2					○	△
				CAD・GIS基礎演習	2	F	2		○			○	
		専門応用科目	必	造園樹木学	2	F	2		○		○		
			必	緑地生態学	3	L	2				○		
				樹木の保護と管理	2	L	2				○		
				緑地の生きもの	3	L	2		○		○		
			必	造園植栽学	2	L	2				○		
			必	グラウンドカバープランツ	2	F	2				○		
			必	植栽基礎論	3	F	2				○		
				ガーデンプランツ	3	F	2				○		
			必	造園計画学	2	F	2		○				
				ランドスケープ政策論	2	F	2	○		○			
			必	ランドスケープ・マネジメント論	3	L	2		○		○		○
				観光計画論	3	L	2	△					
				自然保護論	3	F	2	△					
			必	風景地計画学	3	F	2	○	○				
				空間情報学	2	L	2			○		○	
			必	都市緑地計画学	3	F	2	○					
				都市・農村計画学	3	L	2		△				
				ランドスケープデザイン論	2	L	2	△		○			
				ランドスケープ作品論	2	F	2		○	△			
			必	造園工学	3	F	2					○	
			必	造園施工論	3	L	2		△			○	
			必	造園施設材料	1	L	2					○	
				庭園技法論	3	F	2					○	○
	総合化科目	選必		専門特化演習(一)(植物学)	3	F	4		○		○		○
				専門特化演習(一)(地域再生)	3	F	4		○	○			○
				専門特化演習(一)(伝統技法)	3	F	4					○	
		選必		専門特化演習(二)(植栽基盤)	4	L	4		○	△	○		○
				専門特化演習(二)(環境デザイン)	4	L	4		○	○			○
				専門特化演習(二)(エンジニア)	4	L	4		○			○	○
		必		造園キャリアデザイン	2	L	2	○	○				○
		選必		造園植物・植栽演習	2	L	4		○		○		○
		選必		造園計画設計演習	3	F	4		○			○	○
				造園施工材料演習	2	L	4		○			○	○
		必		専攻研究	3	T	2		△			○	○
		必		卒業論文(卒業制作)	4	T	4		○		○	○	○

ディプロマ・ポリシー

○＝関連性強、△＝関連性中～弱

表 6-2 学習・教育目標を達成するための授業の流れ

科目区分等		1年次		2年次		3年次		4年次	
		前学期	後学期	前学期	後学期	前学期	後学期	前学期	後学期
総合教育科目	導入科目	●東京農業大学入門							
		●共通演習							
		●情報基礎(一)	●情報基礎(二)	データサイエンス基礎(一)	データサイエンス基礎(二)				
	スポーツ関係科目	スポーツレクリエーション(一)							
	課題別科目	特別講義(一)							
		特別講義(二)							
		特別講義(三)							
		特別講義(四)							
外国語科目	就職準備科目			キャリアデザイン(一)	キャリアデザイン(二)				
	基礎英語科目・実用英語科目・初修外国語科目 進修者として必要な言語能力による基礎能力、コミュニケーション能力	●英語(一)	●英語(二)	●英語(三)	●英語(四)	実用英語(三)	実用英語(四)		
専門教育科目	学科教育科目・専門共通科目等、学部・学科において共通して学ぶ科目 進修者として必要な教養及び学部・学科の専門分野に係る基礎的・共通的な知識の習得	▲物理学	▲物理学	きのこ学					海外農業農村開発学
		▲生物学	微生物環境学						
		▲化学							
		▲地学							
	学科の専門基礎科目 造園空間を構成する植物、土、水の基本要素にかかわる基礎教育、地域環境問題に関する知見や環境政策・都市計画の理解、造園空間創成のための技術的な知識を修得するランドスケープ分野の専門科目	●造園植物基礎演習	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		
		●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎	●造園植物基礎		

6-2 学年進行と科目の配当

造園科学科のカリキュラムを構成する科目は、環境計画・設計分野、ランドスケープ資源・植物分野、景観建設・技術分野という分野別の括りとともに、造園科学教育の基礎となる基礎教養的な科目から、応用的な科目や総合化の科目があります。

各専門科目がそれぞれの内容や特徴によって、それぞれの段階に応じて第1期～第8期まで系統的に並べられています。

表6-2では、カリキュラム構成が4年間のタイムスケジュールに沿って示されています。例えば「ランドスケープ作品論」は2年次に配当されていますが、これは早い時期から具体的な造園作品やそれぞれの分野で活躍する造園科に親しむという教育効果に配慮したものです。

ただし、これらの並びは決められたものではありません。学習目的によっては、それぞれの学習内容に先行して学ぶ科目のある場合も起ります。また多くの知識を得たり、体験をした後に学ぶことが望ましい基礎的な科目がある場合も起ります。造園科学科では系統的かつ学習効果に則した柔軟な科目配当をおこなっています。

6-3 選択科目の履修について

「必修科目」「選択必修科目」は造園科学を学ぶすべての学生が最低限修得すべき知識や技術に関わる科目であり、造園の各分野を広くカバーするように、かつ基礎から応用まで様々なレベルの知識や技術が身に付くように体系的に選定されています。

「選択科目」は低学年にあっては幅広い知識や教養を身に付けるための、また高学年にあっては将来の進路（職能や職域）を意識して、各自の専門性をより深めるために必要な科目という視点から設けられたものです。

卒業に必要な単位数124単位のうち、造園科学科で7割程度が必修科目であり、残りについては選択科目を履修していくことになります。造園科学科のカリキュラム構成のねらいを十分に理解した上で、自分の進路（将来の活躍分野）をよく考慮し、計画的な履修をおこなうよう心がけて下さい。

6-4 専門分野と専門家育成シナリオ

これらの履修科目は、卒業後希望する職能分野、あるいは自分の興味を考慮して、各自が選択できるようになっています。毎年4月にその年次に履修する選択科目を決めることとなりますが、カリキュラム構成の全体像を十分理解しておくことが大切です。

造園科学科のカリキュラムを構成する3つの分野は、社会で活躍する造園科学科卒業生の職能や職域を意識して設定したものです。

「環境計画・設計分野」は、都市計画・公園緑地のプランナー、環境計画コンサルタント、ランドスケープ・デザイナーなどの教育を目標に、環境行政、自然保護行政、まちづくり・公園行政担当の公務員も視野に入れています。「ランドスケープ資源・植物分野」は、主に造園建設や緑化樹木生産の技術者、自然再生緑化コンサルタントなどの教育を目標に、都市緑化行政、自然保護行政担当の公務員にも対応させています。「景観建設・技術分野」は、造園建設会社、造園施設材料メーカーなどの技術者教育をねらいとして、都市緑化行政、公園行政担当の公務員も意識したものです。

表6-3はそれぞれの職能領域、すなわち各分野を基礎とした履修モデルです。これらを比較するとわかるように、必修科目は3分野を横断するように、選択科目はそれぞれの分野の特性に応じて選定され、4年間を終えた時点でそれぞれの特徴と専門性を備えた人材が育つように工夫されています。履修指導については、学部教育の特性に鑑み、幅広い造園総合教育を基本方針としています。

3年次からは卒業後の進路（就職する職域や職能）に応じた選択履修が可能のように年次配当されています。履修指導については、各学年の始まりに「ガイダンス」をおこなっています。

表 6-3 履修モデル

コース		【大学院進学・海外留学モデル】	【環境計画・設計系モデル】	【景観建設・技術系モデル】	【ランドスケープ資源・植物系モデル】	公務員系モデル	【教員系モデル】	
開講区分	概要	大学院進学・海外への留学を目指すためのモデル	建設・ランドスケープ・コンサルタント・設計系を目指すためのモデル	造園建設・施設材料の技術者・造園施工系を目指すためのモデル	造園建設・緑化樹木生産の技術者・自然再生緑化コンサルタント系を目指すためのモデル	公務員技術職（造園職・土木職等）を目指すためのモデル	教職（理科・農業）を目指すためのモデル	
	導入科目	データサイエンス基礎（一） データサイエンス基礎（二）	データサイエンス基礎（一） データサイエンス基礎（二）	データサイエンス基礎（一） データサイエンス基礎（二）	データサイエンス基礎（一） データサイエンス基礎（二）	データサイエンス基礎（一） データサイエンス基礎（二）	データサイエンス基礎（一） データサイエンス基礎（二）	スポーツ・レクリエーション（一） スポーツ・レクリエーション（二） 特別講義（一）～（四）
総合教育科目	基礎科目							
	専門科目	特別講義（一）～（四）	特別講義（一）～（四）	特別講義（一）～（四）	特別講義（一）～（四）	特別講義（一）～（四）	特別講義（一）～（四）	
外国語科目	必修科目	キャリアデザイン（一） キャリアデザイン（二）	キャリアデザイン（一） キャリアデザイン（二）	キャリアデザイン（一） キャリアデザイン（二）	キャリアデザイン（一） キャリアデザイン（二）	キャリアデザイン（一） キャリアデザイン（二）	キャリアデザイン（一） キャリアデザイン（二）	
	選択科目	実用英語（一） 実用英語（二） 実用英語（三） 実用英語（四） 中国語（一） 中国語（二） ドイツ語（一） ドイツ語（二） 哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学	実用英語（一） 実用英語（二） 実用英語（三） 実用英語（四） 中国語（一） 中国語（二） ドイツ語（一） ドイツ語（二） 哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学	実用英語（一） 実用英語（二） 実用英語（三） 実用英語（四） 中国語（一） 中国語（二） ドイツ語（一） ドイツ語（二） 哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学	実用英語（一） 実用英語（二） 実用英語（三） 実用英語（四） 中国語（一） 中国語（二） ドイツ語（一） ドイツ語（二） 哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学	実用英語（一） 実用英語（二） 実用英語（三） 実用英語（四） 中国語（一） 中国語（二） ドイツ語（一） ドイツ語（二） 哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学	実用英語（一） 実用英語（二） 実用英語（三） 実用英語（四） 中国語（一） 中国語（二） ドイツ語（一） ドイツ語（二） 哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学	実用英語（一） 実用英語（二） 実用英語（三） 実用英語（四） 中国語（一） 中国語（二） ドイツ語（一） ドイツ語（二） 哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学
学科教育科目	人文科学分野科目	哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学	哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学	哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学	哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学	哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学	哲学・倫理学 歴史学 文学 社会学 経済学	
	社会科学分野科目	社会学 経済学	社会学 経済学	社会学 経済学	社会学 経済学	社会学 経済学	社会学 経済学	社会学 経済学
専門教育科目	自然科学分野科目	生物学 地学 物理学 化学	生物学 地学 物理学 化学	生物学 地学 物理学 化学	生物学 地学 物理学 化学	生物学 地学 物理学 化学	生物学 地学 物理学 化学	生物学 地学 物理学 化学
	専門共通科目	景観論 統計学 日本・森林文化 芝生論 技術者倫理 海外農業農村開発学	景観論 統計学 日本・森林文化 芝生論 技術者倫理 海外農業農村開発学	景観論 統計学 日本・森林文化 芝生論 技術者倫理 海外農業農村開発学	景観論 統計学 日本・森林文化 芝生論 技術者倫理 海外農業農村開発学	景観論 統計学 日本・森林文化 芝生論 技術者倫理 海外農業農村開発学	景観論 統計学 日本・森林文化 芝生論 技術者倫理 海外農業農村開発学	景観論 統計学 日本・森林文化 芝生論 技術者倫理 海外農業農村開発学
特別プログラム	専門基礎科目	CAD・GIS基礎演習	CAD・GIS基礎演習	CAD・GIS基礎演習	CAD・GIS基礎演習	CAD・GIS基礎演習	CAD・GIS基礎演習	
	専門科目	ランドスケープ作品論 ランドスケープデザイン論 ランドスケープ政策論 造園技法論 ランドスケープマネジメント論 観光計画論 都市・農村計画学 緑地の生き物	ランドスケープ作品論 ランドスケープデザイン論 ランドスケープ政策論 造園技法論 ランドスケープマネジメント論 観光計画論 都市・農村計画学 緑地の生き物	ランドスケープ作品論 ランドスケープデザイン論 ランドスケープ政策論 造園技法論 ランドスケープマネジメント論 観光計画論 都市・農村計画学 緑地の生き物	ランドスケープ作品論 ランドスケープデザイン論 ランドスケープ政策論 造園技法論 ランドスケープマネジメント論 観光計画論 都市・農村計画学 緑地の生き物	ランドスケープ作品論 ランドスケープデザイン論 ランドスケープ政策論 造園技法論 ランドスケープマネジメント論 観光計画論 都市・農村計画学 緑地の生き物	ランドスケープ作品論 ランドスケープデザイン論 ランドスケープ政策論 造園技法論 ランドスケープマネジメント論 観光計画論 都市・農村計画学 緑地の生き物	ランドスケープ作品論 ランドスケープデザイン論 ランドスケープ政策論 造園技法論 ランドスケープマネジメント論 観光計画論 都市・農村計画学 緑地の生き物
総合科目	造園計画設計演習	造園計画設計演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン	造園計画設計演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン	造園計画設計演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン	造園計画設計演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン	造園計画設計演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン	造園計画設計演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン	
	総合科目	造園植物・植栽演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン	造園植物・植栽演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン	造園植物・植栽演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン	造園植物・植栽演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン	造園植物・植栽演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン	造園植物・植栽演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン	造園植物・植栽演習 造園施工材料演習 造園植物・植栽演習 専門特化演習（一）地域再生 専門特化演習（二）伝統技法 専門特化演習（三）環境デザイン
※必修科目は含んでいない。ただし、選択必修科目は含んでいる。		インターナショナル・スタディーズ（一）～（三）	インターナショナル・スタディーズ（一）～（三）	インターナショナル・スタディーズ（一）～（三）	インターナショナル・スタディーズ（一）～（三）	インターナショナル・スタディーズ（一）～（三）	※科目選択 ※1ヶ国語選択	

※必修科目は含んでいない。ただし、選択必修科目は含んでいる。

7. 資格取得

当学科で、所定の科目の単位を履修又は卒業することにより、様々な資格を得たり、受験資格を得たり、あるいは、受験までの実務年限を短縮したりすることができます。

7-1 造園施工管理技士、土木施工管理技士について

造園の仕事は、大きくは建設業の中に位置づけられます。

建設業に関係する法律のひとつに、「建設業法」があります。「建設業法」は、「建設業を営む者の資質の向上、建設工事の請負契約の適正化等を図ることによつて、建設工事の適正な施工を確保し、発注者を保護するとともに、建設業の健全な発達を促進し、もつて公共の福祉の増進に寄与すること」を目的としています。

また、「建設業法」第二十七条には、「国土交通大臣は、施工技術の向上を図るため、建設業者の施工する建設工事に従事し又はしようとする者について、政令の定めるところにより、技術検定を行うことができる。」とあります。この条文に基づいて、各種の施工管理技術検定が実施されています。すなわち、各自の「職人として施工を行う技術」ではなく、「設計から施工までの一連の業務を管理監督する技術者としての能力」を検定します。

令和6年度の技術検定より、新しい制度の下で試験が実施されることになります。

造園施工管理技士と土木施工管理技士は、いずれも施工管理技士の資格のうちのひとつで、国土交通省が認定する国家資格です。いずれも一般財団法人 全国建設研修センターが試験を実施しています。

技術検定の検定種目の名称は、「建設業法施行令第第三十四条」に定められており、当学科に関連が強い種目としては、「造園施工管理」と「土木施工管理」があります。

「造園施工管理」については、検定技術として、「造園工事の実施に当たり、その施工計画及び施工図の作成並びに当該工事の工程管理、品質管理、安全管理等工事の施工の管理を適確に行うために必要な技術」について検定を受けます。

造園施工管理技士には、1級と2級とがあります。17歳以上であれば、2級造園施工管理技術検定・第1次検定の受験資格があります。また、19歳以上であれば1級造園施工管理技術検定・第1次検定の受験資格を得られます。「1級造園施工」の資格があれば、「造園工事」の監理技術者として業務ができます。

一方、「土木施工管理」については、検定技術として、「土木一式工事の実施に当たり、その施工計画の作成及び当該工

事の工程管理、品質管理、安全管理等工事の施工の管理を適確に行うために必要な技術」について検定を受けます。

土木施工管理技士にも、造園施工管理技士と同様に1級と2級とがあります。17歳以上であれば、2級土木施工管理技術検定・第1次検定の受験資格があります。また、19歳以上であれば1級土木施工管理技術検定・第1次検定の受験資格を得られます。「1級土木施工」の資格があれば、「土木、とび土工、石工事、鋼構造物、舗装工事、しゅんせつ、塗装工事」の監理技術者として業務ができます。

詳細：一般財団法人 全国建設研修センター

(<https://www.jctc.jp>)

7-2 測量士補の資格取得

有史以来、人間は様々な方法で土地の広さ（面積）や周囲との相対的な高さ（比高）を測量してきました。その結果が、土木工学や地理学等に役立てられています。近年では、地図と様々な空間データを組み合わせた地理情報システム（Geographic Information System; GIS）が発展しています。GISは、都市計画や造園計画にも必須の道具になりつつあります。

また、土地の長さの正確な測定は、面積を算出するうえでも重要です。土地は不動産のひとつでもあり、その財産価値は、面積や立地に影響を受けます。したがって、正しい知識を持った専門家が適切に測量をしなければなりません。

このため、国は「測量法」を定めています。「測量法」の目的のひとつとして、測量の正確さの確保があり、そのため、技術者として測量に従事する者は、登録された測量士又は測量士補でなければならないことが明記されています（第四十八条）。

また、皆さんが造園空間について、設計や施工をする場合、土地の広さ（面積）や周囲との高さの関係について考える必要があります。そこで、当学科では、造園環境情報コースを設置しました。造園環境情報コースとは、測量やGISといった空間情報技術について、より深く学ぶことを目的とするコースです。本コースの全科目の単位を修得した学生は、卒業後に国土交通省 国土地理院に申請することにより、「測量士補」の国家資格を取得できます。

詳細：公益社団法人日本測量協会

(<http://www.jsurvey.jp>)

7-3 樹木医補の資格取得

「樹木医」とは、樹木の診断及び治療、後継樹の保護育成並びに樹木保護に関する知識の普及および指導をおこなう専門家です。民間団体である一般財団法人日本緑化センターが実施する選抜試験に合格した後、樹木医研修を受講して、資格審査に合格すると「樹木医」の資格が得られます。

樹木医補は、「樹木医」の取得を目指して、樹木学・樹病学・森林昆虫学などの基礎的な知識や関連する技術を、所定の大学等で習得した学生を対象に認定される資格です。樹木医補の資格がない場合、樹木医研修を受講するには、樹木の診断や治療等に関する業務経験が「7年以上」必要ですが、樹木医補の資格がある場合、業務経験が「1年以上」あれば受講可能です。

当学科で、対象となる科目の単位を修得し、卒業後に財団法人日本緑化センターに申請すると、樹木医補の資格を取得できます。

詳細：一般財団法人日本緑化センター

(<http://www.jpgreen.or.jp>)

7-4 自然再生士補の資格取得

「自然再生」とは、過去に損なわれた自然環境を取り戻すため、関係行政機関、関係地方公共団体、地域住民、NPO、専門家等の地域の多様な主体が参加して、里山や湿原等の自然環境の保全、再生、創出等を行うことです（※1）。

そして、「自然再生士」とは、自然再生に必要な知識・技術・経験を有する、自然再生の推進者です（※2）。「自然再生士」には、自然再生に係る事業全体を把握し、調査・計画・設計・施工・管理の、各々の事業段階において行われるべき業務や活動において、これに係わる人々をコーディネートするとともに、自ら担当する自然再生を実行できる能力が求められます。

一方、「自然再生士補」とは、自然再生に必要な基礎的な知識を有する、自然再生の推進者です。「自然再生士補」には、「自然再生士」が実行する自然再生業務や活動を補佐できる能力が求められます。

自然再生士補の資格は、当学科で認定科目を履修・修得した者の申請に基づき、一般財団法人日本緑化センターが認定します。自然再生士補の資格がない場合、自然再生士の受験資格である業務経験年数が「3年以上」必要ですが、自然再生士補の資格がある場合、業務経験が「1年以上」で受講可

能です。

詳細：一般財団法人日本緑化センター

(<http://www.jpgreen.or.jp>)

(参考)

※1 自然再生推進法の概要 <http://www.env.go.jp/nature/saisei/law-saisei/gaiyo.html>

※2 自然再生士とは <http://jpgreen.or.jp/saiseishi/p03.html>

7-5 技術士及び技術士補について

技術士制度は、「科学技術に関する技術的専門知識と高等の専門的応用能力及び豊富な実務経験を有し、公益を確保するため、高い技術者倫理を備えた、優れた技術者の育成」を図るための国による資格認定制度（文部科学省所管）です。すなわち、科学技術の応用に携わる技術者にとって最も重要な国家資格です。

「技術士」(Professional Engineer) は、産業経済、社会生活の科学技術に関する全ての分野（21の技術部門）をほぼカバーし、先進的な活動から身近な生活にまで関わっています。

技術士とは、「法定の登録を受け、技術士の名称を用いて、科学技術に関する高等の専門的応用能力を必要とする事項についての計画、研究、設計、分析、試験、評価又はこれらに関する指導の業務をおこなう者」です。

また、技術士補（Associate Professional Engineer）とは、「技術士となるのに必要な技能を修習するため、法第32定の登録を受け、技術士補の名称を用いて、技術士の業務について技術士を補助する者」です。

技術士補になる方法としては、(1) 指定された教育課程を修了する、または、(2) 技術士第一次試験に合格する方法、のふたつがあります。当学科は、指定された教育課程ですので、学生の皆さんは、在学中に「造園 JABEE コース」を選択したうえで、所定の単位を修得し修了すると、「修習技術者」になることができます。「修習技術者」になった後、4又は7年の実務経験を経ると、技術者第二次試験の受験資格を得られます。合格後に登録すれば技術士になれます。

詳細：<http://www.engineer.or.jp> および

<http://www.mext.go.jp> を一部改変)

7-6 登録ランドスケープアーキテクトおよび RLA 補

登録ランドスケープアーキテクト（Registered Landscape Architect; RLA）とは、「現在及び将来に亘る人々の安全・環境・健康・文化・福祉に対する責任を自覚し、地球環境時代における美しい都市と地域づくりを担うランドスケープアーキテクチャ業務を遂行するに必要な一定水準の知識・技術・能力を持つ者」のことで、具体的なことは、次のような職能がイメージされます。

- 自然環境の保全を目標に緑・水・土などの自然要素を「命ある素材」として効果的に扱うデザイン
- 快適さを指向する環境空間やレクリエーションの場のデザイン
- 生態学的原理を土地利用計画に応用し、生態系の構造と機能を活かした環境のプランニング、およびこれに続くデザイン
- 地域の歴史文化に根ざした空間デザイン
- 市民・住民参加によるコミュニティ環境のデザイン

RLA の取得は、以下の 4 つの段階より構成されます

- ① 専門教育：大学等専門教育機関での教育
- ② 実務訓練（On The Job Training; OJT）：就職してか

らの訓練

- ③ 認定試験：択一試験、実技試験
- ④ 継続教育（Continuing Professional Development; CPD）：造園 CPD 制度への参加

当学科は「RLA」受験の指定学科ですので、大学卒業後 3 年以上の実務経験があれば受験ができます。

一方、RLA 補（Registered Landscape Architect Basic）とは、「RLA 補は RLA が実施する業務を補助できる知識と能力を持つ者」であり、経験少ない若い技術者や学生を対象として認定するものです。「RLA 補」の資格制度試験に合格すると、「RLA」の受験に必要な実務経験年数が、2 年に短縮されます。したがって、在学中の受験をお勧めします。なお、本学科は指定学科に認定されているため、卒業後に CLA へ申請することで「RLA 補」となることができます。

詳細につきましては、（一社）ランドスケープコンサルタンツ協会の HP 等を参照して下さい。

詳細：（一社）ランドスケープコンサルタンツ協会（CLA）

<https://www.cla.or.jp/rla/>

（一社）ランドスケープアーキテクト連盟

<http://www.jlau.or.jp>

●樹木医補

講義科目:6分野 14 単位以上、実験・実習科目:4 分野 4 科目以上を履修し、単位を取得すること。

分野別科目対応表

		造園科学科	
		講義科目	実験・実習科目
分野別	樹木の分類	造園樹木学② 造園植物基礎②	造園植物基礎演習②
	樹木の生態・生理	緑地生態学②	専門特化演習(一)(植物学)④
	立地・土壌	造園植栽学② 植栽基盤論②	専門特化演習(二)(植栽基盤)④
	植物病理	樹木の保護と管理②	
	昆虫・動物	緑地の生きもの②	
	樹木医学		
	農薬科学		
	造園学	造園科学概論② 風景地計画学②	造園計画設計演習④ 造園施工材料演習④
	樹木医補総合		造園植物・植栽演習④

注 1. 樹木医学研究に係る「卒業研究」は、内容に該当する分野の実験・実習科目の1科目とすることができる。

注 2. 表中の科目名後の丸囲み数字は単位数を示す。

●測量士補：東京農業大学地域環境科学部造園科学科 造園環境情報コース

以下すべての科目の単位を取得することにより、卒業後に測量士補の申請が可能。

(必修科目)

(選択科目・選択必修科目)

科 目	単 位	開講期	科 目	単 位	開講期
情報基礎(二)	2	1L	地学	2	1F
造園工学基礎演習	2	1L	物理学	2	1L
測量実習	2	2F	統計学	2	2F
測量学	2	2F	ランドスケープ政策論	2	2L
造園計画学	2	2F	空間情報学	2	2L
都市緑地計画学	2	3F	自然保護論	2	3F
風景地計画学	2	3F	造園計画設計演習	4	3F
植栽基盤論	2	3F	都市・農村計画学	2	3L
造園工学	2	3F	専門特化演習(二)(エンジニア)	4	4F

●自然再生士補

実験・実習（演習）、講義分野に関係なく、6科目以上12単位以上を履修し、単位を取得すること。

実験・実習（演習）分野		講義分野	
指定分野	科目	指定分野	科目
①自然環境調査と分析、評価に係る実習・演習		①自然再生・自然環境概論	・自然保護論
②動・植物同定調査に係る実習・演習（森林動物学実習、森林昆虫学実習を含む）	・造園植物基礎演習 ・専門特化演習（一）（植物学）	②自然再生・自然環境保全に係る計画（設計）学	・造園計画学 ・風景地計画学 ・都市緑地計画学
③地域環境資源調査に係る実習・演習	・共通演習	③自然再生・自然環境保全に係わる施工計画・施工学	・造園工学 ・造園施工論 ・造園植栽学
④自然環境保全活動に係る実習・演習	・専門特化演習（一）（地域再生）	④自然再生・自然環境保全に係わる維持管理計画・管理学	・樹木の保護と管理 ・ランドスケープマネジメント論
⑤生態学実習・演習	・造園植物・植栽演習 ・専門特化演習（二）（植栽基盤）	⑤植物（草本類、木本類、水生植物等）分類・生態・生理学	・造園植物基礎 ・造園樹木学 ・グラウンドカバープランツ
⑥プレゼンテーション・コーディネート能力育成に係る実習	・造園計画設計演習	⑥動物（哺乳類、は虫類、両生類、昆虫、鳥類、魚類等）分類・生態・生理学	・緑地の生きもの
特別講義		⑦環境リスクマネジメント学	
		⑧環境経済学	
		⑨環境社会学	
		⑩地域環境学・地域生態論	・緑地生態学
		⑪環境関連法規	・技術者倫理

8. 造園科学科の技術者教育と JABEE

8-1 JABEE の目的と造園科学科の教育カリキュラム

JABEE とは、Japan Accreditation Board for Engineering Education（一般社団法人 日本技術者教育認定機構：<https://www.jabee.org/>）の略称で、通称「ジャビー」と呼ばれ、わが国を代表する技術者教育認定団体として、大学や学協会・関連各省と密接に連携しながら、技術者教育プログラムを審査・認定する非政府団体です。

JABEE の目的は、大学の技術者教育プログラムを統一的基準に基づいて審査・認定をおこない、高等教育機関でおこなわれている技術者教育プログラムの品質が満足すべきレベルであること、そして、その教育成果が技術者として活動するために必要な最低限度の知識や能力の養成に成功していることを認定することです。

また、各教育機関に独自の教育理念と教育目標の公開を要請し、新しい教育プログラムや教育手法の開発を促進し、日本や世界で必要とされる多様な能力を持つ技術者の育成を支援することです。

造園科学科のカリキュラムは、JABEE の技術者教育プログラムに認定されています。JABEE 認定を受けるためには、「造園科学コース」（以下、造園 JABEE コースという）を取得することになります。そのためには、入学後、造園 JABEE コースを選択し、所定の科目の単位を必ず取得しなければなりません（2021 年度入学生より選択制を実施）。造園 JABEE コースは、国際水準を意識した技術者教育に向けて、時代と社会の要請に応じた学習・教育目標の設定と造園学の本質を据えた体系的なカリキュラム編成、さらにその成果の達成を実感できる教育システムとなっています。造園 JABEE コースのプログラム修了者は「技術士」国家試験の第 1 次試験が免除となり、第 2 次試験までに必要な実務経験も 7 年から 4 年に短縮されます。

8-2 JABEE 認定と技術者の資格

造園 JABEE コースのプログラム修了者は、「修習技術者」の資格を持つことになり、技術者として会社で活躍するための第一歩になります。

技術者の資格として「技術士」がありますが、これは科学技術に関する高度な応用能力を備えている「技術士法」に基づいて試験により認定するものです。

修習技術者は、（公社）日本技術士会（<https://www.engineer.or.jp/>）に技術士補登録をおこなうことにより、技術士補を称することができます。

なお、技術士および技術士補は、技術者倫理を十分に守っ

て業務をおこなうよう課されています。

また、JABEE は、ワシントン協定に加盟しており、認定されたプログラムの修了者が、技術者として国際的に活躍できる知識と能力をもつことを意味しています。

ワシントン協定（Washington Accord）とは、技術者教育の実質的同等性を相互承認するための国際協定で、1989 年に締結されたものです。2022 年現在、日本、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、アイルランド、ニュージーランド、香港、南アフリカ、シンガポール、韓国、台湾、マレーシア、トルコ、ロシア、インド、スリランカ、中国、パキスタン、ペルー、コスタリカ、バングラディッシュ、フィリピン、メキシコ、インドネシアの 25 団体が加盟し、チリ、タイ、ミャンマー、サウジアラビア、ナイジェリア、モーリシャスの 6 団体の暫定加盟が認められています。

8-3 「技術士」の資格取得までの仕組み

技術士は、「技術士法」に基づいた国家試験に合格して、（公社）日本技術士会に登録した人に与えられる称号です。

JABEE に認定されたプログラム修了者、すなわち修習技術者は、この資格試験の第一次試験が免除となり、第二次試験までに必要な実務経験期間も短縮されます。具体的には、（1）技術士補に登録し、技術士補として通算 4 年以上、技術士を補助することによって、もしくは（2）技術士補となる資格を有した日から、通算 4 年以上、科学技術に関する専門的応用能力を必要とする事項についての計画、研究、設計、分析、評価又はこれらに関する指導の業務をおこなう者の監督のもとに当該業務に従事することによって、第二次試験を受験することができます。また、大学院での研究経歴がある者は、2 年間を限度として、期間を短縮することができます。

第二次試験は、建設部門、環境部門、農業部門、森林部門、総合技術監理部門など 21 の技術部門ごとに、当該技術部門の技術士となるのに必要な専門的学識及び高等の専門的応用能力が問われます。（総合技術監理部門第二次試験を受験する場合は、7 年間以上の実務経験が必要になります。）

本学科の造園 JABEE プログラム修了者は、建設部門あるいは環境部門を受験することが多く、第二次試験の選択科目についても、前者では「都市及び地方計画」、後者では「自然環境保全」を選択することが多いです。なお、第一次試験の免除は部門とは関係なく、いずれの技術部門の第二次試験も受験することができます。

<参考資料>

■技術士倫理要綱

((公社) 日本技術士会 / 昭和 36 年 3 月 14 日理事会制定・平成 11 年 3 月 9 日理事会変更承認・平成 23 年 3 月 17 日理事会変更承認)

【前文】

技術士は、科学技術が社会や環境に重大な影響を与えることを十分に認識し、業務の履行を通して持続可能な社会の実現に貢献する。

技術士は、その使命を全うするため、技術士としての品位の向上に努め、技術の研鑽に励み、国際的な視野に立つてこの倫理綱領を遵守し、公正・誠実に行動する。

【基本綱領】

(公衆の利益の優先)

1. 技術士は、公衆の安全、健康及び福利を最優先に考慮する。

(持続可能性の確保)

2. 技術士は、地球環境の保全等、将来世代にわたる社会の持続可能性の確保に努める。

(有能性の重視)

3. 技術士は、自分の力量が及ぶ範囲の業務を行い、確信のない業務には携わらない。

(真実性の確保)

4. 技術士は、報告、説明又は発表を、客観的でかつ事実に基づいた情報を用いて行う。

(公正かつ誠実な履行)

5. 技術士は、公正な分析と判断に基づき、託された業務を誠実に履行する。

(秘密の保持)

6. 技術士は、業務上知り得た秘密を、正当な理由がなく他に漏らしたり、転用したりしない。

(信用の保持)

7. 技術士は、品位を保持し、欺瞞的な行為、不当な報酬の授受等、信用を失うような行為をしない。

(相互の協力)

8. 技術士は、相互に信頼し、相手の立場を尊重して協力するように努める。

(法規の遵守等)

9. 技術士は、業務の対象となる地域の法規を遵守し、文化的価値を尊重する。

(継続研鑽)

10. 技術士は、常に専門技術の力量並びに技術と社会が接する領域の知識を高めるとともに、人材育成に努める。

9. 造園科学の国際化

9-1 国際的活動

2019年度まで積極的におこなってきた造園科学科の国際化もCOVID-19の影響により一時的に止まりました。しかし、今後造園学分野においても国際化を進め、多様な視野をもたなければ多くの社会問題に対処できなくなってしまいます。そのためには、私達造園家も日々の研鑽を積まなければなりません。そもそも現造園科学科を開校した上原敬二が、国際的に捉えた造園学を日本に導入し、その教育体制が前身の東京高等造園学校になりました。

国際的活動の中で、忘れることのできないのが戸野琢磨先生です（1891-1985）。本学の前身の東京高等造園学校から講師に就任し、1953年から1969年まで教鞭をとった戸野琢磨先生（1958年に教授に就任）は、北海道帝国大学農学部を1916年に卒業後、コーネル大学のランドスケープ学科に進学、1921年には修士号 Master in Landscape Design (M.L.D.) を修了しました。帰国後、東京市公園課嘱託、早稲田大学建築科講師の後、1924（大正13）年1月8日にわが国最初の造園建築設計事務所を開設しました。当時としては斬新な海外からの造園情報を次々と取り入れつつ、「日本の国土と自然をより良く、美しくすることが造園科の使命」としていたわけです（鈴木誠 1997 戸野琢磨：日本の“ランドスケープ・アーキテクト”第1号、日本造園学会誌 60（4）、291-294）。なおアメリカにおける戦後の日本文化（日本庭園や盆栽等）への関心の高さについては、戸野琢磨（1962）（アメリカにおける日本庭園、国際交流への契機 造園雑誌 26（2-3）、27-30）に記されている通りです。

本学は、アジアに位置することもあって歴史的にも特にアジアでの大学との関係を強めてきました。しかし、今やアジアだけではありません。造園の歴史が長い北米を始め、南米、ヨーロッパ等の大学とも連携を図っています。

国際化への活動の一環として、IFLA（International Federation of Landscape Architects）にも積極的に参加してきました。また、学科内でもカリキュラムの中で様々なイベントをおこなってきました。2013年3月には、本学と Istanbul Technical University（トルコ）とで Cultural

landscapes のためのワークショップを本学で開催し、学生は文化的遺産を保全するための案やモデル、計画を策定しました。同年12月には北京林業大学園林学部と学部間協定を結び、毎年、学部生や大学院生の相互の授業への出席、研究プロジェクトの実施等の交流を続けています。

2013年、2014年には台湾東海大学園林学部が来日、その後、教員を招聘し、さらに本学大学院にも在籍した学生もみられました。2020年2月にはオスナブリュック応用科学大学の学生約15名が来日し、共同開講授業をおこなって、その後海外協定校として締結しました。

2018、2019年にはアメリカニューヨーク州のホフストラ大学の学部生を受け入れると共に、非常勤講師の Patricia Welch 教授に能や落語、下町に関する日本の文化（特に東京学）に関わる講義について大学院生を対象におこないました。また、2021年にはアメリカポートランド市役所環境局の専門官を受け入れたりもしています。

本学造園科学科からは、Michigan State University、USA; University of British Columbia、Writtle College、UK; Institut Polytechnique LaSalle Beauvais、FRANCE; School of Plant Biology、The University of Western Australia、AUSTRALIA; Kunming Institute of Botany、CHINA; The Portland Japanese Garden with The Japanese Garden Society of Oregon、USA; Department of Landscape Architecture、Michigan State University、USA; 国立台湾師範大学芸術学院美術学系、台湾等へ教員が留学しています。

9-2 海外協定校

大学間協定、学部間協定を含め、現在の造園学関係の海外協定校を、表9-1に示します。多くの海外協定校で造園学を学ぶ専門組織があります。また共同研究をおこなったり、留学生を受け入れたり、卒業生が教員を務めたりしています。

フィリピン大学ロスバニオ校、北京林業大学、上海交通大学、チャピング自治大学には卒業生が教員として活躍しています。また、国立慶北大学、台湾東海大学、オスナブリュック応用科学大学とは共同研究などを進め、ミシガン州立大学、西オーストラリア大学には教員、学生も留学しています。

表 9-1 大学間協定, 学部間協定の海外協定校

大 学 名	国名	協定締結年
ミシガン州立大学	アメリカ	1966 年
カセサート大学	タイ	1988 年
ブリティッシュコロンビア大学	カナダ	1988 年
中国農業大学	中華人民共和国	1988 年
国立中興大学	台湾	1992 年
IPB 大学 (旧ボゴール農科大学)	インドネシア	1996 年
ラ・モリーナ国立農業大学	ペルー	1996 年
モンゴル生命科学大学 (旧 モンゴル国立農業大学)	モンゴル	1996 年
フィリピン大学ロスバニオス校	フィリピン	1996 年
国立慶北大学	大韓民国	1998 年
ヘブライ大学	イスラエル	1998 年
ベトナム国立農業大学 (旧 ハノイ農業大学)	ベトナム	1998 年
サンパウロ大学	ブラジル	2001 年
チャピngo自治大学	メキシコ	2001 年
ウクライナ国立生命環境科学大学	ウクライナ	2003 年
マレーシアプトラ大学	マレーシア	2004 年
リール農業高等学院	フランス	2004 年
アンジェ農業高等学院	フランス	2004 年
ロース・アルプス農業栄養高等学院	フランス	2004 年
プルパン技術学院	フランス	2004 年
ワーヘニンゲン大学	オランダ	2004 年
ボーベ・ラサール・ポリテクニック学院	フランス	2007 年
ソコイネ農業大学	タンザニア	2009 年
王立農業大学	カンボジア	2011 年
アマゾニア農業大学	ブラジル	2013 年
レディング大学	イギリス	2013 年
ジブチ大学	ジブチ	2013 年
ラオス国立大学	ラオス	2014 年
ペラデニア大学	スリランカ	2014 年

タマサート大学 科学技術学部	タイ	2014 年
イエジン農科大学	ミャンマー	2015 年
上海交通大学	中華人民共和国	2015 年
西オーストラリア大学	オーストラリア	2015 年
国立江原大学	大韓民国	2016
ハイランズ・アンド・アイランズ大学	イギリス	2017
極東連邦大学	ロシア	2017
ハリヤナ農業大学	インド	2017
カリフォルニア大学デイビス	アメリカ	2018
オンドクズ マユス大学	トルコ	2018
ネパール農林業大学	ネパール	2019
西シドニー大学	オーストラリア	2019
ジョモケニヤッタ農工大学	ケニア	2020
東サラエボ大学	ボスニア・ヘルツェゴビナ	2020

学部間協定

北京林業大学 園林学院	中華人民共和国	2013 年
東海大学創意設計・芸術学院景観学系	中華民国	2016 年
オスナブリュック応用科学大学	ドイツ	2021 年

10. 大学院 造園学専攻

10-1 造園学専攻の経緯

東京農業大学の大学院は、1953年（昭和28）開設の農学研究科修士課程農学専攻および農業経済学専攻がはじまりでした。その後、各分野の大学院が順次開設され、現在では農大の全教育分野において開設されております。造園学に関する大学院レベルの教育は、1974年（昭和49）に農学専攻に造園関連の講義科目が加わったのがはじまりです。

その後、急速な都市化傾向と急激な環境変化がもたらす諸問題の解決には、造園に関する一層の充実と新たな応用分野の研究の蓄積、そしてそれを踏まえた専門知識と高度な技術教育が必要とされ、1990年度（平成2）に造園学のみで完結したカリキュラムをもつ大学院造園学専攻の修士課程（現在の博士前期課程）が開設され、さらに2002年度（平成14）には造園学専攻の博士課程（博士後期課程）が増設されました。

10-2 造園学専攻のカリキュラム

学部の勉強を終了した後、より学びを深めたいという学生は、まず大学院造園学専攻博士前期課程（2年間）に進むことになり、修了後さらに専門的な造園学研究を進めるには博

士後期課程（3年間）へ進学する道があります。大学院造園学専攻博士前期課程は、造園計画・設計学、造園植物・植栽学、造園施設材料・施工学の3本柱を設けて教育研究をおこない、それぞれの柱にかかわる講義、演習・実験科目の他、造園学演習Ⅰ～Ⅳや造園調査法特論が準備されています。また、博士後期課程は、造園計画学、造園植物学、造園施設材料学の各領域から、技術的研究開発能力、情報技術を視野に入れた分析・統合型調査解析能力、創造的計画処理能力の三面での教育研究をおこないます。

大学院への入学試験は、例年7月（1期）と1月（2期）の2回実施されますので、希望者は指導教授と相談することはもちろん、早めに意思決定をして準備を進めるとともに、公開形式で行われる修士論文発表会（年間2～3回開かれています）に参加してみることをおすすめします。

なお、上記の日程や大学院造園学専攻主催の各種公開ゼミ、講演会の案内については、サイエンスポート3階N314レクチャールーム前掲示板や、大学院造園学専攻のホームページにて確認して下さい。

造園学専攻ホームページ URL：

<https://www.nodai.ac.jp/academics/reg/land/original/graduate/japanese/>

表 10-1 造園学専攻の開講科目の一覧

博士前期課程		
科目名	英名	必修/選択
造園学特別演習Ⅰ	Special Seminar of Landscape Architecture Ⅰ	必修
造園学特別演習Ⅱ	Special Seminar of Landscape Architecture Ⅱ	必修
造園学特別演習Ⅲ	Special Seminar of Landscape Architecture Ⅲ	必修
造園学特別演習Ⅳ	Special Seminar of Landscape Architecture Ⅳ	必修
研究倫理特講	Research Ethics	必修
論文英語	Thesis English	必修
造園調査法詳論	Field Work and Research for Landscape Architecture	選択必修
造園調査法詳論演習	Seminar for Field Work and Research for Landscape Architecture	選択必修
日本庭園詳論	Japanese Garden Theory	選択必修
観光計画詳論	Tourism and Leisure Recreation	選択必修
ランドスケープマネジメント詳論	Landscape Management	選択必修
ランドスケープデザイン詳論	Landscape Design	選択必修
樹芸詳論	Arboriculture	選択必修
芝生詳論	Turf Science	選択必修
ランドスケープ空間情報詳論	Landscape Geoinformatics	選択必修
造園計画・設計学特論	Planning and Design for Landscape Architecture	必修
造園植物・植栽学特論	Plants and Planting Theory for Landscape Architecture	必修
造園施設材料・施工学特論	Facilities, Materials and Professional Gardening Methods for Landscape Architecture	必修
博士後期課程		
科目名	英名	必修/選択
特別研究指導Ⅰ	Lecture of Special Research Ⅰ	必修
特別研究指導Ⅱ	Lecture of Special Research Ⅱ	必修
特別研究指導Ⅲ	Lecture of Special Research Ⅲ	必修
論文英語作成	Thesis English for writing	必修
造園計画学後期特論	Advanced Planning of Landscape Architecture	選択必修
造園設計学後期特論	Advanced Design of Landscape Architecture	選択必修
造園植物学後期特論	Advanced Plants Theory of Landscape Architecture	選択必修
造園植栽学後期特論	Advanced Planting Theory of Landscape Architecture	選択必修
造園施設材料学後期特論	Advanced Facilities and Materials for Landscape Architecture	選択必修
造園施工学後期特論	Advanced Landscaping Methods	選択必修

10-3 MLA アワード受賞者と受賞論文題目

造園学専攻では、毎年度の優れた修士論文に対して MLA アワード (Master of Landscape Architecture Award) の授

与をおこなっております。各年度の受賞者と論文題目は以下の通りです。

受賞回	修了年度	受賞者	論文題目
第20回	2023	市川 天音	江戸東京に造営された旧加賀藩前田家庭園の石材利用に関する研究
第19回	2022	館川 龍希	3次元点群データを用いた定量指標の適用性と心理分析による景観の把握に関する研究
第18回	2021	古賀 大誠 田中 亮平 松永 佳子	TLS点群データを用いた戦災樹木に対する焼焦げの定量化手法と被災推定へ応用 横浜市大岡川上流域における土地被覆と雨水流出抑制を軸にしたグリーンインフラ形成に関する研究 スダジイとツブラジイの滞水耐性に関する研究
第17回	2020	金子 将太 長谷川彩季	初期田園墓地の空間構成解析による田園墓地設計手法の体系化に向けた基礎的研究 地上および空中撮影による近赤外画像を用いた樹木の衰退度診断への応用
第16回	2019	丸橋佳緒里	スダジイの生育に及ぼす土壌の化学性
第15回	2018	奥泉 由有	安行の植木生産業における文化的景観の景観構造の解明
第14回	2017	趙 啓蒙	中国に造られた日本庭園の管理運営と利活用に関する調査研究
第13回	2016	杉浦総一郎	コウライシバ (<i>Zoysia mattrella</i> Merr.) の塩分適応性に関する実験的研究
第12回	2015	中島 宏昭	二次林におけるアズマネザサの刈り取りがヤブラン垂科3種の生育及び開花に与える影響
第11回	2014	小林 成彦	静岡県引佐町久留米木の棚田における維持管理と権利の関係
第10回	2013	祁 吉強	主要緑化用芝草による放射性物質の吸収除去能の解明に関する実験的研究
第9回	2012	七澤 寛	多彩な花空間における誘致昆虫相の実態とその要因 ー晴海アイランド・トリトンスクエア・ガーデンを事例としてー
第8回	2011	石川 有生 正田実知彦	杉村楚人冠邸白馬城における庭について 渋沢栄一の造営した嘸依村荘庭園の特徴と近代庭園史上における位置づけ
第7回	2010	田留 健介	サクラてんぐ巣病の発生生態に関する疫学的研究
第6回	2009	清田 陽助	密植造成された常緑広葉樹林の樹林管理によるキンラン属の動態に関する研究
第5回	2008	岡本 桂子	緑の市民活動団体の活動成熟要因に関する研究
第4回	2007	佐藤 文	トールフェスク (<i>Festuca arundinacea</i> Schreb.) による土壌中Cdの吸収除去に関する研究
第3回	2006	高久 薫	東京の向島地域の変遷と地域特性をふまえたランドスケープ遺産に関する研究
第2回	2005	郷倉 久徳	有用在来種の生育域内に関する生態学的研究ー国営昭和記念公園を事例としてー
第1回	2004	出店 暁美	短歌にみる日本人の景観に対する意識構造の研究

11. 特別教育プログラム

造園科学科では、特定の目的をもつ学生のための特別教育プログラムを設けています。

11-1 公務員志望者のためのプログラム

公園緑地行政や自然保護行政、道路、河川行政などの造園（土木）系公務員を目指す学生のために、公務員採用試験対策を目的とした「公務員試験対策講座」と卒業生を中心とした現役公務員の方から行政の仕事内容を伺う「公務員セミナー」を実施しています。

対象には国家公務員（国土交通省、環境省、農林水産省等）、地方公務員（都道府県、市区町村等）のほか、独立行政法人（都市再生機構等）や公益法人（公園協会等の外郭団体等）なども含まれます。採用試験の日程は、国家公務員（1次試験）が3月、地方公務員が4月から始まります。

実施方法としては、試験日程を考慮して12月～2月頃にガイダンスをおこない、公務員の仕事内容や全国の採用試験情報、講座の実施方法、各自の志望先に応じた勉強方法を検討するほか、2月頃には担当教員が専門分野別試験対策講座をおこなっています。更に、卒業生を中心に国をはじめ地方自治体の造園系担当者や試験合格者を招き、様々な役所の仕事内容や採用試験の体験談、面接アドバイス等を聞くセミナーを実施しています。

なお、基本的には2・3年生を対象としていますが、他学年生も受講できるよう、その他、学生の希望に柔軟に対応できるようにしています。



11-2 造園系業界研究会

造園関係の建設業、コンサルタント業、施工業、生産業などの関連業界 20 社程度の担当者の方から業界の内容を説明してもらい、造園系業界への意識・意欲を学生に高めてもらうことを目的としたプログラムを学科全体や研究室を主体に実施しています。

時には世界の植木情報を活用したナーセリーや施工現場などを訪れ、取り組み状況について学ぶような見学会が実施される場合もあります。

11-3 造園伝統技術の継承と開発のための国際的教育活動

本プログラムは、造園科学科 100 周年を記念し、卒業生から寄附金によって運営されています。

上原敬二の『造園学汎論』序と本校教授要項に書かれた通り、本学科は「学」と「術」を並行するように研究教育を展開しています。日本の伝統的な造園技術の中には、自然と風土に適応し、土地・植物・素材を活用し、柔軟なデザインによって素晴らしい造園空間を作り上げる先人の知恵がたくさん存在しています。

大学4年間の講義や演習・実習によって造園学の基礎を習得した上、より高度な造園技術を身に付け、日本独自の造園伝統技術の継承と発展を目指す学生のために、毎年5回程実施しています。造園の現場で活躍している卒業生や技術者を講師として招き、剪定技術や、竹垣の材料づくりと製作、移植技術、インターロッキングブロックを用いた舗装工などをそれぞれ1～2日に集中して行います。

また、このプログラムには社会人や留学生も参加し、様々な人と交流しながら日本の造園伝統技術を学びます。

プログラムの詳細は随時学科や(株)農大サポートのホームページ、授業内で案内します。

12. 造園の職能と卒業生の活躍

表 12-1 東京農薬大学「造園大賞」の一覧

■東京農薬大学「造園大賞」授賞規定（抜粋）

第1条 東京農薬大学地域環境科学部造園科学科（以下造園科学科という）は、造園科学科と造園学の発展をはかるため、「造園大賞」を設定する。

第2条 「造園大賞」は、造園に関して特に優秀な業績をあげ、社会に寄与した者に贈呈する。

第3条 「造園大賞」を授与される者（以下受賞者という）を選考するため、造園大賞選考委員会（以下委員会という）を設ける。

第6条 「造園大賞」は、表彰状及び賞牌とし、東京農薬大学の認定を経て、造園科学科長が贈呈する。

付則

1. 本規程は、平成10年4月1日から施行する。

2. 東京農薬大学「造園大賞」授賞規程（昭和45年4月1日制定 昭和47年12月1日改正）は、廃止する。

第1回 昭和45（1969）年

武蔵丘陵森林公園基本計画（平井昌信）

第2回 昭和49（1974）年

造園技術に関する社会通信教育の業績（阿部勉）

都市と自然に関する一連の作品（浦井雅之）

第3回 昭和51（1976）年

造園樹木に関する諸研究（中村恒雄）

児童公園に関する調査研究（本田三郎）

第4回 昭和52（1977）年

丸亀市民広場の設計他一連の造園設計（小林治人）

第5回 昭和53（1978）年

池袋再開発事業人工地整の造園作品及びワシントン、シアトル等一連の海外における造園作品について（荒木芳邦）

第6回 昭和55（1980）年

静岡市城北公園・関東学院大学構内修景その他一連の作品について（野沢清・鈴木崇）

観光的視点からみた街づくり運動に関する一連の活動並びに著作について（猪爪範子）

韓国における新技術による作品及び工法の開発について（今中征治）

第7回 昭和56（1981）年

カウラ市日本庭園、朝日新聞社本社植栽設計等その他一連の作品（中島健）

ジュロン日本庭園・霞ヶ城公園等その他一連の作品（中根金作）

第8回 昭和57（1982）年

南山城総合運動公園、青葉山ろく公園その他一連の設計作品（井上卓之）

大田黒公園並びに西川緑道公園など一連の設計作品（伊藤邦衛）

瀬田パークアベニュー外構設計作品（上田耕治）

第9回 昭和58（1983）年

札幌における作庭を中心とする一連の活動（岸村茂雄）

自然保護思想を背景とした愛鳥運動に関する一連の活動と著作（柳澤紀実）

第10回 昭和59（1984）年

岡山県の庭園ならびに岡山後楽園に関しての一連の著作（山本利幸）

自然保護思想に基づく植物写真に関する一連の作品・著書（姉崎一馬）

地域計画のための風力資源解析に関する先駆的試み、並びにアメリカ合衆国における教育・研究活動（太田和亨）

第11回 昭和60（1985）年

緑のまちづくりに関する住民活動の主導と推進についての貢献（毛塚宏）

学校緑化活動の推進・指導に関する貢献（佐々木仁）

第12回 昭和61（1986）年

農業高校造園科教員としての教育・研究等一連の活動（永松義博）

八女地方における郷土保全並びに地域振興にかかわる一連の活動（大石道義）

第13回 昭和62（1987）年

国際花と緑の博覧会の誘致など造園建設業の発展と近代化に対する貢献（和田貞次）

西河原公園、服部緑地など水景を導入した公園設計作品（井上芳治）

第14回 昭和63（1988）年

青空こども会の育成に関する実践的活動に対して（銅柄一児）

郷土に生息する生物の生態行動調査研究を通じての自然環境保護活動（長田健）

北海道における環境林造成計画に関する基礎的研究（沢城浩）

一連の造園デザイン活動にみられる発想の風土性と意匠の創意性（渡辺俊雄）

第15回 平成元（1989）年

高速道路造園における斬新な発想による事業展開（大泉紀男）

船橋市ワンパク王国の計画・設計における新しい試み（黛卓郎）

諏訪湖畔公園、別府市新庁舎広場など一連の作品（戸田芳樹）

第16回 平成2（1990）年

木製公園施設等の事業展開による造園界への貢献（島田昭治）

造園植栽計画・設計に関する一連の活動（山本紀久）

第18回 平成4（1992）年

クライストチャーチ市におけるガーデンライフのレクリエーション的研究、並びにその啓発的活動（杉尾邦江）

第19回 平成5（1993）年

都市における建築物緑化および自然復元技術の開発と普及に関する一連の業績（藤田茂）

大川端ニューアーバンオアシス（三井倉庫箱崎ビル）の環境設計など一連の作品（小林忠夫）

第20回 平成6（1994）年

鎌倉霊園、横浜・八景島シーパラダイス等造園関連事業の企画・推進に関する一連の業績（黒田昭）

第21回 平成7（1995）年

都市緑化用樹木の栽培技術の向上と啓蒙に関する一連の業績（小池英憲）

多摩中央公園の基本構想から実施設計に至る貢献（藤原清）

平安建都1200年記念梅小路日本庭園の作庭（井上剛宏）

第22回 平成8（1996）年

板橋サンシティ、横浜海の公園半島部など自然共存型環境デザインによる一連の作品（有賀一郎）

我国における古代年輪学の確立とその造園学的手法への展開（光谷拓美）

くまもとを舞台としたランドスケープ・アーキテクトとしての先駆的活動（平嶋孝）

第23回 平成9（1997）年

上野動物園一部改設計にみられる修景植栽技量（石井英美）

利賀村の観光による地域づくりへのランドスケープ・プランナーとしての関与（古賀学）

緑化用植物の生産技術の開発及び普及への貢献（村越匡芳）

第24回 平成10（1998）年

（財）セラードの館（ブラジリア市）・日本庭園ほか海外における一連の造園活動（園田穠）

「国営昭和記念公園・日本庭園」に代表される一連の造園設計監理（神原八朗）

ランドスケープ思想が風景へと繋がった一連の環境設計作品（中谷耿一郎）

『花太郎の花現場』にみられるランドスケープ表現の新展開（保坂桂一）

第25回 平成11（1999）年

伝統的技術を生かした造園設計及び設計管理（川村善之）

<花遊庭>の展開を軸とした新しい造園建設業の試み（天野勝美）

環境経済アセスメントの啓発と実践（長谷川弘）

第26回 平成12（2000）年

企業イメージの確立に至る先駆的経営展開（佐藤四郎）

ふくしま県民の森＜フォレストパークあだたら オートキャンプ場の構想から開業までのコンサルティング＞に対して（大隈一志）

第27回 平成13（2001）年

河川環境の保全と整備に係わる造園家としての活動とその業績（山道省三）

New Peace Bell Garden の設計（阿部紳一郎）

「花園フラワーション」開催を通じての造園の普及・啓蒙に対する業績（富田重直）

竜神広場など地域性を生かした脇野沢漁港の環境設計（地福由紀）

第28回 平成14（2002）年

横浜みなとみらい21における「汽車道」のランドスケープ・デザイン（祐乗坊進）

循環型社会形成にむけた自治体支援のコンサルタント活動（戸村信夫）

新治村の農村景観づくりの計画策定と普及・啓蒙に対して（南賢二）

「石の美術館・STONEPLAZA」による地域活性化と地場産石材活用についての貢献（白井伸雄）

第29回 平成15（2003）年

造園における「現代の名工」としての評価と技能の向上に関する貢献（小林洋）

チェルシーフラワーショウ出品の「A Real Japanese Garden」ならびに京都府学研記念公園設計（武田純）

「箱根 サン＝テグジュペリ星の王子さまミュージアム」の事業企画推進（妹尾正己）

自然を基調としたヒーリング・イラストの制作（芳岡秀起）

表 12-2 東京農業大学「造園大賞」の一覧（つづき）

第30回 平成16（2004）年 高等学校における造園教育の向上にかかわる永年の貢献（小坂橋二三男） 北陸地域における伝統的造園職藝の継承教育についての実践活動（久郷慎治） トヨタの森・フォレストスヒルズモデル林の計画・開設・運営に関する貢献（伊藤俊哉） 第31回 平成17（2005）年 樹木に関する出版事業（川原田邦彦） 横浜動物園ズーラシア「オカビの森」ほか設計および監理（勝村実） 第32回 平成18（2006）年 「日本列島植木植物園」事業の推進（近藤増男） 全国都市緑化ふくおかフェア「アイランド花どんたく」事業プロデュース（久保田家旦） 箱根湿性花園の開園から管理運営までの多年にわたる貢献（高橋勉） 日本人造園家としてのラオスにおける環境改善への海外貢献（杉本神公） 第33回 平成19（2007）年 淡路景観園芸学校の開設から運営管理に至る一連の貢献（石原憲一郎） 建築空間域における先端的な緑化事例を創出した技法と施工監理についての業績（佐藤健二） 尾瀬における利用体験上の収容力に関する調査手法の開発とプロジェクトの推進（一場博幸） 第34回 平成20（2008）年 海外の造園家・建築家とのコラボレーションによる造園活動（相馬正弘） 芝生造成・管理産業と研究・技術の振興（山田孝雄） 自然の移ろいを取り込んだ造園の発想からの建築デザイン（藤吉秀樹） 第35回 平成21（2009）年 「Japanese Garden」他の著作・講演・作庭を通じた庭園文化の啓発（小口基實） 横浜みどりアップ推進等、横浜市緑政の本格的展開への貢献（吉田哲夫） 生活者感覚を活かした個人住宅における屋上庭園の作品づくり（池田菜玉子） 第36回 平成22（2010）年 野の花マット・アセタープなどの在来野生種による植生ブロックマットの開発（仲田茂司） 東京ディズニーリゾートの花と緑のランドスケープの主導者としての造園界への貢献（中山好央） 大村市における造園家としての地域活動を通じたまちづくりへの貢献（為永一夫） 第37回 平成23（2011）年 深大寺レジデンスほか一連のマンション・ランドスケープデザイン（山本富雄） アーベインピオ川崎ほか一連の都市自然再生のランドスケープデザイン（北川明介） 花と緑の専門職能を背景とした市民代表としての地域活性化活動（桂川孝裕） 第38回 平成24（2012）年 杉並区のみどり行政・事業の推進（菊池律） 地域文化にフォーカスした映像表現に関する功績（伊藤敏朗） 生きもの画による啓蒙活動の展開（河野修宏） 第39回 平成25（2013）年 仙台市を中心とした花とみどりの啓発に関する一連の地域貢献（鎌田秀夫） 東京大学駒場キャンパスほかのリニューアル・ランドスケープデザイン（小池孝幸） 造園学の視点からの観光計画・事業の推進への貢献（菅原由美子） 第40回 平成26（2014）年 ポートランド日本庭園をはじめとする米国での長年の造園家としての活動実績（平欣也） 関連領域の知見を生かした緑化用植物の利用の拡大と効果の実証に関する研究実績（飯島健太郎） Happiness life～女性ガーデンデザイナーとしての起業・発信・展開～（山中志保）	第41回 平成27（2015）年 新潟を拠点とした郷土造園家としての庭園マネージメントの構築（土沼隆雄） 庭の日常化に貢献するガーデンデザイナーとしての活躍（小倉珠子） 若手ガーデンナーとしての実践と初心者向け庭づくりの啓発活動（天野麻里絵） 第42回 平成28（2016）年 国立劇場を基軸とした古典造園技術の継承による庭園管理への貢献（内山泰幸） イスタンブール市バルタリマン日本庭園を通じた日本とトルコとの国際交流への貢献（森和義） 「谷町空庭」を通じたコミュニティづくりと都市と農村との地域交流への貢献（山内美陽子） 第43回 平成29（2017）年 行政経歴を活かした造園の地域づくりによる郷里・青木村への貢献（北村政夫） リヒャルト・クーデンホーフ カレルギー（Richard Coudenhove-Kalergi） 墓園日本庭園ほか平和と交流を祈る一連の日本庭園作品（野村勘治） 「文化的景観」の概念形成と制度運用の充実に資する貢献（恵谷浩子） 第44回 平成30（2018）年 一連の作庭活動に展開されている伝統技法の継承と後進育成への貢献（野村脩） 造園技術を応用した自然環境復元の実践（櫻井淳） ランドスケープから“地上学”へー場への新たな概念形成とランドスケープの視野を広げる多面的展開ー（石川初） 桜を中心とした花の名所・まちづくりに関する普及啓発活動（和田博幸） 第45回 平成31・令和元（2019）年 加賀の伝統造園手法の継承と活用による現代庭園の創作（野々市芳朗） 造園建設業界における女性活躍推進への貢献（酒井一江） 赤坂 BeeTown プロジェクトによる地域おこしへの活動実績（高橋進） 第46回 令和2（2020）年 母畑温泉八幡屋旅館の庭園・「秋田 森のテラス」等土地の力を喚起した造園活動（山田茂雄）年 「近江・鈍穴流花文」の伝統的庭園技法の保存継承と現代の造園事業への応用展開、地域社会・文化への貢献に関する業績（山村文志郎、山村眞司） 第47回 令和3年（2021）年 市民向け植物観察の実践を通じた「まちのみどり」の普及啓発活動（鈴木純） 第48回 令和4年（2021）年 福岡を起点とした九州における産官学民連携のランドスケープ教育実践（西川真水） 多年草を主体とした風景づくりを軸に自然と地域と人をつなぐ取り組み（平工詠子） 第49回 令和5年（2022）年 ライフスタイル提案まで包括するグリーンクリエイターとしての実績－エクステリアから空間プロデュースまで－（小西 範揚） 日本庭園の伝統技術と思想をふまえた作庭の実践と国内外への日本庭園文化の普及・啓発（井上 勝裕） 映像プロデュースを通じた地域の連携及び活性化・人材育成に貢献する一連の作品制作とその活動（志岐 誠） 地域の風土や文化に着目した書籍・雑誌の編集およびプロデュースなどの一連の作品制作とモノづくり活動（石田（島崎）美佐子） 第50回 令和6年（2024）年 公園緑地・景観などの造園行政の展開（五十嵐康之）
--	--

一方、「公務員」（国、自治体等の公園緑地行政、自然保護行政等）は近年、特に造園職や総合土木職の求人が増大しつつあり、これまでも農大造園が安定的に人材を送ってきた戦域といえます。国家公務員（Ⅰ種）では国土交通省における公園緑地行政、環境省における自然公園行政があるほか、農

林水産省で活躍する者も多く、都道府県や区市町村における公園行政・環境行政には多くの卒業生が進出しています。さらに公務員に近い職域として都市再生機構などの独立行政法人や「財団法人・社団法人」（県や市の公園協会、公園財団などの法人）があります。

表 12-2 造園科学科卒業生の進路

職 域	具 体 例
造園コンサルタント	計画コンサルタント、造園設計事務所、環境調査会社（植生調査等）
造 園 建 設 業	造園建設会社（（株）〇〇緑地建設、（株）□□造園土木等）
総 合 建 設 業	総合建設会社（ゼネコン等）
公 務 員	国家総合職（国土交通省、環境省、農林水産省等）、国家一般職、都道府県庁（公園緑地課、自然保護課、都市計画課等）、東京都特別区・市町村（公園緑地課等）
独立行政法人、 公益法人	都市再生機構、（一財）公園財団、（公財）日本自然保護協会 （一財）日本緑化センター、都道府県・区市町村の公園協会等
教 育 ・ 研 究	中学教員（理科）、高校教員（理科、農業（造園））、専門学校教員
緑化資材生産・流通業	緑化材料生産会社、種苗会社、花卉販売会社、造園施設材料メーカー等
管 理 ・ 運 営 業	住宅団地等の管理会社、ゴルフ場、テーマパーク等の管理運営会社等
進 学	大学院（農大造園学専攻等）、海外留学等

後者は公園緑地等の管理運営に当たるほか、身近な自然の保護活動や文化遺産の管理運営などをおこなっています。

その他、「緑化（造園）資材生産・流通業」（緑化用植物の生産販売会社、造園資材の流通会社など）や造園空間の「管理・運営業」（ゴルフ場のグリーンキーパーやレジャーランドの運営業）などに進む卒業生も少なくありません。また、最近ではガーデニングの講師や花卉販売など、園芸分野との境界領域で活躍する女性造園家も増えてきました。

「教育・研究」部門では農業高校の「造園部門」で教鞭をとる卒業生が、さらに最近のガーデニングブームの中で生涯学習や社会人教育の任に当たっている卒業生もみられます。

このように造園科学科を卒業した後に、その専門知識と技量をもとに活躍する範囲は広範であるといえます。昨今の世界的な経済・社会の変化によって、広範といえども就職環境は刻々と変化しています。社会的状況の変化を常に認識し、将来の目標を常に意識する態度が求められます。

各学年ごとに実施されるガイダンスやチューター制などを通して将来の進路に関する相談にも応じていますので積極的に活用して下さい。

造園科学科では、本学の卒業生を対象に、造園に関して特に優秀な業績を上げ、社会に貢献された方に「造園大賞」を贈呈しています（表 12-1、表 12-2）。

12-3 東京農業大学緑友会

造園科学科の卒業生、大学院造園学専攻の修了生および造園関連の職域に携わっている農大卒業生で組織し、活動して

いるのが「東京農業大学緑友会（Alumni of LATUA）」です。校友会の事業に積極的に参加するとともに、造園関連実務に関連する情報、技術の交流等を通じ、会員相互の啓発、造園領域の向上と発展に資することを目的としています。

東京農業大学緑友会の主たる活動のひとつとして、造園 CPD プログラムの企画・運営があります。造園 CPD は、園に関連する分野の技術者が、日々自分の技術向上や知識の幅を広げる努力（継続教育：CPD = Continuing Professional Development）をおこなうもので、認定された講習会や研修会などの受講や自己学習により、専門的な知識や技術の研鑽を継続していくことです。技術士や RLA（登録ランドスケープアーキテクト）などの有資格者の継続認定条件のひとつになっているほか、企業によっては職能育成のひとつに義務付けているところもあります。

具体的なプログラムとしては、毎年5月に東京農業大学で開催される「緑のフォーラム」における講演会、ポスターセッションの共催のほか、リカレントスクール（東京緑友会）のように各地域の緑友会が主催しているものもあります。

緑友会では、このような講演会や研修会（造園 CPD プログラムを含む）をはじめとして、会員相互のコミュニケーションを積極的に図るために、さまざまな活動をしています。これらの講習会や研修会には、造園科学科の学生のみなさんも参加することもできます。また、緑友会の方々には、各地域の就職活動の相談窓口にもなっていていただいています。

なお、いくつかの都道府県では、地域別の緑友会もつくられていて、現在は、北海道緑友会、岩手緑友会、宮城グリー

ンクラブ（宮城県）、栃木県緑友会、東京緑友会、神奈川緑友会、千葉県緑友会、埼玉緑友会、茨城県緑友会、東海グリーンクラブ（三重・岐阜・愛知）、静岡県緑友会、山梨緑友会、滋賀緑友会、京阪神緑友会、広島緑友会、福岡緑友会、熊本

緑友会、鹿児島緑友会などが組織されています。

最新情報は、緑友会ホームページをご覧ください。

<http://nodaiweb.university.jp/alumni/>

13. レポートの書き方・課題の作り方

講義や演習では授業時間以外に、課題が課せられることがあります。課題の内容は、テーマが与えられるので、まずテーマ内容を十分に理解することが重要です。そして様々な本や資料を調べて、データを示しながら自分の意見や考えをレポートとしてまとめたり、実際の造園空間に足を運び、その現況を写真や図面を使用してパネルとして表現したり、植物の状況を詳しく観察して、その特徴をスケッチで表現したりなど、実に様々です。

それぞれの課題では、どのような大きさの用紙を使用し、どのように表現すべきかが示されることが一般的です。レポートについては、特別な指示がない場合は、下に示した書き方を基本ルールとして参考とし、不明な時は担当教員に確認してください。

最近はインターネットなどを利用すると簡単に情報を得ることもできます。しかし、その情報源が不適切なものも少なくありません。またコピー＆ペーストでネット上に示された情報や他の人の意見をそのまま写したりするのはレポートや課題の意味がありませんので、このような行為は当然大学生として慎まなくてはなりません。また「指定された提出場所」や「提出期限を守ること」は絶対に忘れないでください。

13-1. 表紙の書き方とレポートのまとめ方

図-1のように、右上に授業の科目名、レポートの課題名、サブテーマがある場合は、課題名の下に横棒—●▲■について—やカッコ【●▲■について】などを利用して記入します。中央やや下にレポートの提出年月日、その下に学科名、学年、学籍番号、さらに行をかえて氏名を記載します。なお、所定の表紙が配られている場合には、それを使用します。

レポートの本文をとめる時は、しっかりとめる時には左側2ヶ所、枚数が少なく簡単にとめるには左上1ヶ所をホチキス止めする場合があります。枚数が多く、ホチキスでとまらない時にはダブルクリップなどを使用してください。

13-2. 本文の書き方

a) ワードプロを利用する場合

A4判用紙を縦使いで使用する時は、文字の大きさは10.5ポイントか11ポイントとし、1行に35～40文字、1頁を35行～45行でレイアウトすることが一般的です。また頁番号は中央下、余白は上：30mm、下：25mm、左：25、右15mmが標準的です。

b) 手書きの場合

手書きの場合、最も重要なことは、「読みやすい文字」で読み手が正しく理解できるように「正確内容」を表現することです。筆記用具としては、黒のボールペンや水性ペンなどを使用、消えるインクのボールペン、鉛筆やシャープペンシルは一般的ではありません。ごくわずかな誤字や間違いの時

は、修正ペン・テープを利用して修正しますが、間違いの箇所が多い時などは必ず新たに書き直してください。

A4判レポート用紙を用いる時には、1行おきに横書きすると読みやすく、美しく仕上がりますが、レポート用紙の罫線の幅が広いものは、1行おきにしないで書いてください。ホチキスなどでとめること考え、左側を3cm程度、右側を2cm程度あけてください。また1行の文字数は30～35字程度が目安とし、ページ番号は中央下に付けてください。

13-3. 図・表・写真のタイトルの書き方

図・表・写真を入れる場合は、図-1、表-1、写真-1のように番号を付けて、タイトルを記入します。タイトルの位置は、表は上部に、図・写真は下部に入れます。また、自分が作成あるいは撮影したものではないものについては、出典を明記してください。

例) 表-1 世田谷区の緑地面積（出典：世田谷区（2010）：「水と緑の基本計画」）

図 13-1 レポートの表紙例

13-4. 引用文の扱い方

他の人の研究結果や意見、文章を使うことを引用と呼びます。例えば、“和辻哲郎は桂離宮について「……」（和辻1960）と述べている。”というように書き、その出典を論文やレポートの最後に引用文献として記載します。一方、“和辻¹⁾は”と肩カッコ数字を付けて、最後の文献リストの番号と合わせる記載も使われます。

本文中に記載する著書名は『…』、論文名は「…」で示します。なお、〇〇氏、〇〇博士、〇〇教授などの敬称は省略しても失礼には当たりません。

13-5. 引用・参考文献の書き方

レポートを書くときに引用したり、参考にした文献がある場合は、必ず文末に文献名を記載する必要があります。文献の記載方法は、色々ありますが、基本的なものとしては次のような記載方法があります。

・一般書籍（図書）の場合

著者名、発行年、書名、発行所（発行機関）、使用した個所の頁を記載します。著者名の後ろに〇〇著とは書かないで、編、訳、編著のときに限って記入してください。複数の時は最初の1名のみ記し、〇〇〇〇ほかなどと略するときもあります。頁が1頁の時には、引用、参考とした頁をp.1、p.5とし、頁が連続する時にはpp.12-50と記載します。本1冊を参考とした時は、頁数を記載しないこともあります。

1) 山田太郎（1990）：日本造園論：東京農業大学出版会、

pp.350-360.

- 2) 川畑花子編（1991）：東京公園論：公園緑地協会、p.50.
- 3) Gropius, Walter（1945）：Rebuilding our Communities：Paul Theobald.
- 4) Gropius, Walter, 蔵田周忠他訳（1958）：生活空間の創造、彰国社、pp128-136.
- 5) Gropius, Walter（1943）：Scope of Total Architecture, Harper & Brothers.

・学術雑誌（論文）の場合

著者名、発行年、学術雑誌名、巻（号）、頁を記載します。発行機関名は一般的に省略しますが、地域情報誌など、ごく限定された地域でのみ刊行されているものなどについては、記載してください。

- 5) 山田太郎（1962）：造園計画の基本問題について：ランドスケープ研究 60（2）、15-20.
- 6) 高野正治（2005）：輪島の垣根：能登の民俗と文化（2）、10-20、輪島の地域を学ぶ会
- 7) Gropius, Walter, 池辺陽抄訳（1951）：コミュニティ再建について：建築雑誌 756, 101-120.

・インターネット上のウェブサイトの場合

アドレスを記入し、最後に閲覧・参照した日付を年月日の順でカッコ書きする。

- 8) http://www.nodai.ac.jp/kyoiku_F/noudai_web_kyoiku.html（2019年5月18日参照）

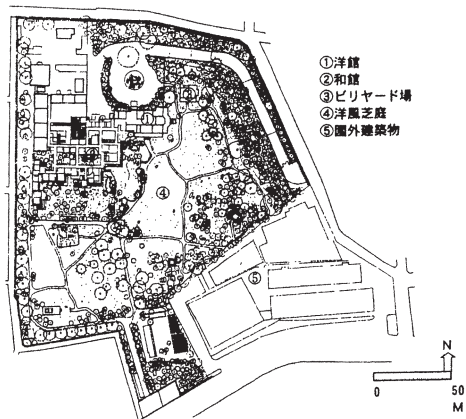


図-5 旧岩崎久彌本邸庭園復原設計平面図¹⁾

表-1 各軽量培土における、草丈・根長重量の測定値

	真珠岩バーライト	リサイクルバーライト(7%)	リサイクルバーライト(40%)
草丈(cm)	6.0	4.6 **	5.3
根長(cm)	18.6	5.2 **	6.5 **
生重量(g)	16.98	20.04 **	17.45
乾燥重量(g)	2.62	4.11	3.69
地上乾重(g)	1.29	2.01	1.73
地下乾重(g)	1.34	2.10	1.96

3 反復実験による平均値

**は分散分析により1%水準で有意差があることを示す。

図13-2 図表およびタイトルの具体的な表示方法

14. 卒業論文・卒業制作ガイド

14-1. 卒業論文・卒業制作の意義

4年生になると、学科で学んで来た成果の「総仕上げ」として卒業論文または卒業制作を必ず全員が手掛けなくてはなりません。4年生になると、自分の希望する教員と相談しながら、ゼミという形式などで、個別指導を受けながら定められた提出期限までに深化させることとなります。一般的には3年生後半のガイダンスへの参加からスタートしますが、3年生前半から研究室に所属し、室員として活動しながら構想を深めたり、あるいは訪れたりしながら研究を始めることもあります。

大学は専門家を養成する教育機関であると同時に、それぞれの学問分野の発展や体系化に貢献する研究機関でもあります。このような大学で学ぶ皆さんが最後に卒業論文を手がけるということは、知識や技術の学習段階を一応終えて、初めて研究領域に一步踏み出すことを意味します。またそれを成し遂げてはじめて大学の卒業生であるという証、つまり「学士」の称号が卒業証書という形で授与されることになります。

この過程での経験は、実社会において未知の問題に遭遇した時に自らそれをどうやって解決するかという能力や、常に独創性を発揮して新たな発展を試みる態度・展開方法などを深める機会としてとても重要です。担当教員と十分に相談しながらも、学生自身の独創性が求められることになります。また論理的な思考法や手際よくものをまとめる絶好の機会であるということも是非忘れないで下さい。

卒業制作は卒業論文と同様に位置づけられています。卒業論文がそれまでの学習とは異なって研究としての色彩が強くなるのと同様に、卒業制作はそれまでの演習課題とは異なり、制作自身の独創性と、制作作品が完成までの基礎資料の収集・分析、構想などのプロセスも極めて重要です。また詳細にわたっての技術的チェックや高度な表現技術も要求されます。内容としては、一般の造園計画や造園設計作品のほか、新しい計画設計手法の提案やレクリエーション利用プログラムの開発など幅広い成果がこれまでに提出されています。

14-2. 卒業論文優秀賞

本学、造園科学科、ならびに大日本農会では、優秀な卒業生に対して、卒業論文優秀賞（東京農業大学）、上原賞および江山賞（造園科学科）、大日本農会賞の各賞を授与しています。

このうち、上原賞は本学科の前身である東京高等造園学校の創設者である上原敬二先生にちなむ賞であり、江山賞は1959年（昭和34）に造園学科長に就任された江山正美先生にちなむ賞です。

例年、造園科学科内では卒業論文の発表会をおこなっています。先輩方がどんな研究に取り組んでいるのか、ぜひ、聴講してください。

表 14-1 ～ 4 は、当学の優秀な卒業論文の一覧になります。

14-3. 卒業論文の作成

研究論文としての要件や研究の進め方、制作の具体的な提出物等についてはそれぞれテーマによって異なりますので、各教員と十分に相談をおこなって実施してもらいますが、以下造園科学科としての卒業論文としての要件、学生・担当教員の双方が確認すべき評価基準、条件について紹介することとします。論文作成中はこの要件や基準を常に頭に置きなが作成に取り組んでください。

a) 卒業論文の要件

卒業論文が研究論文として価値を有するにはいくつかの条件を満たさなければなりません。その主な項目について整理してみます。

①未知の部分の解明を目指すこと：すでに研究済みのテーマを再びとりあげ、同じ方法で研究を試みたのでは何の意味もありません。方法を変えて別の角度から実施してみたり、既往の研究に欠けていた未知の部分明らかにするなど、たとえわずかであってもその分野の研究成果の向上を図ることに意義があります。そうした意味で、対象となる研究テーマに関係して、過去にどのような研究がおこなわれ、またどのレベルまで研究が進んでいるのか、それらを十分に把握しておく必要があります。

その第一歩として、まず「造園情報センター」などに設置されている1995年度から刊行されている「卒論要旨集」を読んで下さい。どのような学生さんが、どのようなことが今までに研究されてきたか、また教員については、研究の対象や興味ある分野がどのようなものが良く理解出来ますので、授業のイメージだけにとらわれないで下さい。また4年生だけでなく、研究室選びや担当教員を考える際のとても良い資料となりますので、普段から是非活用して下さい。

②オリジナリティーの付与：すでに研究済みのテーマであっても、新しい視点や独自の発想にもとづく理論の発展がみられるものは価値がある研究といえます。文献を中心としたものでも、自分の独自の考え方にに基づき引用することにより独創性が生まれるのです。調査、実験を主体とする研究でも、着眼点や方法論を変えてみることによって、より価値のある研究が生まれることが多いのも事実です。

これらをまとめる際には、自分のオリジナルな部分とそれ以外の部分をはっきり区別して記述することが重要となります。

③体系化・総合化を目指す：オリジナリティーがあまり認められない論文であっても、ある特定の論理や主張、

視点などで全体が系統的に説明されているものは、それなりに価値のある研究といえます。

一方、広範な内容を全体として捉え、これを分類整理したり、そこにみられる共通点を導き出したりする総合的研究も同様に論文としての価値は高いといえます。

b) 卒業論文（制作）の評価基準

- ①論文に記載された文章が解り易く、かつ適切に表現されているか。
- ②使用している用語、文体の統一、引用文献の表記など論文の表現、体裁が適切か。
- ③データ内容が信頼でき、図・表などにより適切に表現されわかりやすくまとめられているか。
- ④卒業論文（制作）として、テーマにオリジナリティがあるか。調査・実験などのデータ採取に努力が認められるか。
- ⑤目的・方法・結果などが明解に示され、論文構成全体のバランスに偏りがいないか。

c) 記述の要領

①論文の構成

科学論文の場合、正式には論題、著者名、目次、総論（序論）、研究史、材料及び研究方法、実験成績（結果）、論議（考察）、結論、引用及び参考文献、摘要という順序になります。

また内容に応じて、まえがき、研究目的、研究方法、結果、考察、結論、文献、摘要というように簡略化してもいいですが、総論、本論、結論という基本的な論文の枠組みは崩さないようにしましょう。

②論文の書き方

論文の記述の仕方や引用文献の書き方などは、「レポートの書き方」と同じですので、それを参考にして下さい。ただし表紙の体裁や表紙文字の大きさは次項を参照して下さい。

d) 論文の要旨

卒業論文の内容を要約したもので、研究の目的、方法、対象、結果、考察、結論等の要点を具体的に、また簡潔にA4判用紙2ページにまとめ、学科や各研究室でも保存されます。頁数が少ないので、余白や不要な写真を掲載しないなど、限られた紙面を有効に効果的に使用してください。卒業制作の場合も必ず提出します。

内容の詳細については担当教員の指導を受けることが必要ですが、レイアウトについては次の通りとします。

- ① A4 判、横書き 2 段組（22 字× 46 行× 2 段）とする。

Word 等によって作成し、設定は上余白：25mm / 下余白：25mm、左余白：20mm / 右余白：20 mm、段間：8mm 程度を標準とする。

- ②第1ページ第1段（左）第1、2行目に論文題目を書き、第4行には学籍番号、氏名を右詰めで書く。本文は第6行目からはじめる。
- ③図、写真、表等を挿入する場合には、タイトルを入れる。タイトルの挿入位置は図・写真は下部、表は上部とする。
- ④本文の見出しは原則として統一する。

2026 年度 卒業論文	
(16pt)	
造 園	に 関 す る 研 究
(18pt)	
東京農業大学地域環境科学部造園科学科	
(14pt)	
71 期	41523000 造園 太郎
(14pt)	
指導教員：農大 太郎	
(14pt)	

図 14-1 卒業論文表紙の書き方

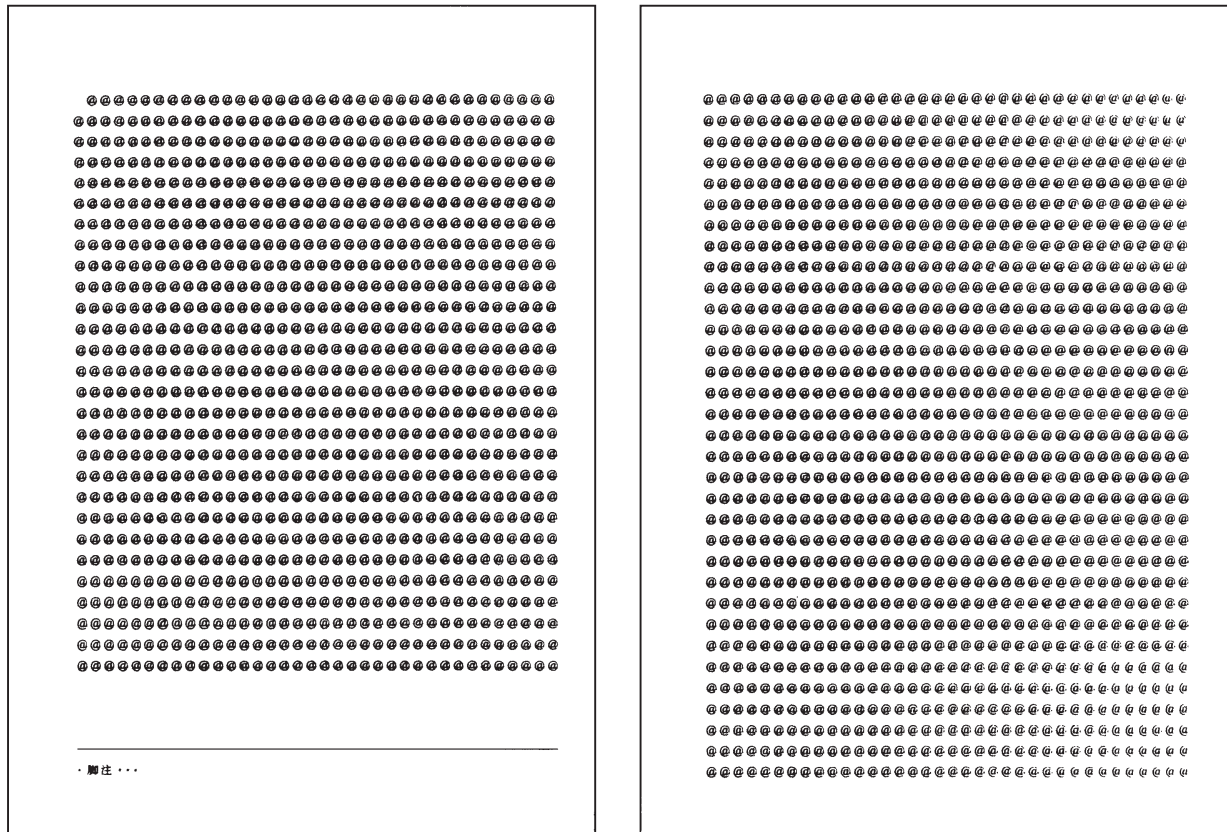


図 14-2 卒業論文本文の体裁

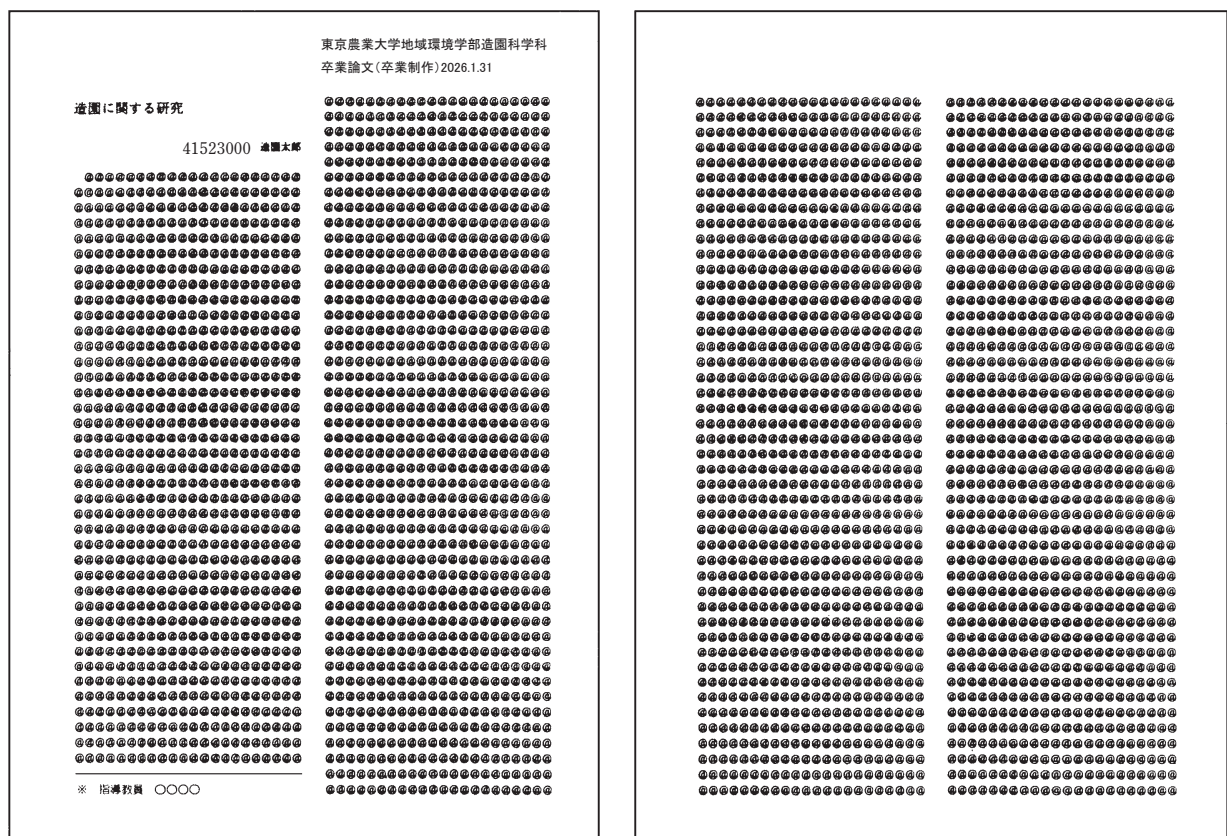


図 14-3 卒業論文要旨の体裁

表 14-1 優秀卒業論文等の一覧

昭和 30 (1955) 年度 学長賞 薔薇の砧木についての研究 (二宮徳三)	昭和 53 (1978) 年度 (続き) 大日本農会賞 瘠悪土壌の植栽に関する実験的研究—特に瘠悪土壌の改良ならびに土壌活性剤の効果について (丸山勝志)
昭和 31 (1956) 年度 学長賞 庭園樹木の生長度についての研究 (船越亮二)	上原賞 造園樹木の毛茸に関する研究 (篠崎孔久)
昭和 32 (1957) 年度 学長賞 冬芽の研究 (北沢清)	江山賞 俯瞰景観の特性と造園計画への展開 (岩佐英治)
昭和 33 (1958) 年度 学長賞 庭園業務の現代性についての研究 (飯田幸雄)	上原賞 造園樹木の風除養生に関する一考察 (関根健治)
昭和 34 (1959) 年度 学長賞 秋父多摩国立公園、秋川渓谷地域自然公園計画 (浜中克彦)	昭和 54 (1978) 年度 学長賞 安定空間の構成に関する基礎的研究—と特に水面の隔絶効果と安心感距、連続感距について (木村裕子)
昭和 35 (1960) 年度 学長賞 主要造園樹木の色彩測定に関する研究 (阿部勉)	三浦賞 東京都内における植栽樹木の需要状況—特に公園、街路樹、中高層住宅、個人住宅について (内田均)
昭和 36 (1961) 年度 学長賞 児童公園に対する児童心理学的考察 (小泉慶子)	上原賞 造園樹木の運搬技術に関する調査研究 (大澤勝彦)
三浦賞 赤穂崎集団施設地区の計画 (堀恭平)	上原賞 植物・植生の環境効果に関する調査研究 (鈴木誠孝)
昭和 37 (1962) 年度 学長賞 環境植栽に関する微気候学的研究 (大泉紀男)	江山賞 農村景観を主体とした農村の観光計画 (鈴木透)
昭和 38 (1963) 年度 学長賞 園路の曲率に関する研究 (岸塚正昭)	江山賞 都市景観の保全手法についての基礎的研究—特に保全対象地の設定方法について (渡辺力)
三浦賞 現代のいでの役割について (小坂明彦)	昭和 55 (1980) 年度 学長賞 植栽基盤整備に関する基礎的研究、特に土壌の物理性からみた利用園地の基盤造成のあり方について (高橋新平)
昭和 39 (1964) 年度 学長賞 土壌硬度が芝の生育に及ぼす影響 (萩原信弘)	大日本農会賞 樹体内水分含有率からみた造園樹木の移植ならびに整枝剪定の適期について (元木敏雄)
昭和 40 (1965) 年度 学長賞 農大キャンパス造園計画 (黛卓郎)	上原賞 神社の立地環境並びに空間構造に関する研究 (武田直樹)
三浦賞 距離の視知覚と恒常現象 (佐竹清治)	江山賞 観光都市の空間イメージに関する研究、特に、京都地域を対象として (赤塚孝志)
昭和 41 (1966) 年度 学長賞 園路に関する基礎的研究—特に歩行の軌跡スラロームについて (後藤友彦)	江山賞 地区計画と対応した住宅地景観についての調査研究 (岩崎通孝)
昭和 42 (1967) 年度 学長賞 造園における Edge の意義 (井上忠佳)	江山賞 外部空間と人体との輻射熱授受に関する基礎的研究 (大場孝一)
三浦賞 千葉県庁造園計画 (椎名豊勝)	昭和 56 (1981) 年度 学長賞 都市公園管理に関する基礎的研究 (金子忠一)
昭和 43 (1968) 年度 学長賞 公園設計における基礎的問題の研究—特に人間の占有空間特性についての考察 (進士五十八)	三浦賞 造園における舗装の研究、特にペデストリアンスペースにおける素材と意匠の関わりについて (大嶋聡)
昭和 44 (1969) 年度 学長賞 景観計画—特に形態に関する基礎的研究 (田村利久)	上原賞 雪田草原登山道周辺域における植生復元に関する実験的研究 (鎌田幸生)
昭和 45 (1970) 年度 学長賞 Hedera 属の造園の利用に関する基礎的研究 (近藤三雄)	上原賞 造園樹木の枝角に関する研究 (神高恵二)
三浦賞 野外彫刻の適正配置に関する基礎的研究 (中田総一郎)	江山賞 造園空間における雰囲気の研究、特に公園空間でのイメージ構造を例として (高塚敏)
昭和 46 (1971) 年度 学長賞 中高層住宅におけるアメニティの研究—その造園学的考察 (笹田直美)	江山賞 風景資源の解析に関する研究、数量化理論の適用による (渡辺義雄)
昭和 47 (1972) 年度 学長賞 ランドスケープの評価手法に関する研究 (荻茂壽太郎)	昭和 57 (1982) 年度 学長賞 鳥類誘致植栽に関する調査研究 (竹田敦夫)
三浦賞 ツツジ類に関する研究 (今村順次)	大日本農会賞 尾瀬地域における絵ハガキの視点と木道との相関についての研究 (大橋洋一)
昭和 48 (1973) 年度 学長賞 緑道に関する基礎的研究 (大内弘)	上原賞 「花」による法面緑化修景に関する実験的研究—有望草種の適性播種量について (望月明宏)
三浦賞 都市環境における樹木の生育状況に関する調査研究、並びに植栽技法への展開 (石井英美)	江山賞 造園施設の水音によるマスキング効果の実験的研究 (矢島智)
昭和 49 (1974) 年度 学長賞 ランドスケープ資源解析手法に関する比較研究 (太田和亨)	江山賞 造園形式と園路曲率に関する研究 (青木善二)
昭和 50 (1975) 年度 学長賞 園路 Edge 処理に関する調査研究—特に境界歩行性について (船橋修一)	昭和 58 (1983) 年度 学長賞 遊水地可川敷の緑化に関する実験的研究—緑化用植物の流水・泥水条件下における耐性について (福沢千栄子)
三浦賞 造園樹木の芽の開舒過程とその造園的応用について (濱野周泰)	三浦賞 住環境設計に関する基礎的研究—特に住宅庭園の生活史的考察 (清水松次)
昭和 51 (1976) 年度 学長賞 造園樹木の根系に関する基礎ならびに応用的研究 (塚本周作)	上原賞 花木類の剪定時期と開花に関する研究 (内田仁)
上原賞 公園芝生地における収容力に関する基礎的研究 (安藤成子)	江山賞 野外博物館における敷地計画についての基礎的研究 (薄井一重)
上原賞 ペーグメントパターンのスケールに関する実験的研究 (加藤貢)	江山賞 流れの造園工学的調査研究—溶存酸素量からみた調査と解析 (小泉友二)
昭和 52 (1977) 年度 学長賞 造園樹木の環境効果に関する基礎的研究—特に樹陰下、芝生面がもたらす微気象効果について (間仁田和行)	江山賞 国立歴史民俗博物館の観光的な資源性と利用の研究 (和田智雄)
三浦賞 老人公園配置計画に関する基礎的研究—特に公園へ理想的到達距離と阻害要因について (植田江身子)	昭和 59 (1984) 年度 学長賞 大規模画地の緑被現況分析に基づく都市緑化研究 (船場利明)
上原賞 造園主要樹木における果実の生育過程と種子の熟度に関する基礎的研究 (角田孝純)	大日本農会賞 サービスエリアにおける利用者の行動に関する研究 (小松秀次・上沼治人)
上原賞 児童空間の設計に関する基礎的研究 (小西雅宏)	上原賞 コンクリート舗装の洗い出し仕上げの実際—凝結遅延剤使用実験による対比効果— (北村巧)
昭和 53 (1978) 年度 学長賞 造園におけるランドフォーム・デザインの研究—特に、築山の幅幅、高さ、斜面勾配、並びに観賞地点からの距離の標準化について (鈴木誠)	上原賞 植生タイプの異なる樹林の環境効果に関する実験的研究・シダ植物の耐陰性に関する実験的研究 (多比良薫)
	江山賞 造園空間における構成要素の密度に関する研究 (北村千春)
	昭和 60 (1985) 年度 卒業論文優秀賞 池塘景観の造園設計—モデルスコープシステムによるビューポイントの選定— (木村敏彦)
	大日本農会賞 緑化による防暑、防寒効果の計量的評価について (益山秀樹)
	上原賞 水琴窟の音響に関する工学的実験 (下山和正)
	上原賞 造園樹木の樹皮に関する基礎的研究 (弥永誠二)
	江山賞 日本人の季節観と美意識に関する研究 (藤本春男)
	江山賞 竹芝地区ウォーターフロント再開発計画 (松本清善)

表 14-2 優秀卒業論文の一覧（続き）

昭和 61（1986）年度 卒業論文優秀賞 震災復興公園に関する史的考察（吉田恵子） 大日本農学会賞 緑の及ぼす疲労回復効果に関する実験的研究（鳥山貴司） 上原賞 舗装材料の相違がランプ照射下の表面温度変化に及ぼす影響について（開口泰生） 江山賞 お台場海浜公園の観光資源とそのあり方（大島準） 江山賞 外国人の日本庭園観に関する比較調査研究（田崎和裕）	平成 5（1993）年度（続き） 江山賞 下町における路地の緑と暮らしに関する基礎的研究（出川葉子） 江山賞 次大夫堀公園の地域影響度に関する研究（我妻綾子）
昭和 62（1987）年度 卒業論文優秀賞 ワイルドフラワーによる緑化の可能性についての基礎的研究—特に適性草種と造成管理手法について—（鈴木貢次郎） 大日本農学会賞 河川流量による護岸の景観的検討（鎌田正典） 上原賞 教科書にみる自然環境の構成要素についての研究（稲葉浩史） 上原賞 造園樹木の育苗における保水剤の使用効果に関する研究—特に活着率・成長率・製品率の動向について—（山崎敬明） 江山賞 公園周辺の土地利用と公園設計に関する基礎的研究（西谷友希）	平成 6（1994）年度 卒業論文優秀賞 都市公園の管理費に関する基礎的研究（栗原崇） 大日本農学会賞 ドウダンツツジの水ストレス反応とその臨界点に関する実験的研究（吉濱恵子） 上原賞 震災復興計画における橋詰広場に関する研究（村上昌之） 江山賞 木製舗装の歩行感に関する研究（神原正和） 江山賞 保養地軽井沢における戦後の変遷—旧軽井沢を中心とする—（大塚有里子）
昭和 63（1988）年度 卒業論文優秀賞 住宅地の緑化率と満足度に関する基礎的研究（大橋広典） 大日本農学会賞 旧浜離宮庭園の生活史的研究（大多和美佳） 上原賞 風除け養生の造園工学的解析（大場二郎） 上原賞 挿し木の遮光率が挿し木苗の充実度に及ぼす影響に関する研究（中村貢） 江山賞 住民サイドからみた農業用水のあり方について—一見沼代用水を事例として—（渡辺和子） 江山賞 光合成速度等からみた室内特有の環境条件下における緑化用植物の成育特性・限界について（栗田瑞江）	平成 7（1995）年度 卒業論文優秀賞 宅地の接動形態の類型化と住宅地の街路景観評価に関する研究（金高絹美） 大日本農学会賞 屋敷林の防暑、防寒効果に関する実証的研究（野上一志） 上原賞 樹皮の色の数値表現と類型分類（服部涼子） 上原賞 公共庭園の高質化に関する基礎的研究—特に公共庭園の適正歩掛についての分析—（井上敏宏） 江山賞 自動販売機の景観的取り扱いに関する研究（助川弘樹） 江山賞 広場の景観と材料の外観のイメージについて（渡部紀子）
平成元（1989）年度 卒業論文優秀賞 ヒノキ科コニファー類の植栽事例とそのデザイン特性に関する研究（松浦由佳） 大日本農学会賞 健康遊具に関する研究（鈴木久徳） 上原賞 甲州鞍馬石のテクスチャと色彩に関する調査・研究（河野嘉孝） 上原賞 ワイルドフラワーによるのり面緑化に関する基礎的研究（角幡朝） 江山賞 人間行動の原点—東北・上越新幹線上野駅におけるサイン計画の一考察—（岡本知美） 江山賞 都市環境における照明効果に関する基礎的研究（島崎美佐子） 江山賞 日本の風景と情緒に関する研究（脇田望）	平成 8（1996）年度 卒業論文優秀賞 富士・箱根山塊における <i>Stewartia</i> 属の分布（高橋孝三） 大日本農学会賞 長野・須坂地域における石積のルーラル・ランドスケープ的考察（倉石明） 上原賞 “公園デビュー”に関する調査研究（大野正人） 上原賞 強酸性土壌条件下における緑化用植物の発芽・成育可能性についての研究（豊田善太郎） 江山賞 長距離自然歩道の計画に関する研究—首都圏自然歩道を事例として—（武田実成） 江山賞 人にやさしい階段設計の数値的解析（小林大介） 江山賞 地形景観の高精度な表示手法に関する研究—厚木農場を事例として—（黒川敦）
平成 2（1990）年度 卒業論文優秀賞 景観予測手法としての造園模型について—倉吉市青少年の森野外劇場—（高梨匠） 大日本農学会賞 宇都宮周辺におけるケヤキの衰退度調査（土屋正行） 上原賞 アトリウム空間へ導入可能なグラウンドカバープランツの水耕順化の難易性についての実験的研究（湯元宏二） 江山賞 横浜における外国文化としての公園の定着に関する一考察（山田能久）	平成 9（1997）年度 卒業論文優秀賞 浄土庭園の形態的特長に関する考察（古井有子） 大日本農学会賞 カシ類 2 種の造園利用形態の東西比較（登内薫） 上原賞 エアープランツの造園空間における緑化利用の可能性に関する研究（伊藤晃子） 上原賞 犯罪の起きやすい公園に関する研究（齋藤和子） 上原賞 東京湾内における海釣り公園の研究（春日章宏） 江山賞 自然環境保全市民ボランティア組織の活動実態に関する研究（植竹薫） 江山賞 東京都における男坂・女坂に関する調査研究（中里典子）
平成 3（1991）年度 卒業論文優秀賞 熊本市における公園緑地整備の推移に関する研究（田畑政敏） 大日本農学会賞 多肉植物の都市緑化空間への導入可能に関する基礎的研究—特にベンケイソウ科について—（飯島健太郎） 上原賞 大刈り込みの表現効果と構成樹種との関係（伊藤和美） 上原賞 電子タキオメータを用いた平板測量システムの開発（塩田典之） 上原賞 佐渡ヶ島観光開発の方向性に関する方法の研究（村田亜希子） 江山賞 リゾート地における企業の利用動向についての研究（友保大地） 江山賞 横浜都心地域に於ける公園生活史的ダイナミズムの考察（渡辺治） 江山賞 東京都区部における都市緑政の現況と課題（石井雄高） 江山賞 大規模公園駐車場の規模に関する研究（泉水良之）	平成 10（1998）年度 卒業論文優秀賞 樹木の気孔と成育環境（横島朝樹） 大日本農学会賞 岩切章太郎の観光思想（黒木さや） 上原賞 鳥類の生息場所としての屋上緑化空間の評価と植栽のあり方（中川聖志） 上原賞 日本人の中国庭園に関する意識の研究（戎鴻慧） 江山賞 積雪都市の公園利用に関する研究（佐藤かおり） 江山賞 公園の価値評価に関する研究（石藤紀子）
平成 4（1992）年度 卒業論文優秀賞 大規模公園駐車場の規模に関する研究（井上力） 大日本農学会賞 箱根周辺の <i>Weigela</i> の分布（門名浩美） 上原賞 ワイヤープレーン法による地形表示を目的とした電子平板システム（佐野泰司） 上原賞 都市の緑地空間及び緑化事業に対する意識構造の国際比較（李宗桓） 江山賞 河川におけるレクリエーション空間の接点空間論的考察（熊谷雄一） 江山賞 原風景の空間構成に関する研究（羽田李久乃）	平成 11（1999）年度 卒業論文優秀賞 スラローム理論による曲線設置法の開発研究（伊藤良和） 大日本農学会賞 盆地地形における土地条件と気温との関係性に関する研究（川崎鉄平） 上原賞 保谷市を事例とした都市生育樹木に対する苦情の発生要因と背景（小河原綾子） 上原賞 マイナスイオンを指標とした植物の効果に関する研究（石井玲子） 江山賞 小公園の愛称に関する調査研究（鍛冶美波） 江山賞 日本におけるプレーリーダーの変遷に関する基礎的研究（三日市香織）
平成 5（1993）年度 卒業論文優秀賞 室内緑化用植物が塩類集積によって被害が発現する限界濃度について—特に NaCl 、 KNO_3 について—（新井俊宏） 大日本農学会賞 都市緑地設計における野鳥誘致手法に関する一考察（柴崎順一） 上原賞 市場からみた造園樹木の需要傾向に関する研究（高須賀陽子）	平成 12（2000）年度 卒業論文優秀賞 長野県白馬村における宿泊地の変遷と現状（出来佳奈子） 大日本農学会賞 コブシの連作障害に係わる要因の解析（染谷治正） 上原賞 リサイクルバーライトの軽量培土及び土壌改良資材としての有効性についての基礎研究（乾泰祐） 上原賞 人々の自然の色彩認識に関する研究（小林真理） 江山賞 名勝庭園における園景を阻害する園外景観の調査研究（林原梨恵）
	平成 13（2001）年度 卒業論文優秀賞 マンションにおける緑地・植栽地の経済的価値評価に関する研究（内藤志帆）

表 14-3 優秀卒業論文の一覧 (続き)

平成 13 (2001) 年度 (続き)	平成 20 (2008) 年度 (続き)
大日本農会賞 英国におけるランプラーズ協会の成立と自然風景地へのアクセスに関する考察 (平野智美)	江山賞 明治の東京における水辺空間の生活の景について (高野麻衣)
上原賞 公園における自然エネルギー利用のフィジビリティスタディ (川中智子)	江山賞 港区・表参道におけるファッションショップの形成過程とその特徴 (長谷川照裕)
上原賞 東京都域における街路樹木の土壌 pH と樹木の生育に関する研究 (松本健一)	平成 21 (2009) 年度
江山賞 金沢八景の景観変遷史 (鈴木乃里子)	卒業論文優秀賞 我孫子市における文化人の評価に基づく景観構成要素の把握 (石川有生)
江山賞 林内景観からみた雑木林の管理範囲に関する研究 (宮崎政雄)	大日本農会賞 開港時の横浜居留地に見る街路整備の視覚化 (金子絵理香)
平成 14 (2002) 年度	上原賞 ヒューケラやイボメアの二酸化窒素浄化能に関する実験的研究 (鹿ノ戸あゆみ)
卒業論文優秀賞 雪吊りのランドスケープと鉛直方向力強度との関係 (大村 充)	江山賞 橋梁計画における感性データベースの構築 (吉田枝里子)
大日本農会賞 普及型地下式支柱 (BSS) 工法に関する開発研究 (染谷好昭)	平成 22 (2010) 年度
上原賞 板橋・サンシティ緑化計画三十年の展開とその緑化運動的意味 (長谷川素子)	卒業論文優秀賞 多摩地域における歴史的ポテンシャルを重視した景観構造の変遷把握 (小俣雅由)
上原賞 子規庵庭園復原に関する基礎的調査 (古山道太)	大日本農会賞 築 32 年のマンションにおける植栽管理について (橋本祐未)
江山賞 動物園における展示形態と解説手法に関する研究 (石橋麻実子)	上原賞 i タウンページにみる現代造園業者の顧客志向 (立石憲樹)
江山賞 棚田における景観阻害要素に関する研究 (宮崎信子)	上原賞 駒井病院における園芸セラピーガーデニング制作「想いでの小道」(田中 博)
江山賞 全国総合開発計画に見る「環境」思潮の史的考察 (稲名一樹)	江山賞 国指定天然記念物馬場大門のケヤキ並木を主題としたまちづくり計画の提案 (魚舩はるか)
平成 15 (2003) 年度	江山賞 3DCG による植物のモデリングと生育シミュレーションへの応用 (山崎千聖)
卒業論文優秀賞 室内環境における植物の空気浄化能力に関する研究 (高泉明日加)	平成 23 (2011) 年度
大日本農会賞 ケヤキの樹形形成と分枝様式に関する基礎的研究 (柳沢美子)	卒業論文優秀賞 国立公園における産業に着目した景観構造について (大貫奈々穂)
上原賞 臨海埋立地における根株移植樹木の萌芽特性に関する研究 (安部陽子)	大日本農会賞 海上から見る東京湾における港湾景観の比較に関する研究 (横山成美)
上原賞 巻機山における植生復元工後の追跡調査 (桑山直子)	上原賞 芝草葉身中の成分分析と競技場の芝生管理の関係性 (勝矢真美)
江山賞 「白楽住宅地」における付加価値形成手法にみる要因分析 (久保田貴志)	上原賞 荒川下流域における地域遺産としての桜の歴史と現状 (木村啓佑)
江山賞 直階段における踊り場の設計標準に関する研究 (藤田恵輔)	江山賞 造園における拡張現実感 (AR) の利用 (吉川皓唯)
平成 16 (2004) 年度	平成 24 (2012) 年度
卒業論文優秀賞 芝生地における蒸発散量と灌水量について (杉岡賢一)	卒業論文優秀賞 引佐久留女木の棚田における水の利用形態と耕作者の関係について (小林成彦)
大日本農会賞 現代の飛石工のあり方に関する研究 (川瀬泰孝)	大日本農会賞 近代茶人・3 代木津宗詮 (車斎) の人と作品 (安田孝治郎)
上原賞 都市域における緑量評価手法に関する基礎的研究 (柴田千草)	上原賞 カリウム施用による芝草土壌中のセシウムの吸収制御について (高井絵理)
上原賞 光触媒を使った緑化による空気汚染防止と浄化の可能性に関する研究 (脇村和子)	江山賞 天理教大教会の伽藍配置と造園空間の特質 (大澤達也)
江山賞 長岡安平の庭園設計に関する考察 (富田修平)	江山賞 夏季のロングパイル人工芝グラウンドにおける暑熱環境とプレーヤーの脱水との関係 ―サッカーの練習に着目して― (濱口雄梧)
平成 17 (2005) 年度	平成 25 (2013) 年度
卒業論文優秀賞 市民ロードレース大会名からみた地域性の分析 (早藤武志)	卒業論文優秀賞 大正・昭和期における杉並区荻窪地域の別荘地としての発展とその特徴 (今井さくら)
大日本農会賞 日本の山岳景観における「御庭」景観に関する研究 (佐々木三貴子)	大日本農会賞 屋上菜園においてミズコンポストを利活用するための指針作成について (藤田幸平)
上原賞 芝草による水耕栽培 Cd の吸収除去に関する研究 (佐藤文)	上原賞 カミガモシダとスナゴケを用いた土壌中の放射性物質除去について (加藤史恵)
江山賞 面的視点を含む親水象徴の景観構造に関する考察 (山下大輔)	上原賞 二次林における微地形及び光合成有効放射の季節変化が林床植物に与える影響 (中島宏昭)
江山賞 二次草原における環境ボランティアの参加意識に関する研究―阿蘇野焼き支援ボランティアを対象として― (牧安奈)	江山賞 現存しない建築物に対する古写真を用いた 3 次元情報の取得について (坂本達)
平成 18 (2006) 年度	江山賞 尾鷲地域における杉線香業に関わる空間構成要素の特徴 (松岡知佐)
卒業論文優秀賞 温水プール利用者の特性と利用者決定要因～高齢者総合福祉施設ケアポートみまき・温泉アクティブセンターを事例にして～ (徳田つづる)	平成 26 (2014) 年度
大日本農会賞 多摩川流域の建築高景観調査 (栗原裕也)	卒業論文優秀賞 下谷区における文化人の居住地の分布とその特徴について (小原真美)
上原賞 DNA 分析による「熱海桜」の親種鑑定 (金澤弓子)	大日本農会賞 塩類土壌環境下におけるステビア土壌改良資材の塩類集積緩和についての研究 (杉浦総一郎)
上原賞 オオヤマザクラの幼苗時の主根切断が樹形形成に与える影響に関する研究 (西村直人)	上原賞 林床の植生管理がユリ科 3 種の開花・結実特性に及ぼす影響 (寺岡睦美)
江山賞 該当なし	江山賞 造園業における運動器の疼痛を引き起こす作業の特徴とその予防・改善対策 (丹羽基文)
平成 19 (2007) 年度	平成 27 (2015) 年度
卒業論文優秀賞 高齢者における移動能力と運動器の疼痛が転倒予防自己効力感に及ぼす影響について―多摩川源流地域を対象として― (小野崎慧)	卒業論文優秀賞 アズマネザサの刈取り管理がタマノカンアオイの種子生産及び集団維持に及ぼす影響 (久野直人)
大日本農会賞 スパティフィラムの耐寒性について (奥津めぐみ)	大日本農会賞 常緑性ツツジ類の樹形を再生する技術としての剪定に関する研究 (多田優愛美)
上原賞 大國魂神社並びに境内地の生活史研究 (福島瑠璃)	上原賞 レーザースキャナによる小田原城址公園の 3D モデル作成と天守閣の視認分析への応用 (北村暢)
江山賞 ドライビングシュミレーターを利用したシークエンス景観の CS 評価 (長島史朗)	
平成 20 (2008) 年度	
卒業論文優秀賞 サクラてんぐ巣病の実態と都市環境の変遷および発病に関する考察 (田留健介)	
大日本農会賞 エドヒガンの立ち性型と枝垂れ型 (斎藤真吾)	
上原賞 三春滝ザクラに見る樹形の変化 (瀧美直子)	
上原賞 皇居新宮殿の造園設計と施工 (細井さと子)	
江山賞 日本庭園における園路の 3 次元測量及び景観の研究 (加藤萌優美)	

表 14-4 優秀卒業論文の一覧（続き）

平成 27 (2015) 年度（続き） 上原賞 葛飾区山本亭庭園の鉢植えによる柴又帝釈天参道美化活動に関する研究（早川佳代） 江山賞 平塚市「吉沢八景選定プロジェクト」が吉沢地区に対する人々の評価に与えた影響（小島周作） 江山賞 絵画に見る江戸・東京における隅田川の対岸のとらえ方（松井淳之介） 平成 28 (2016) 年度 卒業論文優秀賞 カナメモチ (<i>Photinia glabra</i>) 葉身部の光反応と葉色変化（小松茜） 大日本農会賞 道路粉塵における街路樹葉の重金属蓄積について（篠裕喜） 上原賞 植物にまつわる色名の傾向—昭和初期から平成において—（千葉千絵子） 江山賞 茶道表千家不白流における茶花の種類とその利用形態（高橋明子） 平成 29 (2017) 年度 卒業論文優秀賞 水分条件がカタバミ (<i>Oxalis corniculata</i> Linn.) の初期生育に及ぼす影響（若木美穂） 大日本農会賞 二次林の林床におけるムラサキシキブとヤブムラサキの種子発芽と生長特性（森山蒼大） 上原賞 サルスベリの開花枝の生育と剪定時期の関係に関する研究（伊賀静希） 江山賞 世田谷区内まち歩きマップにおける景観資源の傾向と特徴（鶴岡美咲） 平成 30 (2018) 年度 卒業論文優秀賞 三鷹市を対象とした屋敷林の樹林構成及び分布に関する研究（島田友香） 大日本農会賞 世界農業遺産に認定された日本の循環型農業の特徴—徳島県にし阿波地域を事例に—（見上由季） 上原賞 シラカシとウラジロガシの生育土壌条件（鷺見大） 江山賞 簡易密閉挿し方による日照の影響が挿し木の発根に及ぼす影響について（宇津木康平） 令和元 (2019) 年度 卒業論文優秀賞 近代大磯における別荘居住者および居住年代と別荘地分布の関係性（小山七海） 令和元 (2019) 年度（続き） 大日本農会賞 ゴルフ場のアプローチにおけるシークエンズ景観に対する定量分析（大山夏子） 上原賞 竹林と二次林の管理の有無が土壌動物と甲虫類の生息数に及ぼす影響（立石源基） 上原賞 異なる土壌の物理性条件下のスダジイとツブラジイの生育（松永佳子） 江山賞 埼京線沿線における色彩に関する研究（大塚晴織） 江山賞 世田谷区における GI 実装に向けたモデル計画案の作成（澤田隼弥）	令和 2 (2020) 年度 卒業論文優秀賞 ミントのアレロパシー作用による雑草抑制の有無について（木戸万緒） 大日本農会賞 公園内小施設における温熱環境の特性に関する研究—世田谷区内 9 公園を対象として—（関根萌） 上原賞 金子地区の旧道の景観分析による狭山茶の魅力の再発見（山本美知留） 上原賞 近世・近代から続く水わさび産地のわさび田の景観特性（横尾陽奈子） 江山賞 造園空間における 3D レーザ測量を用いた時系列変化の抽出（舘川龍希） 江山賞 COVID-19 流行期における新聞の記事から見たスポーツに対する社会の捉え方（大坪未樹） 令和 3 (2021) 年度 卒業論文優秀賞 岩谷古墳（千葉県栄町）の建設における工事の積算と工程表の作成（飯島巧介） 大日本農会賞 通勤通学時の公共空間における音環境の実態（田島里恵） 上原賞 安行の植木生産業による文化的景観の類型化（太田桃葉） 芝生によるストレス緩和効果について（岩田葵生） 江山賞 鎌倉市滑川地域における土地利用と雨水流出抑制機能に関する基礎的研究（板村東磨） 植木販売に対する AR とフォトグラトメリの活用（奥田朋大） 令和 4 (2022) 年度 卒業論文優秀賞 チャートの石垣から見る大山城の美観性の解析（高須賀千鶴） 大日本農会賞 地域資源を活かした伝統的学芸行事による「地域の教育」のあり方（吉野真理） 上原賞 ソメイヨシノ (<i>Cerasus × yedoensis</i> 'Somei-yoshino') の健全度と土壌物理性の関係（大熊普賢） 江山賞 箱根方面の山岳道路における景観分析と快適走行に関する研究（半沢千） 令和 5 (2023) 年度 卒業論文優秀賞 異なる土壌の種類と栄養条件下におけるスダジイの地上部と地下部の生育量の関係（田村秋汰） 大日本農会賞 TLS における反射率を用いた衰退度診断への応用（山崎雅治） 上原賞 葛西臨海公園における樹木下の風環境と温熱環境に関する基礎的研究（松木麗子） 江山賞 『遊宴日記』からみた六義園と野鳥との関わり（木下愛子）
---	--

15. ポートフォリオの作り方

ポートフォリオ (portfolio) は、皆さんの4年間の学びを表す「顔」です。学生時代の学び、作品、活動などの学習歴と個性が詰め込まれた自己紹介書と言えます。就職活動の際には積極的に活用して自己を表現する材料としても使いますが、1年次から少しずつ作成し、日々更新することで自分自身の学びや成長を客観的に捉える道具としても有効です。造園科学科でJABEE取得を目指す方にも大切です。

15-1. 作品（材料）を整理する

ポートフォリオをつくるには、まず自分の作品（材料）が必要です。例えば次のようなものが考えられます。①環境デザイン基礎演習、造園工学演習、造園総合演習などで作成した図面やその過程に作成したドローイングなど②花・緑演習、造園植栽演習をはじめとする植物・生態学の演習で作成したスケッチやノートなど③ランドスケープ作品論の授業ノートなど、自身が授業で作成した課題レポート、資料、ノートなど④学内外で行われた講演会、ワークショップ、シンポジウムなどの資料や自分自身の考えをまとめたメモなど⑤研究室活動やフィールドワークの記録 ⑥デザインコンペやコンクルの応募作品、パネルや模型⑦自然再生ボランティアや設計・施工のアルバイト、部活動などの課外活動の記録⑧国内外のランドスケープ作品や都市を旅した際の記録、スケッチなど⑨自身で撮影・作成した写真や動画作品など皆さんの学生生活全てがポートフォリオの材料なのです。そうした意識を持つことが重要です。

15-2. 作品の完成度を高める

ポートフォリオの中心になるのは、上記のうち①、②、⑥などの計画設計演習や活動の成果品となります。しかし、ただ課題を掲載するだけでは不十分です。ポートフォリオ作成時には、過去の課題のブラッシュアップをして質を高めたり、講評会のコメントを元に新たに図面を作成したりすることで、よりクオリティの高い作品を目指しましょう。作品の完成に終わりはありません。自分自身だけでなく、他者に客観的に見てもらうことでの気づきもあります。作品は完成した図面だけでなく、その作品ができるまでのプロセスも大切です。メンバーとのワークショップ、スタディ模型、デザインの検討段階のラフなエスキスなども織り混ぜながら、自分の作品を表現するための材料を磨きましょう。

15-3. 作品の編集・レイアウトを考える

単に作品のイメージを一枚載せるのではなく、各種図面や

イメージスケッチ、コンセプト、模型写真などを美しく編集して効果的にレイアウトする必要があります。通常ポートフォリオの編集デザインにはイラストレーターやインデザインなどのソフトを使用します。慣れないうちはパワーポイントでも良いでしょう。自分の作品を他者に効果的に伝えるために、編集やレイアウトのデザインについて学びましょう。雑誌や本、各種のパンフレットは最良の教科書です。町のなかで手に入れられるフリーペーパーや地図なども良いでしょう。

15-4. 全体の構成・流れを考える

ポートフォリオの全体の構成・流れは重要です。見せる相手によって順番や見せる作品を入れ替えます。例えば庭や住宅の外構など小規模のスケールを得意とする設計事務所であれば、密度の高い図面や自身が現場で施工に関わった作品の写真などから始めると良いでしょう。組織設計事務所であれば都市スケールのオープンスペースの設計、都市計画や建設コンサルタントであれば、GIS（地理情報システム）を活用した調査計画、建築・まちづくりのコンサルタントであれば、手描きのフィールドワーク図など業種によってポートフォリオに入れる構成も変えるのです。そしてランドスケープデザインにおいて重要なのは虫から鳥の眼まで幅広いスケールで屋外空間を読む力、描く力を表現することです。皆さんが授業でこなす演習課題だけではとても足りません。ですから、ポートフォリオを少しずつ作成し、日々自分に足りないスキルを知り、それを磨くことが大切なのです。

15-5. ポートフォリオは一生つくり続けるもの

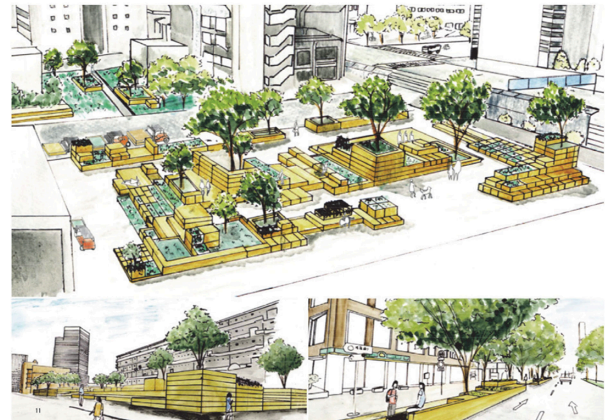
ポートフォリオは就職活動のためだけにつくるものではありません。皆さんが仕事で実務につき、そこで取り組む作品の図面や作品もまとめておき、転職する際にもポートフォリオとしてまとめます。施工の分野であれば施工された作品や技術について、マネジメントの分野であれば、プログラムや活動もポートフォリオの中身になります。皆さんが生き抜くこれからの時代は計画・設計・施工・マネジメントの境界も曖昧になり、そして近接領域の都市計画・土木・建築との境界も溶けていくでしょう。そのような時代に、自分自身を他者に伝える道具がポートフォリオなのです。他者に評価されるためにつくるのではなく、自分自身の成長を確認し、さらに磨いて次のレベルの到達できることを客観的に確認する意味でもポートフォリオは有効です。「自分の考え、自分自身の技術を視覚化して人に伝える」ために、今からポートフォリオをつくりはじめましょう。



坂口翔君の作品：LIXIL 国際建築コンペ（上）環境デザイン演習（下）

Index					
01 場所と人		建築設計 緑地設計作品	市内街	都市 / 都市計画	4-12
02 場所と人		建築設計 緑地設計作品	市内街	都市 / 都市計画	4-12
03 場所と人		建築設計 緑地設計作品	市内街	都市 / 都市計画	4-12
04 キャンパスと都市		建築設計 緑地設計作品	市内街	都市 / 都市計画	4-12
05 都市と自然		建築設計 緑地設計作品	市内街	都市 / 都市計画	4-12
06 キャンパスと都市		建築設計 緑地設計作品	市内街	都市 / 都市計画	4-12
07 都市と自然		建築設計 緑地設計作品	市内街	都市 / 都市計画	4-12
08 キャンパスと都市		建築設計 緑地設計作品	市内街	都市 / 都市計画	4-12
09 都市と自然		建築設計 緑地設計作品	市内街	都市 / 都市計画	4-12
10 キャンパスと都市		建築設計 緑地設計作品	市内街	都市 / 都市計画	4-12
11 都市と自然		建築設計 緑地設計作品	市内街	都市 / 都市計画	4-12

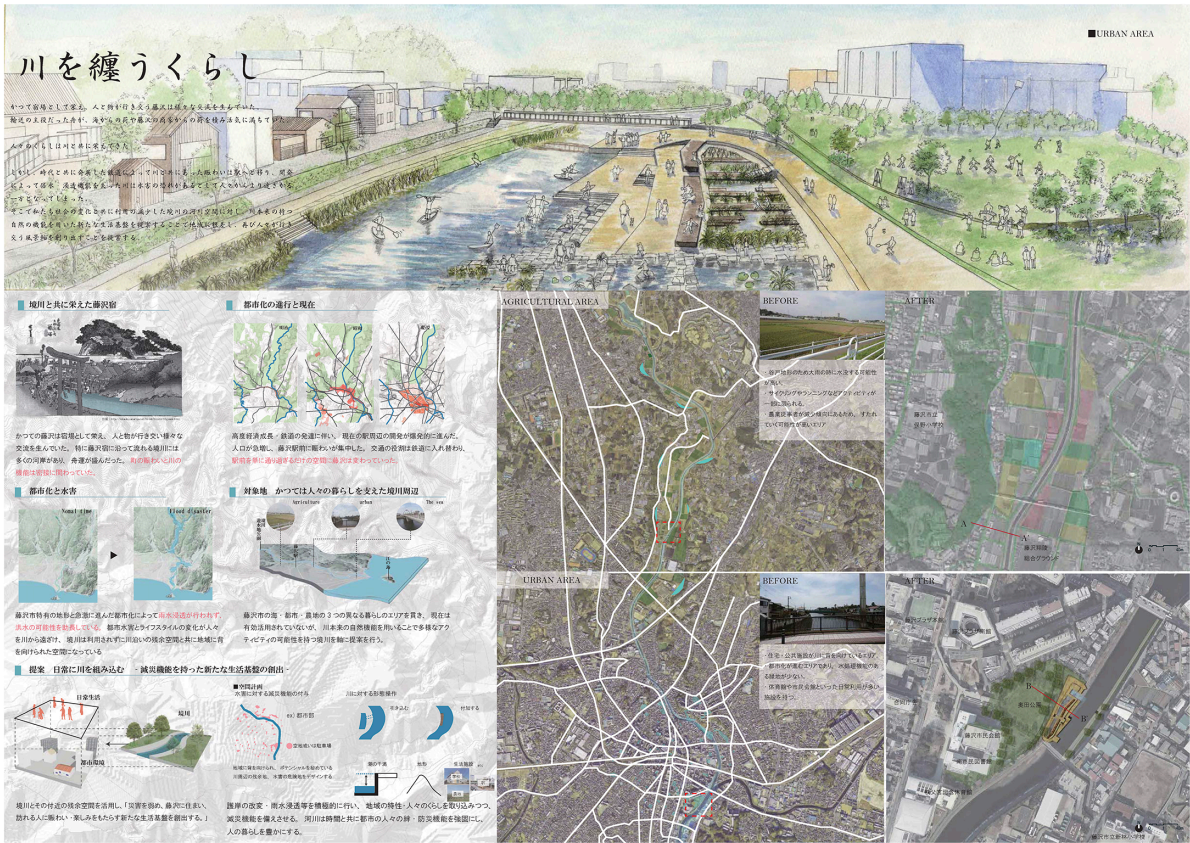
金子将太君の作品：ポートフォリオの構成・目次



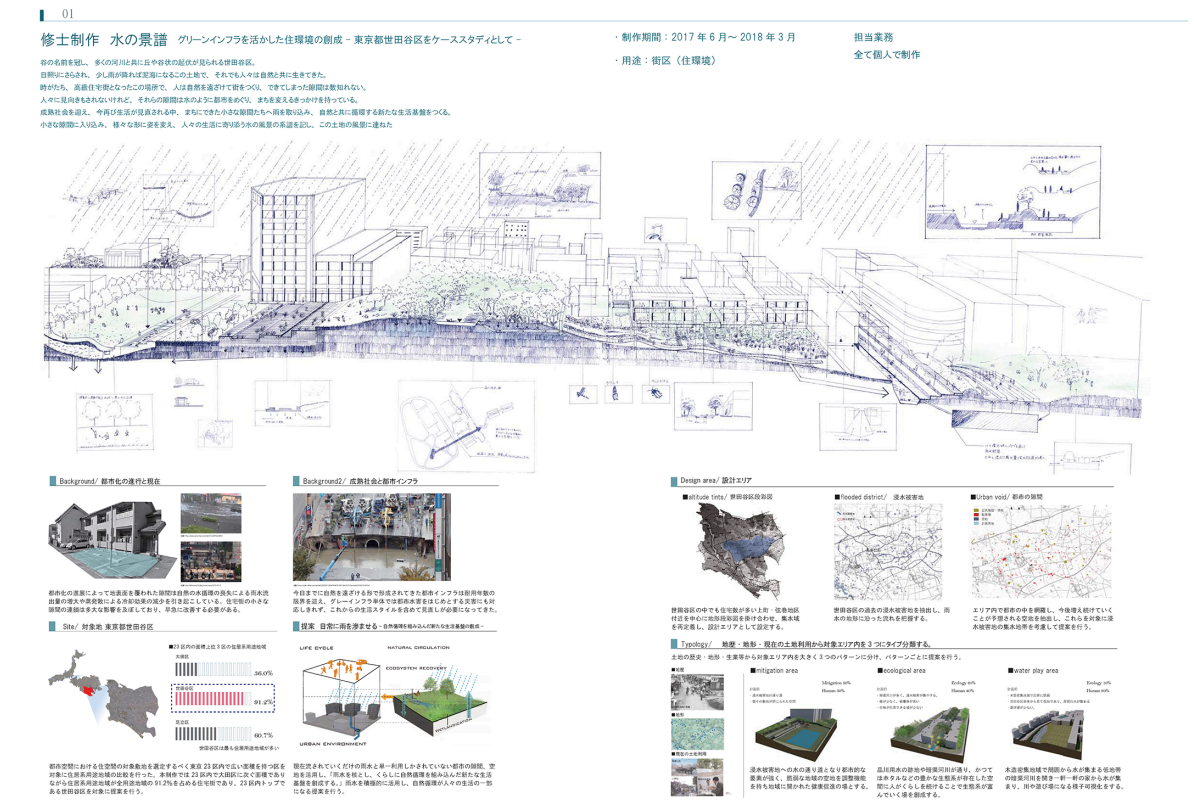
金子将太君の作品：4 年生専門特化演習（環境デザイン）



金子将太君の作品：4 年生 卒業制作



吉井信人君の作品：日本造園学会コンペ 優秀賞



吉井信人君の作品：大学院修士制作 日比谷展優秀賞

16. 学生時代に読んでおくべき本 100 選

近年の造園・ランドスケープ分野の領域の拡大にともない、その入門書、専門書、関連図書が多数出版されています。造園学を学ぶ上で、専門的知識の吸収や、造園家としての物の見方・考え方を養うことは重要です。そこで、こうした学習・研究の助けとなるような図書、造園家としての実務活動に欠かせない専門書・技術書を整理し、その主要なものについていくつかの分野ごとに位置づけをしながら紹介しておきましょう。「100 選」の本とありますが、ゆうに 100 冊は超えています。

ただし、ここに紹介する図書を読みさえすれば事足りるというものではありません。ここで紹介するのは最もポピュラーなほんの一部の図書にすぎないということです。

したがって、ある分野についてより深く知りたいということとなれば、ここで紹介されている図書にみられる文献にあたり、各研究室の書棚でその分野のコーナーを探せば、必ず目当ての図書を見つかることができるでしょう。この点、当学科や本学図書館には、諸君の旺盛な知識欲を満たすあらゆる方面の文献が所蔵されているので、大いに活用してほしいと願っています。

16-1. 造園と造園学を知るための基本図書

造園を学ぶにあたっては、平易な内容で造園と造園学について解説された図書を読み、その全体像を理解することが大切です。庭スケール、公園スケール、都市から国土スケールに至るまでの造園の領域を扱ったり、また造園の職能を紹介したりするものには、以下のものがあります。

- 1) 亀山章監修・小野良平・一ノ瀬友博編：造園学概論、朝倉書店、2021
- 2) 栗野隆：近代造園史、建築資料研究社、2018
- 3) 進士五十八：進士五十八と 22 人のランドスケープアーキテクト、マルモ出版、2016
- 4) 東京農業大学造園科学科編：「造園力」で地球を庭に、東京農業大学出版会、2009
- 5) 森本幸裕・白幡洋三郎編：環境デザイン学、朝倉書店、2007
- 6) 美しい国づくり RLA 展記念出版編集委員会：ランドスケープアーキテクト 100 の仕事、東京農業大学出版会、2007
- 7) 赤坂信編：「造園が分かる」研究会：造園がわかる本、彰国社、2006 年
- 8) 日本造園学会監修・ランドスケープのしごと刊行委員会編：ランドスケープのしごと、彰国社、2003
- 9) 中村一・尼崎博正：風景をつくる、昭和堂、2001

16-2. 日本庭園に関する図書

わが国古来の代表的造園空間が日本庭園です。日本で造園

学を学ぶ学生として、日本庭園の歴史、様式、空間、景観に関する基礎的な知識を修得することが大切です。日本庭園に関する図書は数多いですが、以下が基本的な図書としておすすめです。

- 1) 戸田芳樹・野村勘治：日本庭園を読み解く～空間構成とコンセプト～、マルモ出版、2021
- 2) 小野健吉：日本庭園の歴史と文化、吉川弘文館、2015
- 3) 小野健吉：日本庭園—空間の美の歴史：岩波新書、2009
- 4) 進士五十八：日本の庭園 造景の技とところ、中公新書、2005
- 5) 鈴木誠：日本の庭・世界の庭・暮らしと庭、農山漁村文化協会、2005
- 6) 京都林泉協会：日本庭園観賞便覧、学芸出版社、2002
- 7) 飛田範夫：日本庭園と風景、学芸出版社、1999
- 8) 河原武敏：名園の見どころ 日本庭園 160 を解説、東京農業大学出版会、1996
- 9) 森蘊：日本史小百科・庭園、東京堂出版、1988
- 10) 田中正大：日本の庭園 (SD 選書)、鹿島出版会 1973

16-3. 西洋庭園並びに海外の庭園に関する図書

世界各地には、それぞれの地域性、民族性、気候風土の違いにより、様々な庭園の様式が発達しました。以下が、幅広く西洋庭園並びに海外の庭園を知ることができる図書です。

- 1) ベネロピ ホブハウス著・上原ゆうこ訳：世界の庭園歴史図鑑、原書房、2014
- 2) 岩切正介：ヨーロッパの庭園—美の楽園をめぐる旅、中公新書、2008
- 3) 鈴木誠：日本の庭・世界の庭・暮らしと庭、農山漁村文化協会、2005
- 4) 加藤允彦・仲隆裕・佐々木邦博・尼崎博正・武居二郎：庭園史をあるく—日本・ヨーロッパ編、昭和堂、1998
- 5) 木津雅代：中国の庭園—山水の錬金術、東京堂出版、1994
- 6) 岡崎文彬：ヨーロッパの造園 (SD 選書)、鹿島出版会 1969

16-4. 都市とオープンスペースに関する図書

人間の生活環境の基盤となるのが緑、すなわちオープンスペース（屋外公共空間）の保全や創造です。公園緑地に限らず、街路や広場、空地など多様な形をもつオープンスペース論、そして近接領域である都市計画に関する学びを深めましょう。

- 1) 内山正雄：都市緑地の計画と設計、彰国社、1987 年
- 2) ウィリアム・H・ホワイト：都市とオープンスペース、鹿島出版会、1971 年
- 3) 佐藤晶：日本公園緑地発達史・上下巻、都市計画研究所、

1977 年

- 4) 石川幹子：都市と緑地、岩波書店、2001 年
- 5) 横文彦他：アナザーユートピア「オープンスペース」から都市を考える、NTT 出版、2019 年
- 6) 田中正大：東京の公園と原地形、けやき出版、2005 年
- 7) ヤン・ゲール：人間の街 公共空間のデザイン、鹿島出版会、2014 年
- 8) 馬場正尊：RePublic 公共空間のリノベーション、学芸出版社、2013 年
- 9) マシュー・カーモナ他：パブリックスペース 公共空間のデザインとマネジメント、鹿島出版会、2020 年
- 10) 福岡孝則他：Livable City（住みやすい都市）をつくる、マルモ出版、2017 年

16-5. ランドスケーププランニング（造園計画）に関する図書

ランドスケーププランニング（造園計画）では敷地計画から広域の地域計画まで幅広いスケールに応じた知識と技術の習得が必要になります。調査解析から計画技術には GIS（地理情報システム）も多用されます。実際に計画演習等を通して実践することで理解を深めることができるでしょう。

- 1) イアン・L マクハーグ：デザイン・ウィズ・ネーチャー、集文社、1994 年
- 2) アン・W・スパーン：アーバン・エコシステムー自然と共生する都市、公害対策技術同友会、1995 年
- 3) 大山陽生・荻茂寿太郎他：緑空間の計画技法、彰国社、1983 年
- 4) ケヴィン・リンチ：新版・敷地計画の技法、鹿島出版会、1987 年
- 5) 丸田頼一・島田正文：ランドスケープ計画・設計論、技法堂出版、2012 年
- 6) 日本造園学会編：ランドスケープの計画、技法堂出版、1998 年
- 7) 国土交通省都市局計画課公園緑地・景観：緑の基本計画ハンドブック 令和 3 年度改訂版、日本公園緑地協会、2021 年
- 8) ランドルフ・T・ヘスター著・土肥真人訳：エコロジカル・デモクラシー：まちづくりと生態的多様性をつなぐデザイン、鹿島出版会、2018 年
- 9) Yaser Abunnasr 他：Planning for Climate Change、Routledge、2018 年
- 10) 中島直人他：都市計画学：変化に対応するプランニング、学芸出版社、2018 年

16-6. ランドスケープデザイン（造園設計）に関する図書

ランドスケープデザインに関する図書は近接領域である建

築も含め、多岐に渡ります。デザイン理論・思考方法やデザイン手法や技術の習得、ランドスケープ作品への審美眼を育むための基礎をしっかりとつくりましょう。

- 1) 長谷川浩己：風景にさわる ランドスケープデザインの思想、丸善出版、2017 年
- 2) 石川初：思考としてのランドスケープ 地上学への誘い、LIXIL 出版、2018 年
- 3) 宮城俊作：ランドスケープデザインの視座、学芸出版社、2001 年
- 4) 武田史朗ほか編：テキスト ランドスケープデザインの歴史、学芸出版社、2010 年
- 5) ローレンス・ハルプリン：Process Architecture No.4、プロセス・アーキテクチュア、1978 年
- 6) 進士五十八編：進士五十八と 22 人のランドスケープアーキテクト、マルモ出版、2016 年
- 7) 林野博司：庭園から都市へ シークエンスの日本、鹿島出版会、1997 年
- 8) 竹中工務店設計部：ランドスケープデザインとそのディテール、彰国社、2001 年
- 9) 日本造園学会：ランドスケープ作品選集、日本造園学会、隔年刊行
- 10) 日本建築学会：コンパクト建築資料集成 都市再生、丸善出版、2014 年
- 11) 平賀達也ほか編：図解パブリックスペースのつくり方：設計プロセス・ディテール・使いこなし、学芸出版社、2021 年

16-7. 風景・景観に関する図書

風景論は明治時代から語られてきましたが、近年、美しさの追求は自然風景地から文化的景観、都市景観まで幅広いフィールドを対象としています。それらを網羅するよう図書を紹介します。

- 1) 中村良夫：風景学入門、中央公論新社（中公新書）、1982
- 2) 樋口忠彦：景観の構造—ランドスケープとしての日本の空間—、技報堂出版、1975
- 3) 樋口忠彦：日本の景観 —ふるさとの原型—、筑摩書房、1993
- 4) 土田旭・都市景観研究会：日本の街を美しくする、学芸出版社、2006
- 5) 西村幸夫・中井祐ら：風景の思想、学芸出版社、2012
- 6) 西村幸夫：まちを読み解く —景観・歴史・地域づくり—、朝倉書店、2017
- 7) 小泉武栄ら：自然景観の成り立ちを探る、玉川大学出版部、2013
- 8) 日本造園学会 風景計画研究推進委員会監修：実践 風景計画学 —読み取り・目標像・実施管理—、朝倉書店、

2019

- 9) 篠原修：景観用語事典（増補改訂第2版）、彰国社、2021

16-8. 観光計画に関する図書

温泉地やリゾートをはじめとする観光地の空間は、施設におけるホスピタリティーのみならず、地域づくりの視点が不可欠です。そこで、様々な事例を踏まえた観光計画を学べる図書を紹介します。

- 1) 公益財団法人 日本交通公社：観光読本（第2版）、日本交通公社、2004
- 2) 鈴木忠義：都市と農山村の交流、世田谷川場ふるさと公社、2011
- 3) 総合観光学会：復興ツーリズム 観光学からのメッセージ、同文館、2013
- 4) 大橋昭一ら：観光学ガイドブック、ナカニシヤ出版、2014
- 5) 吉兼秀夫ら：地域創造のための観光マネジメント講座、2016
- 6) 鈴木忠義ら：観光地づくりオーラルヒストリー ―観光計画・観光地づくりの要諦を探る―、公益財団法人日本交通公社、2017
- 7) 奥野一生：観光地域学、竹林館、2018
- 8) 公益財団法人 日本交通公社：観光地経営の視点と実践（第2版）、丸善出版、2019

16-9. 自然公園、自然保護に関する図書

美しい自然環境はただ存在しているわけではなく、国立公園をはじめとした自然公園として保護・保全されており、深く学ぶためには自然科学のみならず社会科学の視点の知識も重要です。そこで多角的な視点からの図書を紹介します。

- 1) 杉山恵一・進士五十八：自然環境復元の技術、朝倉書店、1992
- 2) 沼田真：自然保護という思想、岩波書店、1994
- 3) 村串仁三郎：国立公園成立史の研究 ―開発と自然保護の確執を中心に―、法政大学出版局、2005
- 4) 東京電力監修：尾瀬の森を知る ―ナチュラリスト講座―、山と溪谷社、2006
- 5) 吉田正人：自然保護 ―その生態学と社会学―、地人書館、2007
- 6) 森田敏隆：日本の国立公園・国定公園、クレオ、2000
- 7) 加藤則芳：森の聖者 自然保護の父ジョン・ミュア、山と溪谷社、2012
- 8) 日本緑化センター編：自然再生の手引き、日本緑化センター、2013
- 9) 栗田和弥・松本清・麻生恵：巻機山 ―景観と植生の復

元38年の成果―、公益財団法人日本ナショナルトラスト、2015

- 10) 小野寺浩ら編：国立公園論 ―国立公園の80年を問う―、南方新社、2017
- 11) 自然公園財団：日本の国立公園、自然公園財団、2017
- 12) NHK出版編：国立公園を旅する、NHK出版、2020

16-10. 里地・里山とその保全に関する図書

わが国の自然環境の多様性は、里地里山があることにも起因します。人の手が農林業で働きかけ続けられてきた環境をいかに保全するか、現地では得られにくい情報を紹介します。

- 1) 内山節：「森林社会学」宣言 ―森と社会の共生を求めて―、有斐閣選書、1989
- 2) 亀山章：雑木林の植生管理、ソフトサイエンス社、1996
- 3) 武内和彦：里山の環境学、東京大学出版会、2001
- 4) 中川重年：森づくりテキストブッカー―市民による里山林・人工林管理マニュアル、山と溪谷社、2004
- 5) 養父志乃夫：里地里山文化論（上・下）、農山漁村文化協会、2009
- 6) 重松敏則：よみがえれ里山・里地・里海、築地書館、2010
- 7) 中村浩二ら編：里山復権 ―能登からの発信―、創森社、2010
- 8) 日本緑化センター編：自然再生の手引き、日本緑化センター、2013
- 9) 鷺谷いづみ：自然再生 ―持続可能な生態系のために―、中央公論新社（中公新書）、2013
- 10) 今森光彦：小さな里山をつくる ―チョウたちの庭―、アリス館、2021

16-11. 造園植物とその生理・生態に関する図書

生物多様性に富む日本の植物は、その生活史から生理・生態まで未知のことがまだまだ多くあります。それらを学ぶための基礎となる図書を紹介します。

- 1) 上原敬二：樹木の増殖と仕立て、加島書店、1972
- 2) 沼田真編：植物生態の観察と研究、東海大学出版会、1978
- 3) 畑野健一ら編：樹木の成長と環境、養賢堂、1987
- 4) 大政謙次ら編：植物の計測と診断、朝倉書店、1988
- 5) 多田多恵子・田中肇：植物の生態図鑑、学研プラス、2010
- 6) 岩崎哲也：都市の樹木433、文一総合出版、2012
- 7) 矢口行雄監修：樹木医が教える緑化樹木事典、誠文堂新光社、2013
- 8) 明治神宮とランドスケープ研究会：明治神宮100年の森、

東京都公園協会、2020

16-12. 造園地被・花卉類に関する図書

造園では、自生種から園芸品種までそれらの組み合わせや用途による扱い方も様々です。それらを知る手掛かりにしたいと考えています。

- 1) 林弥栄編：日本の野草、山と溪谷社、1985
- 2) 小沢知雄・近藤三雄：グラウンドカバープランツ 地被植物のデザインと緑化手法一、誠文堂新光社、1987
- 3) 花葉会編、安藤敏夫・近藤三雄：フラワーランドスケピング、講談社、1992
- 4) 浅井元朗：植調 雑草大鑑、全国農村教育協会、2015
- 5) 大橋広好ら編：フィールド版 改訂新版 日本の野生植物 I、平凡社、2021
- 6) 大橋広好ら編：フィールド版 改訂新版 日本の野生植物 II、平凡社、2021
- 7) 門田裕一監修：野に咲く花 増補改訂新版、山と溪谷社、2013
- 8) 鈴木純：まちの植物のせかい、雷鳥社、2019

16-13. 緑化・植栽に関する図書

緑化・植栽に関する図書は多岐に渡りますが、まずは基礎的な造園樹木や植栽に関する知識を身につけましょう。

植物にとって重要な土壌や植栽基盤に関する知識や技術から都市生態学まで、幅広い考え方をすることも重要です。

- 1) 山本紀久：造園植栽術、彰国社、2012 年
- 2) 中島宏：緑化植栽マニュアル、経済調査会、2020 年
- 3) 日本緑化センター：最新・樹木医の手引き改訂 4 版、2014 年
- 4) 飛田範夫：日本庭園の植栽史、京都大学学術出版会、2002 年
- 5) 日本ペドロロジー学会編：土壌調査ハンドブック改訂新版、2021 年
- 6) 近藤三雄：最新グラウンドカバープランツ 地被植物のデザインと緑化手法、誠文堂新光社、2014 年
- 7) 濱谷稔夫：樹木学、地球社、2008 年
- 8) 高田宏臣：土中環境 忘れられた共生のまなざし、建築資料研究社、2020 年
- 9) 飯田晶子ほか編：人と生態系のダイナミクス 3 都市生態系の歴史と未来、朝倉書店、2020 年
- 10) ジル・クレマン：動いている庭、みすず書房、2015 年

16-14. 空間情報・測量に関する図書

測量および空間情報技術は造園空間の位置や寸法を知る上で不可欠な技術です。また、得られたデータを処理する際には、統計学の知識が欠かせません。それらを学ぶ上では、以

下の図書がおすすめです。

- 1) 近津博文・鹿田正昭・佐田達典・熊谷樹一郎・國井洋一・大伴真吾：改訂版 空間情報工学概論 - 実習ソフト・データ付き -、日本測量協会、2020
- 2) 海津優：よくわかる測量、ユーキャン学び出版、2021
- 3) 林雅司・古橋大地：日本地図をなぞって楽しむ 地図なぞり、ダイヤモンド社、2021
- 4) 中川雅文：絵でわかる地図と測量、講談社、2015
- 5) 測量用語編集委員会：測量用語辞典、日本測量協会、2011
- 6) 向後千春・富永敦子：統計学がわかる、技術評論社、2007
- 7) 向後千春・富永敦子：統計学がわかる【回帰分析・因子分析編】、技術評論社、2008

16-15. 造園施工・施工管理に関する図書

庭園、公園を中心とした造園空間の施工方法、施工管理に関する内容は、実際の経験がともなわないと理解しにくいものですが、基本的な考え方や方法を知っておくことが必要不可欠です。以下の図書が造園施工等を学ぶにあたって有効です。

- 1) 日本公園緑地協会公園緑地研究委員会：造園施工管理技術編 改訂 28 版、日本公園緑地協会、2021
- 2) 京都府造園協同組合：造園の手引き、誠文堂新光社、2016
- 3) 木村了：わかりやすい造園実務ポケットブック、オーム社、2008 年
- 4) 厚生労働省職業能力開発局能力評価課監修：造園施工必携 [改訂新版]、日本造園組合連合会、2000
- 5) 造園研究グループ：ランドスケープコンストラクション：技法堂出版、1998 年
- 6) 造園技術研究会：ランドスケープの修景石工事マニュアル、経済調査会、1996

16-16. 造園施設材料に関する図書

造園空間は植物材料だけでなく、石材、木材その他の材料や、公園・庭園各種の施設からも成り立ちます。以下に基本となる石材を中心とした造園施設材料に関する基本図書を紹介します。

- 1) 小林章：石と造園 100 話、東京農業大学出版会、2015
- 2) 高崎康隆監修：庭仕事の庭石テクニック、誠文堂新光社、2013 年
- 3) 河原武敏：日本庭園の伝統施設 鑑賞と技法の基礎知識、東京農業大学出版会、2001
- 4) 彰国社編：環境・景観デザイン百科一光・色・水・緑・景観材料の設計術、彰国社、2002 年
- 5) 小林章・山口剛史・近藤勇一：造園の施設とたてものー

材料・施工ー、コロナ社、2003

16-17. 造園に関する辞典・事典・資料集

学生時代におけるレポートや卒業論文の作成では、用語の定義等をしっかりおこなって客観的な論述を心がけることが必要です。学生時代から、造園並びに関連分野の用語の定義を理解しておくことが重要です。ここでは、造園に関連する辞典・事典とともに、各種便利な資料集について紹介します。

- 1) 篠原修：景観用語事典（増補改訂第2版）、彰国社、2021年
- 2) 白坂蕃・稲垣勉・小沢健市・古賀学・山下晋司編：観光の事典、朝倉書店、2019
- 3) 中村昌生監修：茶室露地大事典、淡交社、2018年
- 4) 西田正憲・飛田範夫・黒田乃生・井原縁：47都道府県・公園／庭園百科、丸善出版、2017
- 5) 庭石大事典制作委員会編：原色庭石大事典、誠文堂新光社、2016年
- 6) 上原敬二：樹木ガイドブック、朝倉書店、2012
- 7) 日本緑化工学会編：環境緑化の事典（普及版）、朝倉書店、2012
- 8) 東京農業大学造園科学科編：造園用語辞典（第3版）、彰国社、2011年
- 9) 濱野周泰監修：原寸図鑑 葉っぱでおぼえる樹木、柏書房、2005年
- 10) 濱野周泰・石井英美監修：原寸図鑑葉っぱでおぼえる樹木<2>、柏書房、2007年
- 11) 小野健吉：岩波日本庭園辞典、岩波書店、2004
- 12) 木材・樹木用語研究会：木材・樹木用語辞典、井上書院、2004年
- 13) 大橋治三・齋藤忠一監修：新装普及版日本庭園観賞事典、東京堂出版、1998年

17. 学生時代に見るべき空間と風景 100 選

造園の対象とする空間は、小さな個人邸の庭先から、街中の公園や屋上緑地、都市農地、大公園、自然公園、文化的景観など、たいへん多岐に渡ります。その多岐に渡る造園がターゲットとする空間や風景をなるべく多く見ておくことは、今後諸君が造園家として仕事をしてゆく際の大事な糧となることは間違いありません。

ここでは、学生時代にみておくべきと教員が進める空間・風景（公開がなされているもの）をそれぞれのスケールごとに紹介します。「100 選」とはありますが今後も充実させながら、100 カ所以上の場所をとりあげてゆくつもりです。積極的に実物を見るように心がけてください。

17-1. 東京の庭園

- 1) 小石川後樂園（文京区後楽）：江戸初期に作庭が開始された水戸徳川家の回遊式庭園。
- 2) 浜離宮恩賜庭園（中央区浜離宮庭園）：潮入の池と鴨場を有する徳川家の回遊式庭園。
- 3) 六義園（文京区本駒込）：江戸期に柳沢吉保によって和歌をモチーフとして作庭された庭園。明治期以降に三菱財閥・岩崎家に改修がなされた。
- 4) 新宿御苑（新宿区内藤町）：高遠藩内藤家の大名藩邸を起源とした皇室庭園。庭園は風景式庭園の形式で空間をまとめつつ、整形式庭園、日本庭園も有する。
- 5) 清澄庭園（江東区清澄）：三菱財閥・岩崎家が全国津々浦々の名石を導入した回遊式庭園。隣接する清澄公園も元々の岩崎家の庭園地。
- 6) 旧岩崎邸庭園（台東区池之端）：三菱財閥 3 代目社長・岩崎久彌が営んだ明治の芝庭。ジョサイア・コンドルが設計した洋館、撞球室が現存。
- 7) 旧古河庭園（北区西ヶ原）：古河財閥 3 代目当主・古河虎之助が大正期に、建築家・ジョサイア・コンドルと 7 代目小川治兵衛を起用して作庭した和洋併置式庭園。
- 8) 肥後細川庭園（文京区目白台）：熊本・肥後細川家が明治期に営み、目白台の緑地を庭園に取り込んだ回遊式庭園。
- 9) 殿ヶ谷戸庭園（国分寺市南町）：江口定條（後の満鉄副総裁）や三菱財閥岩崎家の別荘庭園として営まれた武蔵野の植生、地形を活用した庭園。
- 10) 玉堂美術館庭園（青梅市御岳）：造園家・中島健が作庭した昭和期の枯山水庭。
- 11) 港区立檜町公園（港区赤坂）：東京ミッドタウンに隣接した毛利家の麻布下屋敷の庭園跡を再現した現代庭園。

17-2. 関東の庭園

- 1) 偕楽園（茨城県水戸市常磐町）：水戸徳川家が千波湖を中国の西湖と見立てて江戸期に営んだ庭園。

- 2) 旧田母沢御用邸庭園（栃木県日光市本町）：天皇の御用邸として宮内省内匠寮の小平義近、市川之雄が手掛けた池泉を有する近代の芝庭。
- 3) 古峯神社古峯園（栃木県鹿沼市草久）：昭和の庭匠・岩城巨太郎が作庭した神社の神苑。
- 4) 瑞泉寺庭園（神奈川県鎌倉市二階堂）：夢想国師により、岩盤を彫りこんで作庭された中世の寺院庭園。
- 5) 三溪園（神奈川県横浜市中区本牧三之谷）：明治期の実業家・原富太郎が営んだ広大な回遊式庭園。
- 6) 箱根美術館庭園（神奈川県足柄郡箱根町強羅）：世界救世教教祖・岡田茂吉が地上天国の雛型として具現化した流れ、モミジの疎林を主とした庭園。
- 7) 戸定邸庭園（松戸市松戸）：水戸徳川家最後の藩主・徳川昭武が営んだ明治の芝庭。

17-3. 京都の庭園

- 1) 平等院庭園（宇治市宇治蓮華町）：鳳凰堂の前面に阿字池を配した浄土庭園の代表例。
- 2) 法金剛院庭園（京都市右京区花園扇野町）：平安時代の浄土庭園の現存事例。滝石組はわが国最古のものといわれる。
- 3) 慈照寺（銀閣寺）庭園（京都市左京区銀閣寺町）：足利義政の別荘として営まれた池泉庭園。義政の構想を山水河原者が施工にあたったといわれる。
- 4) 西芳寺庭園（京都市右京区松尾神ヶ谷町）：一般的には自生する苔の美しさから苔寺といわれるが、山の枯山水と池泉護岸にみられる石組を主とした主とした庭園。
- 5) 龍安寺庭園（京都市右京区龍安寺御陵ノ下町）：方丈に面した石庭は日本の枯山水庭の代表例。
- 6) 二条城二之丸庭園（京都市中京区二条通堀川西入ル二条町）：城郭建築の書院に対して作庭された池泉庭園。護岸や中島の石組は豪壮なもので、小堀遠州が作庭指導をおこなったと伝わる。
- 7) 桂離宮庭園（京都市右京区桂清水町）：江戸初期に八条宮別邸として営まれた庭園。江戸期における回遊式の宮廷庭園の代表例。
- 8) 無鄰菴庭園（京都市左京区南禅寺草川町）：明治の元勳・山縣有朋が営んだ別荘で、7 代目小川治兵衛が施工を担当した。近代における自然主義庭園の代表例。

17-4. 公園

- 1) 大通公園（北海道札幌市）：7.8ha の特殊公園。美しい芝生や花壇で知られる。長岡安平の設計
- 2) モエレ沼公園（北海道札幌市）：札幌市郊外のゴミ処理場跡地に計画された 188ha の公園。世界的な彫刻家イサム・ノグチが基本設計

- 3) 日比谷公園（東京都千代田区）：日本初の西洋式公園であり、代表的な都市公園。本多静六の設計。
- 4) 国営昭和記念公園（東京都立川市）：旧立川飛行場跡に建設された 165ha の国営公園。東京ランドスケープ研究所全体設計
- 5) 南池袋公園（豊島区南池袋）：池袋都心部の区立公園。ランドスケーププラス設計
- 6) 久屋大通公園（愛知県名古屋市）：名古屋市中心部に立地する 2km の帯状の公園。日建設計・改修設計
- 7) 中之島公園（大阪府大阪市）：大阪の都心部中之島の東部に立地する公園。現代ランドスケープ設計
- 8) 西川緑道公園（岡山県岡山市）：岡山市中心部を流れる西川用水兩岸の緑道公園。伊藤邦衛設計
- 9) 円山公園（京都府京都市）：国の名勝に指定され八坂神社や知恩院に隣接する京都市初の都市公園。武田五一計画
- 10) 栗林公園（香川県高松市）：高松松平家の別荘を原型もつ県立公園。公園は宮内省・市川之雄の設計
- 11) 水前寺江津湖公園（熊本県熊本市）：熊本市中心部に立地する 50ha の湖水を内包する広域公園。

17-5. 屋外公共空間（広場・公開空地、民地のランドスケープ等）

- 1) 十勝千年の森（北海道十勝清水町）：広大な敷地を生かし、花・アート・農・食をテーマにした北海道を代表するランドスケープ作品。高野ランドスケーププランニング設計
- 2) 館林美術館ランドスケープデザイン（群馬県館林市）：多々良沼畔に立地する建築とランドスケープが一体的に設計された県立美術館。建築設計は第一工房の高橋航一。長谷川浩巳（オンサイト）設計
- 3) けやきひろば（埼玉県大宮市）：さいたま新都心の中心に立地。人工地盤上に植栽された 220 本のけやきで構成される。佐々木葉二（鳳コンサルタント）設計
- 4) 神宮前一丁目民活再生プロジェクト（東京都渋谷区）：東郷神社に隣接、既存樹や地形を最大限生かした住宅のランドスケープ。向山雅之（竹中工務店）設計
- 5) 三井倉庫箱崎ビル（東京都中央区）：日本の現代ランドスケープデザインを探索した小林代表作の一つ。小林忠夫（竹中工務店）設計
- 6) 大手町の森（東京都中央区）：大手町のオフィス街に立地し、自然林を主体とする公開空地。蕪木伸一（大成建設）設計
- 7) 京王プラザホテル雑木林プロムナード（東京都新宿区）：1971 年のホテル開業以来持続する傑作。武蔵野の雑木林と高層ビルを調和。深谷光軌設計
- 8) 中野セントラルパークサウス（東京都中野区）：大規模

再開発地内で公園と公開空地が連続。石川初（ランドスケープデザイン）

- 9) グリーンスプリングス（東京都立川市）立川旧飛行場跡地のランドスケープが核となった再開発。平賀達也（ランドスケーププラス）
- 10) 星のや軽井沢（長野県軽井沢町）土木・建築との協働により作り出された水のランドスケープ。長谷川浩巳（オンサイト）設計
- 11) 式年遷宮記念せんぐう館のランドスケープデザイン（三重県伊勢市）豊受大神宮（外宮）に隣接する森を背景に広がる水と生態のランドスケープ。宮城俊作（プレイスメディア）設計
- 12) アクロス福岡（福岡県福岡市）：福岡の都心に創出された高さ 60m、花鳥風月の山。管理と経年変化により豊かな都市の緑を実現。田瀬理夫（プランタゴ）
- 13) 風の丘葬祭場（大分県中津市）アースディッシュと呼ばれる地形のデザインが特徴的な葬祭場。建築は横文彦設計、三谷徹（オンサイト）設計

17-6. 自然公園・自然風景地・自然再生地

- 1) 大沼国定公園（北海道七飯町）：大沼および小沼を前景に北海道駒ヶ岳の景観が美しい。1922（大正 11）年、国立公園が指定される前から当時は道立公園として指定。本多静六設計の園地などが現存する。
- 2) 高田松原津波復興祈念公園（岩手県陸前高田市）：三陸復興国立公園、奇跡の一本松に隣接する東日本大震災追悼・祈念施設。プレック研究所・内藤廣建築設計事務所が設計。
- 3) 尾瀬国立公園（群馬県・福島県・新潟県）：本州最大規模の湿原が広がり、木道整備推進や車道建設反対運動などが実を結んだ自然保護の聖地ともいえる。自然再生を初めて実施した場所でもある。
- 4) 英国大使館別荘記念公園（栃木県日光市）：日光国立公園、中禅寺湖畔にあるアーネスト・サトウが別荘として構えた後、大使館別荘を経て、公開されている。プレック研究所設計。
- 5) ギャザリア・ビオガーデン“フジクラ木場千年の森”（東京都江東区）：植物はもとより、魚類、石材に至るまで荒川流域を中心とした在来・地場に徹底したビオトープ空間。北川明介ら（グラック）設計。
- 6) 新川丸池公園（東京都三鷹市）：丸池復活を中心に市民参加によるワークショップを積み上げて実現した。国分寺崖線の湧水を活用した復田も実現。戸田芳樹風景計画によるプロジェクト推進。
- 7) 生田緑地ホテルの里（神奈川県川崎市）：現在では貴重となった向ヶ丘遊園近くの休耕田等の土地に、ホテルを

含めた環境学習にも寄与する木道等を整備。整備実施設計をグラックが担当。

- 8) 芦ノ湖キャンプ村（神奈川県箱根町）：富士箱根伊豆国立公園箱根地区にあり、既存の森林を可能な限り残した静寂のリゾート空間を味わえる。広谷敬太郎ら（松田平田設計）設計。
- 9) 巻機山（新潟県南魚沼市他）：魚沼連峰新潟県立自然公園指定。多くの登山客で荒れた自然草原で40年間以上、景観保全活動が続けられている。栗田和弥（東京農業大学）が調査・研究・保全活動を主宰。
- 10) 日本平ホテル庭園（静岡県静岡市）：日本平三保の松原静岡県立公園内に建つ宿泊施設で、富士山方向の眺望を活かした自然環境に馴染む空間である。三谷康彦(MLS)

設計、林義信（稲治造園工務所）施工。

- 11) 田貫湖ふれあい自然塾（静岡県富士宮市）：環境省が設置した富士箱根伊豆国立公園にある自然環境・自然体験施設であり、利用者のための多様なプログラムが体験できる。プレック研究所が設計・建築工事監理。
- 12) 伊勢志摩国立公園 横山展望台（三重県志摩市）：日本の自然公園にはまだ少ない瀟洒なカフェ施設を併設し、英虞湾を座って一望できる、段差のついた広いデッキを設計。八色宏昌ら（景域計画）設計。
- 13) 「野みちをゆく」フットパス（熊本県南小国町）：阿蘇くじゅう国立公園内にある黒川温泉郷の背後に広がる森から草原の展望台までをフットパス（遊歩道）で繋ぐ。徳永哲ら（エスティ環境設計研究所）設計。

造園科学科指針 2025

発行日：2025（令和 7）年 4 月 1 日

編集：東京農業大学地域環境科学部造園科学科

発行者：水 庭 千鶴子

〒156－8502 東京都世田谷区桜丘 1－1－1

TEL 03－5477－2911（地域環境科学部事務室）

印刷：株式会社ソウブン・ドットコム

© 2025 Department of Landscape Architecture Science,

Tokyo University Agriculture

表紙イラスト 大山 佑



Department of Landscape Architecture Science Faculty of Regional Environment Science
Tokyo University of Agriculture



東京農業大学地域環境科学部造園科学科
156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1

学籍番号：
氏 名：